

2013 年度活動報告

CJLE Program & Activity Reports (2013)

目次

1. 各科目についての報告	2
2. 2013年度 Placement Test実施報告	86
3. 2013年度日本語相談室実施報告	90
4. 2013年度立教大学漢字検定試験実施報告	96
5. 2013年度日本語自主学習用図書貸し出し実施報告	98
6. 留学生による日本語スピーチコンテスト実施報告	100
7. 日本語教育センターシンポジウム実施報告	100
8. 日本語教育センターニュースレター発行報告	101
9. センター員活動報告	102
10. 2013年度FD記録	106

2013年度日本語教育センター運営体制

2013年度日本語教育センター会議開催記録

1. 各科目についての報告

2013 年度 J0 授業記録

コース概要

J0 は、日本語の学習経験がなく、帰国後、継続して日本語を学習する予定がないものを対象としたサバイバル日本語のコースである。

担当者名：＜前期＞高橋雅子、保坂明香 ＜後期＞保坂明香、小森由里

授業コマ数：週 3 コマ

受講者数：前期 4 名、後期 16 名

使用教材：『NIHONGO FUN&EASY』、プリント他

目標

日常生活に必要なサバイバル的日本語表現や語彙を身につける。また、ひらがな・カタカナの読み書きも身につける。

授業の方法

J0 では、日常生活でよく出会う場面や、大学生活を送る上で必要となりそうな機能を取り上げ、そこで使用される表現や語彙を学習した。

毎回の授業では、まず、ひらがな・カタカナを 10 字ずつ学習した。かなの練習が終わると、その日に学習する場면을提示し、必要な語彙を導入した。そして、重要な文型や表現をキーセンテンスとして学習し、口頭練習を行った。最後に、その日の場面の全体の会話練習や、タスクを行った。J0 で選定した場面・機能とそれぞれのキーセンテンスは以下の通りである。

場面	キーセンテンス
挨拶 自己紹介	おはようございます、こんにちは、こんばんは、ありがとうございます はじめまして/（私は）～です/～人です/専門は～です/どうぞよろしく/ ～さんは～ですか?/はい、いいえ/～さんは?/お仕事は?/お住まいは? /お国は?/N が好きです、好きじゃありません
場所を尋ねる	この辺に～、ありますか/～はどこですか/～に行きたいんですが…
買い物	～ありますか/いくらですか/～円です/～ください

レストラン	～、お願いします/Nで
許可を得る	Nでいいですか/Vでもいいですか
依頼する	Vてください
予定・行動について話す	～に行きます/行きましょう/Vます・ました/何をしますか・何をしましたか/Vたいです
感想を言う	～はどうですか・どうでしたか/形容詞・形容詞の過去形

上記の内容以外に、数回の授業が終わるごとに、「Activity」の時間を設け、日本人学生をボランティアとして教室活動に参加してもらい、それまで学習した内容の復習と応用練習を行った。また、習字や暑中見舞いを書くなど日本文化の体験の時間も数回設けた。

学期の最後には、このコースで学習した文型や語彙を用いたスピーチを行った。

結果と課題

<前期>

学生数は4名と少人数であったが、積極的かつ意欲的に学習に取り組む学生が多く、授業内活動は活発に行なわれた。アクティビティや作文の執筆にも意欲を持って臨み、最終課題であるスピーチでは、それぞれの能力と個性が発揮された内容となった。文字習得にも意欲的で、ほとんどの学生がひらがなとカタカナを十分に習得した。学生からの要望により、授業後半にいくつかの漢字を紹介した。先学期からの課題であった表現の定着については、今学期は教科書の表現の暗記を宿題に課した。結果、以前より定着が図れたように思われる。しかし、授業後半になると、徐々に前半に学習した表現や文型を忘れる学生が見られた。表現の定着について、今後も工夫をしていきたい。

<後期>

後期のJ0は、出席率が高く、授業や活動に対し非常に意欲的で、質問や意見が多く、活発で真面目なクラスであった。学生数が16名で人数が多いクラスだったため、コースはじめはクラス全体の運営は容易ではなかったが、ムードメーカーの役割を果たす学生がクラスを明るく盛り上げてくれ、皆と一緒に日本語を学習するという雰囲気が徐々に作られていった。

学習意欲の高い学生が多かったため、もっと多くのことを学びたいという声があがり、サバイバルのための表現や語彙だけではなく、動詞や形容詞の活用なども体系立てて導入した。学習項目を修正することで意欲的な学生の要求に応えられ、また、クラス全体もより熱心に日本語学習に取り組むようになったと考えられる。

ただ、後期も語彙の定着がなされず、クラス前半に紹介した語彙を後半には忘れており、会話やスピーチに生かすことができない様子も見られた。授業内では、限られた語彙、文型でも定着させ、実際に使用に生かすことが重要であることを強調したが、特に語彙の定着が見られなかったことは残念であり、今後の課題かと思われる。

2013 年度 J1 授業記録

コース概要

J1 は、日本語を学習したことはないが、ひらがな・カタカナは既習である学生、及び日本語学習の経験はあっても、ごく限られた知識しか持たない学生を対象とし、週 5 日の授業を通して、日本語での基礎的な表現を学習する初級のコースである。

コースの詳細は、以下の通りである。

担当者名：<前期>藤田恵（文法 1）、沢野美由紀（聴解会話、文法 2）、
御子神佳奈（読解・作文、総合スキル）、小松満帆（コースヘッド）
<後期>藤田めぐみ（文法 1）、御子神佳奈（聴解会話、総合スキル）、
小森由里（文法 2）、小松満帆（読解・作文、コースヘッド）

授業コマ数：週 5 コマ（文法 1、聴解会話、文法 2、総合スキル、読解・作文）

受講者数：前期 7 名、後期 6 名

使用教材：独自教材

目標

日本語の表記や発音を含む、基礎的な能力を身につけ、買い物や道の利き方など、日常生活の基本的な活動で日本語が使えるようにすることを目標とした。また、ひらがな、カタカナ標記、基本的な動詞や形容詞の活用、約 500 語の単語を学習することとし、各スキルのクラスでは以下を目標にした。

文法 1：名詞文、形容詞文、動詞文それぞれの最も基本的な文型、及び助詞、動詞、形容詞の基本的な活用について理解し、それらを日常生活の場面で使えるようになること。

聴解会話：文法 1 で習った文型や語彙を実際の日常生活の場面で使えるようになること。

文法 2：文法 1 で習った文型や語彙を使って、正確な短作文ができるようになること。

総合スキル：文法クラスで習った文型や語彙を正確に運用できるようになること。未習の語彙や文型があっても、対応できるスキルを身につけること。

読解・作文：文法 1 で習った文型が使われている文章を読み、習った文型や語彙を使って 400 字程度の作文を書けるようになること。

文型リスト

J1 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	文法項目
プレレッスン	・ Exchanging greetings

	<ul style="list-style-type: none"> • Learning some survival expressions • Learning the writing system of Japanese language • Learning basic numbers • Learning basic Japanese sentence pattern(Noun sentence) • Learning basic words(Date, Time expressions)
1	<ul style="list-style-type: none"> • Noun sentence ～は～です • Demonstrative pronoun こ・そ・あ・ど • Noun modification(kinking nouns) ～の • Particle “also, too” ～も • Particle(question marker) ～か • Interrogatives なに・だれ・どこ • Pronominal “one” ～の • ”please give me ---“ ～をください • Counterword ① ～円、個、才、ひとつ • Sentence ending particles ～よ、ね
2	<ul style="list-style-type: none"> • Polite speech and casual speech • い／な Adjectives as predicate ～は Adj.です。 • Use 2 or 3 adjectives to describe topic て-form of adjective and sentence connectives ～が、それに、でも • い／な Adjectives as noun modifiers • Interrogatives どんな、どう
3	<ul style="list-style-type: none"> • Topic-subject construction with adjective predicates ～は～が Adj.です。 • Adverbs indicating ‘degree’ • Explaining reasons ので、から
4	<ul style="list-style-type: none"> • Verb groups, dictionary form of verbs • Polite and casual verb sentences • Particle を(Object marker) • ～は～を V sentences • Particle で(Location marker) • Particle で(Instrument marker) • Particle に／で(Destination/direction marker) • Mimetic words ① Eating, drinking
5	<ul style="list-style-type: none"> • Giving and receiving something ①

	<ul style="list-style-type: none"> • ~は Space/area/pass を V(motion verbs) • て form of verbs • Making requests ~てください／～ないてください • の : Noun equivalent marker • V て、V て、V。 • Asking permission/Giving permission/prohibition ~でもいい／～てはいけない • Mimetic words ② Watching,seeing,speaking
6	<ul style="list-style-type: none"> • ~は Object に V sentence • Topic は V(Intransitive verbs) • Particle に(Time marker) • ~から～まで • Duration on time ~間 • Approximate time/approximate quantity ごろ、ぐらい • Time expressions まえに、あとで、てから • ~と思う • ~だろう／だろうと思う • Mimetic words ③ Condition of the body
7	<ul style="list-style-type: none"> • Sentence of existence and locatives いる、ある • Counter word ② ~人、枚、冊、本、匹、階 • だけ／しか • N1 か N2(or)／N1 も N2 も(both,neither) • N1 は A、N2 は B(Contrast は) • Noun と／や、Noun/adjective/verb て form、V-たり V-たり Adjective/verb し • ~かもしれない
8	<ul style="list-style-type: none"> • V-ている(Continuous action,state) • Verb with clothing 着る、はく、ぬぐ、かぶる、かける、する • が used to describe a condition, scene before one's eyes • ~中(during, while, through) • もう／まだ • ~ませんか、～ましょう • Questions word + か／も • ~んです ①

9	<ul style="list-style-type: none"> • Giving advice ～たほうがいい • Particle に(amount of frequency per time unit) • Adverbial usage of adjectives • Noun になる • Conditional ① : と • Chang of state, condition(adjective + なる) • Mimetic words ④ Pain
10	<ul style="list-style-type: none"> • に(final destination)／を(point of departure) • V-たことがある(experience) • Adjectives indicating one's own emotion/feeling/desire/pain • Third person's emotion/feeling/pain/desire • Conditional ② : たら • Even if ～ても

授業の方法

J1は週5日のコースであり、文法1、聴解会話、文法2、総合タスク、読解・作文の順番に授業を行った。各スキル別の授業の方法は以下の通りである。

文法1：文法と語彙のテキストに沿いながら、パターンプラクティスを中心にした練習を行った。

聴解会話：聴解では、文法で学習した文法項目に関し、市販の聴解教材を適宜使用しながら聴解練習を行った。会話では、当該文法項目を使用する実際の場面を設定し、日常生活で使えるようにするための会話練習を行った。

文法2：文法1で習った語彙や文型について、書き練習を中心とした活動を行った。

総合スキル：文法で学習した文法項目を使用する総合的なタスクやロールプレイ、スピーチなどを行った。また、必要に応じて聴解や読解も組み込んだ活動を行った。

読解・作文：隔週で読解と作文のクラスを行った。読解では、文法1で習った文型が使われている文章を読み、質問に答えたり、自分の意見を日本語で述べたりする練習を行った。作文では、習った文型や語彙を使って400字程度の作文を書く練習を行った。また、作文の時間には、漢字クイズを実施した（希望制）。

結果と課題

<前期>

文法1：前期クラスの学生は、予習をしてくる学生が多く、毎回実施していた語彙クイズの点数は、ほとんどの学生が満点近くをとっていた。さらに、学期前半の学習目標である形容詞と動詞の活用

も早い段階から定着しており、前半の学習目標は全員達成できたと言える。しかし、学期後半に入り、文法項目や表現がやや複雑になってからは、クラスの理解度にばらつきが見られた。今後はこの点を改善すべく、導入方法や練習方法を工夫していきたい。

聴解会話：できるだけ大学生活や実生活につながることを目的に、聴解・会話練習を行った。前半はあまり発話に積極的ではない学生もいたが、回を追うごとにそのような学生も自分から参加するようになり、アイデアを出し合ったりお互いわからない点を補い合うなどして活動を行っていた。クラスとしての成果はあったと言える。聴解は、応用問題も聞くようにしていたが、後半は文法1の時間だけでは理解・定着しなかった項目の説明などに時間を取ることがあり、基本的な問題しか聞けないことが多かった。このため能力の高い学生には物足りない部分があったのではないかと思われる。反省として、聞く能力の差にどう対応するか、教材の選び方や、事前の予習として宿題を出すなど考えたい。

文法2：ほとんどの学生が意欲的かつ積極的で、日本語学習をおもしろいと思って取り組んでいることが実感できるクラスだった。文法1の復習が基本的によくできていたことも助けになった。ただ、ペア/グループワークを課すと、学生同士の能力とペースの違いからうまくいかないことがあった。できるだけ自分のことばで工夫し、文を作ろうとする学生がいる一方、テキストの例文を覚えることが第一だと考え、それで完結してしまう学生もいて、その意識の差がなかなか埋まらなかったためである。また、後半に入り文法が難しくなるにつれ、その時間に行った作業を全体で共有し、振り返るための時間がなかなか取れなかった。これらの点について、どのように対処すればいいか、今後考える必要がある。

総合スキル：ペアやグループワークの際に、作業が終わった学生が英語で私語を始めることが多く気になった。作業が終わった学生には、その活動からさらに話を広げ日本語で会話をするよう指示はしたが、少し時間が経つとまた英語で話をしてしまっていた。追加の課題を与えるなど、対処法を考える必要がある。日本人へのインタビュー活動を今学期も取り入れたが、学生からは概ね好評であった。今後もできるだけ多くこのような機会を設けたい。

読解・作文：読解はわからない文型や語彙があっても、文脈から意味を推測し、質問に答えられるように練習をした。まずは辞書を使用しないで読む練習をさせたが、中にはつい辞書に頼ってしまう学生もいた。今後はまず辞書を使わないで読むということを徹底させたい。作文は丁寧に、文法や語彙にもよく注意を払いながら書けている学生が多かった。漢字を使う努力も見られ、学習意欲の高さがうかがえた。

<後期>

文法1：後期クラスは、授業開始時に行う語彙クイズで点数のとれない学生が多かった。また、動詞と形容詞の語形が定着しないまま学期が進み、学期後半の授業についてこれない学生もいた。今後は学生に予習と復習の必要性を伝えるとともに、遅れをとるような学生が生まれないように授

業方法を改善していきたい。

聴解会話：聴解は、その課の文法がきちんと理解できていた学生にとっては、あまり難しくなかったようであったが、理解できていなかった学生にとっては難しい問題もあったようである。語彙レベルより文法レベルで出来に差がでていた。毎回、問題を解かせた後に文法の復習をしていたが、問題を解かせる前に文法の復習をするというアプローチも試みるべきであった。

会話は、課が進むにつれて、どの文型でどの活用形を使うのかが整理できていない学生が増え、発話の中に多く誤りが見られるようになった。それが積み重なると最終的に学生への負担が増えてしまうので、早い段階での文型定着を図る必要がある。

文法 2：総じて真面目に取り組んでいたが、動詞や形容詞の活用を正確に身につけるのを苦手とする学生が多かった。クラスでは復習の時間などを活用し、正しい形式を定着させることにできるだけ時間を費やしたが、全体的に独力で十分に復習できていなかったようである。今後は、自律学習についても指導していきたい。

総合スキル：総合スキルでは、ペアやグループになって話すなどのインタラクティブな活動を多く取り入れたが、学生間で盛り上がると、現レベルでの日本語では伝えきれずに思わず母国語を使用してしまうケースが多く見られた。日本語だけで話すようもっと指導を徹底すべきであった。

読解・作文：全体的に、読解、作文ともに、遅れて提出する学生が多かった。また、遅刻や欠席をする学生が数名いたため、クラス全体の雰囲気、ややだらけてしまった時期があり、その雰囲気を引き締めるのに労力を要することが多かった。しかし、授業に出席した際には、全員が熱心に目標を持って課題に取り組み、また、クラスメイトとの協働もきちんと行う学生が多かった。その結果、クラスメイト同士の仲が良く、助け合う様子もよく見られた。読解、作文のいずれにおいても、毎回出席し、きちんと宿題も提出していた学生には、能力の伸びが見られた。しかし、学生間で能力にやや差が出てしまったため、今後は、個別指導等を丁寧に行うなど、遅れてしまう学生へのケアを工夫する必要がある。

2013 年度 J1S 授業記録

コース概要

J1S は、日本語学習の経験はあっても、ごく限られた知識しか持たない、あるいは文法項目が既習であっても、運用能力が不足していると思われる学生を対象とした、初級のコースである。週 3 日という少ない授業時間の中で、既習の文法項目も含め、運用能力を高めることを目的としており、週 5 日の J1 コースよりも、ややレベル的に上の学生を対象としている。

コースの詳細は、以下の通りである。

担当者名： <前期>小松満帆（コースヘッド）、小森由里、林里香

<後期>小松満帆（コースヘッド）、小森由里、藤田恵

授業コマ数：週 3 コマ（文法、読解・作文）

受講者数：前期 3 名、後期 7 名

使用教材：独自教材

目標

日本語の表記や発音を含む、基礎的な能力を身につけ、買い物や道の利き方など、日常生活の基本的な活動で日本語が使えるよう、運用能力を高めることを目標とした。また、ひらがな、カタカナ表記、基本的な動詞や形容詞の活用、約 500 語の単語を学習することとし、各スキルのクラスでは以下を目標にした。

文法：条件や仮定の表現、受身や使役などを含むやや複雑な初級文法を理解し、使えるようになること。

また、習った文型や語彙の運用能力を高め、実際の日常生活でも適宜使えるようになること。

読解・作文：文法 1 で習った文型が使われている文章を読み、習った文型や語彙を使って

400 字程度の作文を書けるようになること。

文型リスト

J1S で扱った文法項目は J1 と同様であるので、省略する。

授業の方法

J1S は週 3 日のコースであり、J1 で学習する文法項目が既習ではあるものの、それらを運用するまでには至らず、使いこなせない学習者を対象に開講されている。そのため、導入よりも、運用練習に力を入れてコースを運営した。

J1S では、各課を 3 コマないし 4 コマで学習するというペースで進めた。各課の授業運営は以下の通りである。なお、3 コマで 1 課の場合は文法の時間を 2 コマ、4 コマで 1 課の場合は文法の時間を 3 コマに増やした。

文法：文法と語彙のテキストに沿いながら、既習項目の確認とパターンプラクティスを行った。さらに、

習った文型について、聴解、会話、短作文等の運用練習を行った。その際、文型の単独での使用だけでなく、複数の文型を組み合わせた練習にも重点を置いた。

読解・作文：隔課で読解と作文のクラスを行った。読解では、文法で習った文型が使われている文章を読み、質問に答えたり、自分の意見を日本語で述べたりする練習を行った。作文では、習った文型や語彙を使って 400 字程度の作文を書く練習を行った。また、作文の時間には、漢字クイズを実施した（希望制）。

結果と課題

<前期>

前期は、再履修の学生と、文法項目が既習の学生のみクラスであったため、発展的な練習や活動を積極的に取り入れることが望まれたが、自宅学習が不十分な学生が多く、語彙・文型の定着がなかなか進まず、基礎的な事項の確認や練習に時間を取られてしまった。予習をしていないため、新出語彙を授業で使うと、その意味の確認に時間がかかってしまい、また復習が不十分なため、コース後半になっても形容詞や動詞の活用が定着していなかった。新しい文型を導入しても、活用が身につけていないため、どうしても形の練習にばかり時間がとられ、実践的な運用能力を高めるアクティビティーがあまりできなかった。また、授業中は熱心に取り組んでいるものの、宿題等の提出が遅れる学生も複数見られた。

しかしながら、出席率はよく、授業中は真面目で積極的なクラスであった。日本語で話したいという欲求が高く、クラスでは常に質問ができるいい雰囲気であったため、さまざまな表現や語彙を学ぶ機会があった。今後は、学習者の意欲を保ちつつ、自律学習を促す工夫が必要であると考えます。

<後期>

大変仲の良いクラスで、コース冒頭から互いにわからないところを教え合いながら皆で学習を進めようとする態度がみられた。ペアやグループ活動などにも積極的に、協力して課題に取り組んでいた。また、全体的に動詞や形容詞の活用も身につけていたため、形の定着に時間がとられ過ぎず、実践的な運用能力を高めるアクティビティーを行うことができた。しかし、その一方で、活用や語形の正確性に欠ける学生もおり、最後まで細部に意識の向かず、正確さが身につけなかった学生もいた。

コース後半で体調不良のため欠席が続いた学生もいたが、真面目で熱心な学生が多かったので、クラス運営しやすかった。

今後は、全員が細部に注意が向くように促し、学期が進むにつれて正確さが身につくような授業展開にすることを課題としたい。

2013年度 J2 授業記録

コースの概要

J2は、非常に基本的な日本語（動詞や形容詞の基本活用、語彙500）を身につけているものを対象とする。週5日、毎日スキル別（文法Ⅰ、文法Ⅱ、聴解会話、読解作文、総合スキル）に授業が展開されているが、基本的には文法Ⅰで習う文法項目、語彙、表現を軸に他のスキルは展開されている。

担当者名：<前期>小森由里（文法Ⅰ）、高村めぐみ（文法Ⅱ）、沢野美由紀（聴解会話）、
保坂明香（読解作文、総合スキル）

<後期>高村めぐみ（文法Ⅰ、総合スキル）、小森由里（文法Ⅱ）、御子神佳奈（聴解会話）、保坂明香（読解作文）

授業コマ数：週 5 コマ（文法Ⅰ，文法Ⅱ，聴解会話，読解作文，総合スキル）

履修者数：前期 5 名、後期 8 名

使用教材：独自教材

目標

接続詞や接続助詞を用いた複文の作成を含む，J1 よりやや進んだ日本語能力を身につけ，日常生活に必要な簡単な会話や自分の意見伝達が日本語でできるようにすることである。語彙数については 1000 を目標に増やす。

文法Ⅰ：さまざまな接続詞や接続助詞や文末表現，時間の表現などを理解し，それらを日常生活の中で使えるようになることが目標である。初級文法の理解と口頭練習を行うことにより，アカデミック場面，日常生活場面で簡単な日本語によるコミュニケーションが出来るようになることを目指す。

文法Ⅱ：さまざまな接続詞や接続助詞や文末表現，時間の表現などを理解し，それらを組み合わせて基本的な複文が正確に作れるようになることを目標とする。初級文法を使った短い文を作成することで，語彙の活用，接続，助詞等の定着を目指す。

聴解会話：文法Ⅰで習った文型や語彙を実際の日常生活の場面で使えるようになることが目標である。

日本語を数多く聴いたり，話したりすることにより，アカデミック場面，日常生活場面での簡単なコミュニケーションができることを目指す。

読解作文：文法Ⅱで習った文型や語彙を使って，簡単な作文が書けるようになること，及び，簡単な日本語の文章が読めるようになることを目標とする。

総合スキル：文法Ⅱで習った文型や語彙を正確に運用できるようになることと，未習の語彙や文型があっても対応が出来るスキルを身につけることを目標とする。また，実際のコミュニケーション場面で必要とされる瞬発力を身につけ，コミュニケーション能力を高めることを目指す。

文型リスト

J2 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	文法項目
1	1. Review (J1 sentence patterns) 2. Speaker's Volition: I think I will ~ Volitional form と思う 3. Speaker's Intention: I intend to ~ ~つもりだ 4. ~んです② 5. Mimetic words ⑤ Laughing, Crying, Anger
2	1. Can; indicating one's ability ~ことができる・可能形 2. Verb/Adjective すぎる: Overdo~/Too~

	<ul style="list-style-type: none"> 3. て form for indicating reason why one cannot do V 理由の「～て」 4. Anything, Anyone, Anytime, Anywhere, Any Noun 何でも・誰でも・いつでも・どこでも・どんな N 5. Particle で: indicating required cost, required time 値段・時間内の「で」 6. のに: Although, Even though *Review のに, が/けど, ても 7. Mimetic words ⑥ Feelings
3	<ul style="list-style-type: none"> 1. V-方 How to V 2. Vながら V : Doing two things simultaneously 3. Have something with/on, possession, own ～がある 4. Obligation: Must / Have to ～なくてはいけない/なくてはならない 5. Concession: Not have to / It is all right if it's not ～ ～なくてもいい 6. By (time) : までに / Until (time) まで 7. Mimetic words ⑦ Weather
4	<ul style="list-style-type: none"> 1. When～: ～とき～ 2. Noun が要る・役に立つ 3. Comparative constructions 比較 AはBより・Aのほうが・Aほど・～のなかで一番 4. Adverbs often used in a daily conversation せつかく ちゃんと 一応
5	<ul style="list-style-type: none"> 1. Try doing something and see: ～してみる 2. Giving and Receiving Something さしあげる・いただく・くださる 3. Noun modifiers 名詞修飾 4. Mimetic words ⑧ Nature
6	<ul style="list-style-type: none"> 1. Intransitive Verbs and Transitive Verbs 自動詞・他動詞 2. Vてある 3. Intransitive Vている vs Transitive Vてある 4. Mimetic words⑨ : Sleeping 5. Compound Verbs ① Vはじめる・Vおわる・Vやむ・Vつづける
7	<ul style="list-style-type: none"> 1. Vておく 2. ～が V みえる・きこえる・する 3. Giving and Receiving (favors, some acts) ～てあげる・もらう・くれる 4. Want someone to do some action: Vてほしい・もらいたい・いただきたい 5. ～が・けど (けれども)

	6. Imitative words : Caught a Cold ?
8	<ol style="list-style-type: none"> 1. あいだ VS あいだに 2. Purpose in coming and going ~に行く・来る・帰る 3. い-adjectives derived from verbs Vにくい/Vやすい 4. Expressing Purpose: ために・ように 5. Review: Various expressions for purpose 6. Compound Verbs ② Vあう・Vかける
9	<ol style="list-style-type: none"> 1. 伝聞 Hearsay, Conveying information getting from another person, media ~そうだ・ということだ・とのことだ 2. Vてしまう 3. Review: Vている, Vである, Vてみる, Vおく, Vてしまう 4. [Question words] か / ~かどうか 5. V1 ないで V2 without doing V1, do V2 6. Imitative words : Hitting, Breaking 7. Compound Verbs ③ Vなおす・Vかえす
10	<ol style="list-style-type: none"> 1. 推量の表現 ① Expressing Speaker's Guess, Conjecture ① そうだ 2. Decisions: ~ことにする・~ことになる 3. Rules: ~ことにしている / Customs: ~ことになっている 4. 比喩の表現 Expressing Resemblance, Figurative expressions ~ようだ・ みたいだ 5. V-て いく・くる do V and come/go 6. Imitative words : Animals, Birds

授業の方法

読解作文（月）、文法Ⅰ（火）、聴解会話（水）、文法Ⅱ（木）、総合タスク（金）の順番に授業が行なわれた。各スキル別の授業の方法は以下の通りである。

文法Ⅰ：文法と語彙のテキストに沿いながら、パターンプラクティスを中心にした口頭練習を行った。

毎回授業のはじめに、新出語彙を暗記しているかどうかを確認する「語彙クイズⅠ」を行った。

また、新出語彙の理解度を確認するために「語彙シートⅠ」を宿題にした。

文法Ⅱ：文法のテキストに沿いながら、短作文を書く練習を行った。毎回授業のはじめに、新出文法を

理解しているかどうかを確認する「文法クイズ」を行った。また、新出文法の理解度を確認する

ために「文法シート」を宿題にした。

聴解会話：聴解では、文法で学習した文法項目を、市販の聴解教材を適宜使用しながら聴解練習を行っ

た。会話では、当該文法項目を使用する実際の場面を設定し、日常生活で使えるようにするための会話練習を行った。また、新出語彙の運用の正確さを確認するために「語彙シートⅡ」を宿題にした。

読解作文：読解では、様々なジャンルの文章を読んでから、そのトピックについて簡単なディスカッションを行った。さらに、授業で扱ったものとは違うジャンルの読み物を宿題にした。作文では、文法で学習した文型を使ったモデル作文を読み、600～800字程度の作文を書く練習を行った。また、隔週で漢字クイズを実施した（希望制）。

総合スキル：既習文法、語彙を使って四技能を総合的に使用するタスク、ロールプレイ、スピーチを行った。毎回授業のはじめに、新出語彙を正しく活用、運用できるかどうかを確認する「語彙クイズⅡ」を行った。

結果と課題

<前期>

文法Ⅰ：文法項目の導入・練習というと単調になりがちだが、このクラスは、類似する既習文法と何が違うのか、どのような場面で用いるのか、など積極的に質問し、非常に熱心に取り組んでいた。新しい文法・文型を理解し、確実に身につけていこうとする前向きな姿勢が見られた。課題はオノマトペの指導である。学生たちから覚え難いという声があがっており、オノマトペの効果的な指導方法を工夫する必要がある。

文法Ⅱ：授業の初めに文法の宿題の提出、文法クイズを毎週行った。クイズの実施後に、クイズと宿題についての質問を受け付けた。特に宿題については、細かい助詞や意味の違いに関する質問が多数出た。クラスメートの質問は、自分にとっても勉強になるという意識のある学生だったため、質問者以外の学生も教師の解説に耳を傾けていた。また、その解説から新たな質問が出ることも多く、有意義な時間を過ごすことが出来たと思う。課題は、擬音語・擬態語の定着である。毎回多くのオノマトペが新出語彙として提示されるため、覚えられないことに自信をなくす学生もいた。理解語彙と使用語彙に分けて提示し、使用語彙だけは必ず覚えるように指導する等の工夫も必要だろう。

聴解会話：クラスの雰囲気がとてもよく、学習意欲も総じて高いクラスであった。当初は5名の中で聴解・発話能力に差があったが、お互いに助け合い熱心に学習することができていた。ただ、活発に発話をするクラスではなかったため、いかに話したいと思う環境、緊張せずに話すことができる環境を作るかが課題だった。

中には、そもそも口数が少ない学生がいてどう対処するか考えさせられたが、こつこつ努力を積み重ね、最後の1か月で聞く力、話す力もすいぶん伸びたようであった。逆に、体調を崩し休みが多かった学生が伸び悩み、他と差が開いたのは残念である。他の3名はよく文法を復習していて、教室以外の場で増やした語彙をうまく会話に生かしたり、聴解の問題と結びつけたりするこ

とができた。できれば、教室外で日本人の学生に質問をするような作業を少しでも取り入れたかったが、そこまでできなかったのは反省点である。今後の課題としたい。

読解作文：ほとんどの学生が、初見のテキストの内容を理解することができたが、口頭の内容質問には答えられないことが多かった。そのため、宿題やクラスで、質問の答え方を練習する活動を多く取り入れた。学期後半にはやや改善されたように思われる。また、一名の学生が他の学生に比べ、読むスピードが極端に遅かった。原因は、漢字や語彙の習得が他の学生に比べ進んでいないという点も挙げられるが、一文一文を理解して読み進めていくという読み方も大いに影響を与えていた。授業内で時間を制限し読む活動も行ったが、今学期ではあまり変化は見られなかった。作文は、授業開始当初は、原稿用紙の使い方がわからず、構成、修辭等の間違いも多く見られたが、徐々に上達したように思われる。ただしこのクラスは、宿題の提出率が低く、そのために、前回の宿題の問題点を次回に生かすということができないことがあった。毎回期日に提出していれば、今以上に作文能力が向上したと思われる。

総合スキル：今学期は、スキットを1回、インタビュー活動を2回行った。スキットは、J1文法とJ1相当の文法の復習、運用を目標とし行った。真面目に取り組む学生がいる一方で、ほとんど参加しなかった学生もおり、準備の差が大きく見られる発表となった。インタビュー活動の1回目は、「贈り物」について量的な調査を行い、結果をまとめ発表するもの、2回目は、「大学で学ぶ目的」について調査し考察するものであった。いずれもよく取り組んでおり、4技能を用いた活動を行うことができたと思う。今学期の学生は、大人びており消極的な学生もいたので、インタビュー活動のほうに向いていたように思う。

<後期>

文法Ⅰ：例年よりも英語に頼る学習者が多かった。文法項目導入の際の細かい違いについての質問などが英語になってしまうのは仕方がないが、ドリル練習や活用練習と言った日本語のみで行えるはずの活動でも英語が飛び交っていた。そのせいか、皆、真剣に取り組んでいた割に、日本語能力の伸びは芳しくない結果になってしまった。非常に残念である。初級中盤なので、英語の使用を不可にするのは難しいかもしれないが、真のコミュニケーションこそ日本語で行ってほしいし、それこそが日本語能力の向上につながると思われる。今後どの程度、どのような場面で媒介語を積極的に取り入れるか、あるいは限定的に使うのかを考えることは大きな課題だと思う。

文法Ⅱ：短文作成の練習は個人作業で単調になりがちだが、総じて真面目に取り組む、文法項目に限らず、語彙や漢字などについても積極的に質問していた。問題は、遅刻・欠席が多かったことである。そのため、毎回クラス冒頭に行なっている「文法クイズ」が受けられなかったり、宿題が期日に提出できなかったりして、クラスで少しずつ積み上げていくことが難しかった学生がいた。クラスで行なうクイズの結果と宿題の提出率は、定期試験の結果とほぼ連動しており、定期試験の成績は全体的に悪くはなかったが、毎回クイズや宿題を通して文法項目を身につけていくことができれば、さらにより良い試験結果につながっていたのではないかと推測される。

聴解会話：聴解の練習問題には未習の語彙が多く含まれている場合があったので、その場合には先に新しい語彙を導入してから練習問題を行った。そうすることで語彙がわからないから正解がわからないということは避けられたが、文脈から語彙の意味を推測するという訓練にはならなかった。学生にとっては普通体での会話を聞くのが難しかったようである。授業では丁寧体で話すことがほとんどであるが、せっかく日本にいたので、日本人の友だちを作り、普通体にも慣れてほしい。

読解作文：読解の内容確認は、教師による口答質問、学生間で行なう質疑応答、また、ワークシートを用いて行ったが、ワークシートでは正答を記入することができるが、口答で正しく算出することができず、英語に依存するといった様子が、多くの学生にしばしば見られた。テキストの内容については、概ね理解できたようであるが、全体的に英語使用が目立つクラスであった。限られた語彙でも話せることは多くあり、既習事項でどのように文を構成すべきか指導しても、口答で内容を伝え、意見を述べることに消極的だった。

また、未習語彙がある場合は、推測しながら読むことを目標としたが、わからない語彙があると、それ以上読み進めることができない学生もいた。全体的に、読解能力は低くないが、自身の学習ストラテジーを強く持ち、柔軟に学ぶことができない学生が多かったように思われる。作文クラスでは、テキストの流れに沿い、まず、作文の構成を確認し、全体でモデル作文を読み、質問に答えさせ、その後実際に書く作業に入った。そのため、授業内では十分に作文を書く時間を持たず、続きを宿題として課したが、提出しない学生が非常に多かった。結果的に、最後まで原稿用紙の使い方や構成、段落分けなどが理解されず、作文能力の向上があまり見られない学生もいた。また、授業で学んだ形式を用いず、自分自身で作文を構成した学生もいたが、起承転結がなかったり、未完であったりするものも見られた。以上のように、全体的にはあるが、授業内容が活かされなかったことは残念である。

総合スキル：スピーチを2回行った。授業内ではまじめに取り組む学生が多かったため、スピーチはよく準備されているものが多かった。特に自分の国の観光地の紹介については、多くの学生が写真や資料を準備して、スピーチを効果的に行っていた。但し、遅刻、欠席、宿題の未提出が多い学生がいて、それが成績に大きく響いていた。授業態度は良かったのに、それが反映されない結果となってしまったのが残念である。

2013年度 J2S 授業記録

コースの概要

J2S は、J2 と同様に初級半ばの学生を対象としたコースである。但し、J2 が週 5 日で行う内容を週 3 日で進めるクラスのため、J2 よりは若干日本語能力が上のレベルの学生を対象としている。J2 のようにスキル別に授業が展開されるのではなく、文法項目を導入した日に口頭練習、短文作成、聴解会話といった四技能の練習もしていく。

担当者名：＜前期＞小森由里、高村めぐみ、林里香　＜後期＞小森由里、高村めぐみ、高橋雅子

授業コマ数：週 3 コマ（文法，聴解会話，読解作文）

履修者数：前期 5 名、後期 6 名

使用教材：独自教材（J2 と同じもの）

目標

接続語や接続助詞を用いた複文の作成を含む J1 よりやや進んだ日本語能力を身につけ、日常生活に必要な簡単な会話や自分の意見伝達が日本語でできるようにすること、語彙数を 1000 に増やすことを目指す。また、J2 で習う文法項目を理解すると同時に、実際のコミュニケーション場面を意識し、運用能力の向上をはかることも目指す。

授業の方法

テキストと語彙リストを軸として、習った文型や語彙を日常生活の場面で使う練習を行う。学生は授業前に必ず語彙や文法の予習を行ってこなければならない。

クラスでの授業は、一課の文法項目を 2 回～3 回に分けて導入した。一つの文法項目の導入終了後に①パターンプラクティスを中心とした口頭練習、②聴解教材を使用した聴解練習、③文法項目を使用し、実際の場面を設定した会話練習、④短作文をつくる練習を導入した日に行った。また毎回授業のはじめに、新出語彙の定着度をはかる「語彙クイズⅠ」、新出語彙の運用度をはかる「語彙クイズⅡ」、新出文法の理解度をはかる「文法クイズ」のいずれかを行った。さらに、課ごとに新出語彙を覚えるために「語彙シートⅠ」を、新出文法を理解するために「文法シート」を、新出語彙の活用、運用を定着するために「語彙シートⅡ」を宿題とした。

読解作文については、J2 と同様、毎週、読解または作文を一課ずつ進めた。また、適宜、授業では扱わなかったジャンルの読み物を宿題とした。

結果と課題

＜前期＞

遅刻が目立ち学生が全員そろって授業が始められることの少ないクラスだった。授業中は真面目に取り組んではいたが、復習が十分ではなく、前の週に学んだ文型を翌週には忘れてしまっていることも多く、クラス全体が一つ一つの文法項目を積み上げ身につけていこうとする姿勢に欠けていた。クラスの中には、J2S のレベルが低すぎて自分の実力には見合っていないと考える学生がおり、クラスでの学習内容を軽んじている様子が見受けられた。つまり、「わかる」と「できる」はレベルが違うことを理解せず、わかったつもりになっていることでできないという問題が起きているクラスだった。このような学生の存在は、クラスのモラル低下につながるもので、教師にも特別な注意が必要だった。一方で、新しいことや使い方の比較などの学習に対しては積極的だった。そのため、文を作成する練習では、同じよう

な意味でも異なる表現や語彙を積極的に取り入れようとする姿勢が見られた。表現の違いや語彙の使い分けなど質問が多いクラスだったが、それを受け入れる雰囲気があり、学びあう姿勢が見られた。

週3回という限られた時間だけで、新出語彙、新しい文法・文型を十分に身につけさせることは困難で、学生自身の復習が不可欠であるが、その重要性を認識させ、どのように指導していくかが今後の課題である。

<後期>

授業中は大変熱心に取り組んでおり、ペアワークなどにも積極的で、運営しやすいクラスだった。学生が作成した文・短作文・会話などは各自の個性が出ており、日本語を用いて表現することを楽しんでいたのであった。また、宿題についても遅れてでも提出をしていた。しかし、全体的に遅刻・欠席が多かったことが大きな問題である。コース開始当初から欠席が目立つ学生がおり、学期途中でクラスをキャンセルした学生が2名おり、その影響があったのか、徐々にクラス内で遅刻や欠席が増え始めた。その都度注意はしていたが、なかなか最後まで定時に全員そろって授業を始めることができなかった。遅刻・欠席がなければ、さらにクラスの活動を充実できたのではないかと考えられ、大変残念である。

2013年度 J3 授業記録

コースの概要

J3 は日本語の基礎を習得している者（1,000語程度の語彙及び初級前半の文法等）、日常生活の基本的活動（買い物や依頼など）が日本語でできる者を対象とした初級後半のコースである。週5日授業が展開され、スキル別（文法、聴解会話、読解、作文、総合スキル）に学習を行う。

担当者名：<前期>藤田恵（文法）、長谷川孝子（聴解会話）、沢野美由紀（読解）、
御子神佳奈（作文、総合スキル）、小松満帆（コースヘッド）
<後期>藤田恵（文法）、長谷川孝子（聴解会話）、御子神佳奈（作文）
平山紫帆（読解、総合スキル、コースヘッド）

授業コマ数：週5コマ（文法、聴解会話、読解、作文、総合スキル）

受講者数：前期2名、後期8名

使用教材：独自教材

目標

より複雑な初級文法の導入および既習の文型の運用能力向上を目指した。その中で、各スキルのクラスでは以下を目標にした。

文法：条件や仮定の表現、受身や使役などを含むやや複雑な初級文法を理解し、それらを日常生活の中

で使えるようになること。

聴解会話：文法で習った文型や語彙を実際の日常生活の場面で使えるようになること。

読解：未習語彙や未習文型が一定程度含まれている文章であっても、これまで学習した語彙や文型の知識を応用して文章の内容を理解する力を身につけること。

作文：文法で学習した文型や語彙を使って簡単な作文が書けるようになること。

総合スキル：文法クラスで習った文型や語彙を正確に運用できるようになること。未習の語彙や文型があっても、対応できるスキルを身につけること。

文型リスト

J3 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	文法項目
1	Sentence patterns you should know for this level
2	1. 推量の表現 Expressing a Speaker's Guess, Conjecture ② ようだ・みたいだ 2. 推量の表現 Expressing a Speaker's Guess, Conjecture ③ らしい 3. Time Expression ところ 4. Time Expression ばかり 5. ～がえり 6. Review : Time Expressions 7. そうだ、ようだ、みたいだ expressions often used in a daily conversation
3	1. 条件 Conditional ③ ば 2. ～ずつ 3. V-ていく／くる Change 4. Change of one's behavior 5. Change of one's ability 6. Review : Expressions for talking about some change 7. Adverbs indicating various changes 8. Adverbs often used in daily conversations ③ やっぱり・実は
4	1. 条件 Conditional ④ なら 2. V-ようと思う／V-ようにする 3. V-ようにしたができなかった、V-ようにしてもできない 4. Fraction 三分の一、五分之一 5. Review : 条件 Conditional
5	1. 推量の表現 Expressing Speaker's Guesses, Conjecture ④ はずだ 2. Review : Various expression for Speaker's Guess, Conjecture

	3. ～の多く 4. ～以外、以内、以上、以下 5. Compound Particles ① ～について、～にもとづいて 6. Adverbs often used in daily conversation ④ 確か・とつくに
6	1. 受身 Passive Verbs 2. Direct Passive Sentences 直接受身 3. Indirect Passive Sentences 間接受身 4. 受身形 (Passive Sentences) and てもらう Sentence 5. Compound Particle ② ～によって 6. Sentence ending particles 終助詞
7	1. Giving an Instruction ～なさい・ないでください・てはいけない 2. Imperative form Command, Prohibition 命令形、命令、禁止 3. Indirect Imperative : ～ように 言う／伝える／頼む 4. Review : Expression for Cause, Reason 5. Compound Particle ③ ～のかわりに、～にくらべて
8	1. 使役 : Causative Sentences 2. Causative Verbs VS V-てもらう／くれる 3. ～のは～です (emphasizing)
9	1. 使役受身 Causative Passive Sentences 2. Causative V-てもらう／くれる／あげる 3. 使役受身 VS 使役-て もらう／くれる／あげる 4. ～ことに one's feeling, emotion 5. Noun のこと VS Noun
10	1. Review : 受身、使役、使役受身、V-てもらう／くれる／あげる 使役-てもらう／くれる／あげる 2. Introduction to 敬語 (Honorific, humble expressions)

授業の方法

J3は週5日のコースであり、文法、聴解会話、読解、作文、総合タスクの順番に授業を行った。各スキル別の授業の方法は以下の通りである。

文法：文法と語彙のテキストに沿いながら、パターンプラクティスを中心にした練習を行った。

聴解会話：聴解では、文法で学習した文法項目に関し、市販の聴解教材を適宜使用しながら聴解練習を行った。会話では、当該文法項目を使用する実際の場面を設定し、日常生活で使えるようにする

ための会話練習を行った。

読解：様々な長さやジャンルの文章を読み、自分の意見を述べ合う練習を行った。

作文：文法で学習した文型を使ったモデル作文を読み、800～1200 字程度の作文を書く練習を行った。

また、隔週で漢字クイズを実施した（希望制）。

総合スキル：文法で学習した文法項目を使用する総合的なタスクやロールプレイ、スピーチなどを行った。また、必要に応じて聴解や読解も組み込んだ活動を行った。

結果と課題

<前期>

文法：前期クラスは2名と小さいクラスであったため、学生の理解度が把握しやすかった。2名とも理解が早い学生であったが、助詞や語形の正確さへの意識が低かったため、文法クラスではこの点を重点的に指導するように心がけた。その結果、学期が進むにつれて正確さへの意識は高まっていったものの、単調な練習の繰り返しととられることもあった。J 3レベルから中級への橋渡しとして必要な指導であったと思われるが、一方で学習意欲を下げる一因にもなりかねない。従って、今後は単調な練習にならないように練習方法を工夫していきたい。

聴解会話：聴解では、今期の学生は、状況を素早く理解し判断する能力が高く、大意を把握することはそれほど難しくなかったように思われる。しかし、時々、語彙不足のために聞き取りが困難になるという傾向がみられた。今後、語彙を増やすための聞き取り練習も学生の状況に合わせて行おうと思う。

会話では、文法項目や文型の定着練習に加え、実践的な会話練習も初めから取り入れた。練習を通し、学生は会話を続けるためのポイントなどもよく理解したようであった。普段日本人との交流がある学生だったので、実生活の中でも勉強した内容を実践していたようだった。今後も、学生の実生活場面を念頭に置きながらタスクを考えていきたい。

読解：2人ともよく勉強していたが、最初はごく基本的なJ 1レベルの語彙の意味がわからず、度々質問されるので心配であった。が、読む力はある、全体の意味、細部の意味の把握とも問題なく進めることができた。毎回、トピックについては活発に意見が交わされ、読解に取り組む手助けとなっていた。ただ、2人ともJ1,J2レベルの文法で学んでいない項目もあったようで、問いに対して正確な表現を用いて答えるのが難しかったようである。どう答えればいいのか、毎回その点に留意しながら読んでいった。今回は要約の練習がなかなかできなかったのもので、反省として、そのレベルまでできることを目指したい。

作文：今学期はクラス人数が二人であったが、二人とも構成・内容・文法・語彙・漢字など、全てにおいてレベルの高い作文が書けていた。ただ、課ごとのターゲット文法をあまり意識せず書いていることがあったので、今後は学習した文法や語彙をもっと使うように促したい。

総合スキル：クラス人数が二人と少なく、国籍も同じであったため、ペア活動を行うにも工夫が必要であった。日本人ボランティアさんにクラスに参加してもらった際は、より意欲を持って活発に活動できていた。今回のように特に人数が少ない場合はボランティアさんに参加してもらい、インタビュー活動に出かけるなど、クラスメイト以外の人も話す機会が多く設けられるよう考慮したい。

<後期>

文法：後期クラスは、授業開始時に学生全員が揃うことが少なく、さらに予習が足りない学生も多くいたことが残念であった。学生にとって魅力的な授業展開が行えなかったことや、予習の必要性を十分に伝えられなかったことが、原因であると考え。今後は学生の学習意欲が高められるような授業展開になるように、授業の進め方を改善していきたい。

聴解会話：聴解では、ほとんどの学生が語彙力がなく、話のスピードにも慣れることが難しかった。実生活で日本語に触れてきた時間が短かったこと、また、これまでの学習方法や母国語も関係していると思われる。文法面での理解も正確でない場合、ある程度まとまった内容を理解するまで非常に時間がかかっていた。それに加え、練習問題や聴解試験の問題形式にも慣れていないため、短い時間で意味を理解し答えを選ぶことが難しかったようだ。学期初めに比べると各自上達しているのだが、このレベルの到達までには十分至らない学生も見られた。今後同じような状況の場合は、聴解練習の時間を長くとするなどの対処法も考える必要があると思う。

会話に関しては、皆、新出文型を使っての会話練習では、様々な状況を考えながら、意欲的に練習に取り組んでいた。会話での戦略は比較的うまく使える学生が多く、自然な会話表現も少しずつ身につけていた。会話中のリアクションの大切さ、話の終わらせ方などにも注目することができていた。しかし、自宅学習の時間が少ないためか、語彙、助詞、活用など正確さにかける様子も度々見受けられた。今後は、自宅学習の大切さを学生にどう伝え、動機付けていくか、指導上の工夫も考えなければいけないと思う。

読解：学期当初は、省略されている主語が誰なのかや、指示語が何を指しているのかをうまく読み取れない学生が多かったが、練習を重ねているうちに、理解できるようになっていった。

今学期は、授業内に読む時間を取ったため、進度が遅れがちになり、クラスでの活動の種類も少なくなってしまった。今後は、適宜予習を課すなどして時間配分を見直し、クラスで様々な読解活動ができるようにしていきたい。

作文：一段落がかなり長い、結論が極端に短い、序論・本論・結論の構成になっていないなど、構成に問題がある学生が数名いた。また、受け身・使役・使役受け身の文法項目が導入されて以降は、文法間違いも多く見られるようになった。構成に関しては、作文を書く前にも一緒に構成の確認をし、宿題にもコメントを書いて返却していたが、なかなか改善されない学生もいた。今回は宿題を返却する際、学生から質問がでた場合にだけ答えるという形式をとっていたが、時間がある場合には、授業中に一人ひとりに対してフィードバックを行う時間を設けたほうがいいのかもし

れない。

総合スキル：学期中、ロールプレイやアクティビティなどを度々行ったが、こうした活動は学生たちに好評で、積極的に取り組んでいた。しかし、今学期は、文法の理解が不十分な学生が多く、正確さに欠けることも多かった。正確さと流暢さをどちらも向上させられるような活動を今後は考えていきたい。

2013 年度 J3S 授業記録

コース概要

J3S は、日本語の基礎を習得し、1000 語程度の語彙力を持ち、初級文型が既習であるが、それらの運用能力が不足していると思われる学生を対象としている。週 3 日の授業の中で、既習の文法項目を確認し、その運用練習を行い、中級へとつなげていくためのコースである。

コースの詳細は、以下の通りである。

担当者名： <前期>小松満帆（コースヘッド）、山辺真理子、藤田恵

<後期>小松満帆（コースヘッド）、藤田恵

授業コマ数：週 3 コマ（文法、運用練習、読解・作文）

受講者数：前期 5 名、後期 4 名

使用教材：独自教材

目標

より複雑な初級文法の導入および既習の文型の運用能力向上を目指した。その中で、各スキルのクラスでは以下を目標にした。

文法：条件や仮定の表現、受身や使役などを含むやや複雑な初級文法を理解し、それらを日常生活の中で使えるようになること。

運用練習：文法で習った文型や語彙を実際の日常生活の場面で使えるようになること。

読解・作文：読解では、未習語彙や未習文型が一定程度含まれている文章であっても、これまで学習した語彙や文型の知識を応用して文章の内容を理解する力を身に着けること。作文では、文法で学習した文型や語彙を使って、きちんとした構成で作文が書けるようになること。

文型リスト

J3S で扱った文法項目は J3 と同様であるため、省略する。

授業の方法

J3Sは週3日のコースであり、J3で学習する文法項目が既習ではあるものの、それらを運用するまでには至らず、使いこなせない学習者を対象に開講されている。そのため、導入よりも、運用練習に力を入れてコースを運営した。

J3Sでは、各課を3コマないし4コマで学習するというペースで進めた。各課の授業運営は以下の通りである。なお、4コマで1課の場合は(9課以降)、文法の時間を2コマに増やした。

- 1.文法：文法と語彙のテキストに沿いながら、既習項目の確認とパターンプラクティスを中心とした練習を行った。
- 2.運用練習：文法で扱った文型について、聴解、会話、短作文等の運用練習を行った。その際、文型の単独での使用だけでなく、複数の文型を組み合わせた練習にも重点を置いた。
- 3.読解・作文：読解では、様々な長さやジャンルの文章を読み、内容理解のほか、自分の意見を述べ合う練習を行った。作文では、文法で学習した文型を使ったモデル作文を読み、800～1200字程度の作文を書く練習を行った。また、2課に1度のペースで漢字クイズを実施した(希望制)。

結果と課題

<前期>

前期クラスは、欠席や遅刻がときどき見られるものの、授業では熱心に課題に取り組み、また、ヨーロッパ、アメリカ、アジアと3大陸から5名が集まった多様性のあるクラスだったせいも、互いの発話に興味を持ち、日本語での会話を楽しむクラスだった。発言や質問も活発で、互いを尊重し、助け合いながら学習する姿がよく見られた。ただ、専門の授業等で忙しく、日本語の授業に割ける時間がそれほどないという学生たちで予習復習の自立学習が求められるこのコースの消化率はさほど高くはなかったように思う。

学習面では、初級前半の基礎的な文型や語彙が不十分、あるいは不正確な学生が複数名見られ、そのため、新しい文型等が正確に使えない、という場面が多く見られた。改善すべく、文法2日目の授業では短文作成を積極的に行ったが、学期が進むにつれて、クラスの半数は正確な文が作れるようになったものの、残り半数は最後まで正確さに欠ける文を作っていた。このような学生に対しては、教員が一方的に添削を行うのではなく、学生自身が誤用に気づくような活動が必要であると思われる。

聴解と会話の能力は全体的に高かったが、ロールプレイなど自由度の高い会話においては、正しい言い回しができないこともあった。これは、ターゲット項目の使用場面がイメージしにくかったことが一因としてあげられる。新規項目の導入時、もしくは会話練習において、より多くの場면을例示し、使用場面がイメージしやすいような進め方を取り入れていきたい。

読解においては、全体的に大意はとれるものの、細かいところまで内容が理解できない場合が多かった。特に、長い文章の読解では、段落ごとに要点を確認しながら読み進める必要があった。

作文においては、結論部分をまとめることができない学生が多かったため、フィードバックでは、結論のまとめ方を指摘することが多かった。今後は、モデル作文の構成を十分に確認し、作文を書き始める前に、構成のたてかたを丁寧に指導していきたい。

<後期>

4名という小さいサイズのクラスであったが、学期が進むにつれて、学生間の能力の差が開き、特に学期後半で扱う受け身、使役の表現では、一部の学生は学期末まで正確に使いこなせないままであった。

読解では、時系列が明確に書かれている文章ではスムーズに進んだが、文脈から読み取るような文章は苦手な学生が多く、正確に内容を理解するまでに時間がかかった。

作文では、語や表現のそれぞれの意味は理解しているものの、運用力に乏しい学生がいた。フィードバックで指摘された点が改善できた学生とそうでない学生がおり、学期が進むにつれ、学生間の能力の差が開いてしまった。

各課の項目が全員にきちんと定着するように導入や練習方法を改善し、また、作文等でもフィードバックの方法を見直し、確実に正確性を高めていけるような工夫が必要である。

2013年度 J4 授業記録

コースの概要

J4は初級終了段階の学習者を対象とした、初級から中級への橋渡しを行うコースであり、文法・文型、聴解・会話、読解、作文の4クラスで構成されている。このコース全体の目標は、初級で学習した文型を確実に定着させることと、複数の文型を組み合わせ使用できるようになることである。さらに J4では、語彙を増やし、流暢さを向上させることも併せて目標としている。

各スキルの詳細は以下の通りである。

<J4 文法・文型>

担当者名：<前期> 小森由里、<後期> 平山紫帆

授業コマ数：週1コマ

受講者数：前期7名、後期12名

使用教材：独自教材

目標

初級で学習した文法事項、文型を復習しながら、それらが正しく、流暢に使えるようになることを目指す。学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活の様々な場面で活用できるレベルに高めることを目指す。

文型リスト

J4 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	文型	表現
1	①～して、考えさせられた／思い知らせられた ／気づかせられた ②～が～を ～させる ③～は～だけでなく～の問題だ	「ように」を使った表現
2	①～からといって、～が必ずしも～ (negative) ②～ずに、～ ③～のか／のかどうか については ～	「ばかり」を使った表現
3	①～原因は～ことにある ②～のは～からです ③AとBでは～が異なるので～ ④AやBは～なので、たとえ～ても～することはない ⑤AやBは～なので、もし～たら～	「限り」を使った表現 1
4	①～は～ので、～ても、どうしても～てしまう ②～は～から、～のに、～と、どうしても～てしまう ③～が～に～を生じさせる ④～たり～たりするだけでは～ ⑤～は～が～であることを利用して～	「限り」を使った表現 2
5	①～ときに～と～ ②～ときに～ても～ ③私は～て～ことに気がついた ④～は～だから、もし～なら～ ⑤～ことは～だから、もし～なら～	「意向形」を使った表現
6	①～まま～ ②～つつ～ ③～は～なり～	尊敬語
7	①～ことにしている ②～ことになっている (習慣) ③～ことになっている (予定) ④～は～ことから～ (理由) ⑤～は～ことから～ (judgment)	謙讓語

	⑥～は～こととなると～ ⑦～は～ことなく～	
8	①～は～つつある ②～は～さえ～ ③～でさえ～ ④～さえすれば～ ⑤Noun さえ～ば、～ ⑥～とすれば、～ことになる ⑦もし～としても、～	受身
9	①～すると、Aは～だが、Bは～ ②～するときに重要なことは、～か/かどうか という ことよりは、～か/かどうか ということである ③～するときに重要なことは、～か/かどうか という ことではなく、～か/かどうか ということである ④～ものとしてしまう ⑤～ものとして～	名詞修飾 by using という
10	①～にもまして～ ②仮に/たとえ ～にしても～ ③いくら～にしても～	使役/使役受身

授業の方法

授業は1回に1課のペースで進行した。各課は、既習文法を複数組み合わせた比較的長い文型を扱う Part 1 と、初級文法を機能別、形式別に取り上げる Part 2 から構成されている。Part 1 も Part 2 も、ターゲットとなる文型・文法項目を説明後、文を完成させる練習などを通して、文型、文法項目が理解でき運用できるか確認した。また、各課の Comprehension check と学習した文型・文法を用いた短文作成を毎回宿題にした。Comprehension check は翌週の授業冒頭にクラス全体で答えあわせをし、短文作成の宿題は個別にチェックした。

結果と課題

<前期>

真面目な学生ばかりで、出席率・宿題の提出率のよい大変指導しやすいクラスだった。おとなしい学生たちだったが、疑問に思う箇所は積極的に質問をするので、ターゲットの文法項目が理解できているかどうか教師も把握しやすかった。毎回、授業の冒頭で宿題を返却すると、必ず学生側から自分の解答の誤りに説明を求め、また授業中も、わからない点があると臆せず質問をしていた。

J4 レベルでは、「敬語」「使役」「受身」「使役受身」が毎回の課題である。すべて既習の文法項目で、形は正しく作れるが、実際には適切な場面で正確には使えないという運用面の問題が見られる。教師もそれを意識し、教科書の問題を通して、コンテキストを詳細に説明しながら、各項目を練習するよう心がけた。その結果、期末試験では、課題の文法項目でも誤りが少なく、全体的に高得点であった。

<後期>

後期のJ4は、明るく熱心な学生ばかりで、和気あいあいとした、非常にいい雰囲気の中で授業を行うことができた。

しかし、学生間で初級文法の理解の程度に大きな差があり、フォームの作り方や使い方があやふやな学生も多かった。また、全般的に敬語の理解度が低かった。授業では、極力説明と練習を行うように心がけたが、それでもカバーしきれない部分もあった。今後は個々の学生の状況をよく見極め、それぞれの理解度に合わせた対応が取れるように工夫していきたい。

<J4 読解>

担当者名：<前期> 御子神佳奈、<後期> 平山紫帆

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：前期 6 名、後期 9 名

使用教材：独自教材

目標

さまざまな分野の読解教材を数多く読み、徐々に長い文章にも対応できるようにしていく。読解を通して使用語彙、理解語彙を増やすとともに、初級文型や初級語彙が使用語彙にまで高まるような練習を行う。

授業の方法

前の週に翌週使用するテキストを配布し、翌週までに各自テキストを読み、語彙を調べ、問題を解いてくることを宿題とした。クラスでは、まず、どんな内容であったかを大まかに話し合い、ピアリーディングで音読をし、内容や答えを互いに確認後、クラス全体での内容確認を行った。最後には、そのテーマについてのディスカッションを行った。

結果と課題

<前期>

宿題では、未習の語彙があっても最初から辞書で調べるのではなく、文脈から推測して問題を解き進めていくよう指示した。全員きちんと予習をしてきており、授業は毎回スムーズに進んだ。記述式の問題では、全く違う答えを書いているということは少なかったものの、うまくポイントを押さえて解答す

るのが難しかったようだ。今後は記述式問題の更なる練習が必要かと思われる。

<後期>

後期の学生は、かつてないほどの熱心さで、毎回の予習は、どの学生も欠かすことなく、完璧にしてあった。そのため、ピアワークに多くの時間を割くことができた。ピアワークでは、お互いに助け合いながら意見を述べ合って、理解を深めている様子が窺えた。

読解力は全般に向上したが、接続語の意味を取り違える人が最後まで見られた。今後は、接続語の役割にもっと注目しながら文章が読めるように指導していきたい。

<J4 聴解・会話>

担当者名： <前期>御子神佳奈、<後期>山内薫

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：前期 5 名、後期 7 名

使用教材：『新・毎日の聞きとり 50 日（上）（下）』凡人社

目標

日常生活における様々な場面での聴解と会話能力の育成を目指す。相手の話すことを正確に把握し、それに対して自分の意見などを正しい日本語できちんと発表できるようになることを目標とする。

授業の方法

<前期>

授業は、聴解、会話、スピーチの 3 部構成で行った。聴解はテーマに関連する話でウォーミングアップ後、問題を解き、最後はスクリプトを見ながらもう一度聞かせ、内容や語彙の確認を行った。会話もテーマに関連する話でウォーミングアップ後、ペアで会話練習を行いクラスで発表させた。スピーチはスピーチの仕方やテーマをクラスで導入後、各自家で準備、クラスで発表という流れで行った。

<後期>

1 回の授業を 3 分割し、スピーチ、会話、聴解を行なった。スピーチは、学期の前後半で一人 2 回ずつ、及びアンケート調査をもとに行なう発表 1 回の計 3 回行なった。会話では、会話特有の表現（縮約形、助詞の省略、あいづち）及び多様な場面（レストラン喫茶店、授業の後、勘違い、人についての説明）の表現に関し、ペアやグループで会話練習を行なった。聴解では、まとまった内容の聴解により、大意把握や情報取りなどのタスクを行なった。

結果と課題

<前期>

聴解は概ねよくできていた。ただし、書き取りの問題で知らない語彙出ると、近い音で聞き取れては

いたものの、正確でない場合もあった。会話は、毎回まじめに練習に取り組み、スピーチもPPTを含めとてもよく準備をしてきていたものの、このクラスはシャイな学生が多く、なかなか大きな声で発言してくれなかったのが聞き取りにくいことがあり残念であった。もっと学生に自信を持たせ、より発言しやすい環境をつくるなど、学生の発言をより促せるよう、今後は努力したい。

<後期>

新学期から、積極的に発言し、快活で明るい雰囲気クラスであった。また、どの活動においても真剣に取り組み、90分間、集中力が持続している様子が窺えた。

スピーチは、他のクラスメイトのスピーチのよい点を取り入れながら、写真などの視覚情報を上手に使い、聞き手を惹きつける工夫がなされていた。特にアンケート調査をまとめた発表においては、アンケート調査のまとめのみならず、当初の予想との比較や国との違いやインタビューをして苦労したことなどについても、意見交換や質疑応答の活発なやりとりが行なわれた。学生によりテーマは異なるものの、全員で同じ調査に取り組んだためか、通常のスピーチ活動よりも互いの発表に対する関心が高く、主体的に関わる様子が見られた。

聴解は、大意を捉える力はあるものの、細かい点（聞き取りながら空欄を埋める等）の聞き取りになると、小さいミスが多く見られた。今学期はスピーチと会話に多くの時間を割いてしまったため、聴解を行なう時間が短くなってしまったことがあった。今後は、学生の得意な点を生かしつつ、不得意な点を強化できるように全体の時間配分を見直していきたい。

<J4 作文>

担当者名：長谷川孝子

授業コマ数：週1コマ

受講者数：前期4名、後期9名

使用教材：独自教材

目標

初級文型、初級語彙の定着及び応用力の育成を目的とする。具体的には、初級文型や語彙を使って正しい文章（単文だけでなく、複文も含めて）が産出できるようになることを目指すと同時に、400字程度の短い文章が適切な構成で書けるようになることを目指す。

授業の方法

授業はテキストに沿って行った。テキストは1コマ1課のペースで進めた。授業では、新出文型を使った例文の意味を確認しながら、新出語彙の確認も行った。話し言葉と書き言葉、カジュアルとフォーマルの使いわけにも注目させながら、短作文、パラグラフ作成を行っていった。毎回授業の初めに、前回の復習としてクイズを行い、習った文型を使って短作文を書かせた。

pre-Lesson	初級文型確認の短文完成問題。
Lesson 1	①留学とは、一定期間外国へ行き、その国の学校などで学ぶことだ。 ②私が会社を辞めた <u>こと</u> で、家族の生活が大きく変わってしまった。 ③留学は人を <u>人間的に成長させる</u> 。
Lesson 2	①最近、日本の大学生を見ていて <u>気づいたことがある</u> 。 ②日本の経済が悪くなった <u>のは</u> 、日本の政治家が無能だからだ。 ③両親の「成績が一番」という考え方が、子供を非行に走らせたの <u>だろう</u> 。
Lesson 3	①私は、医者という職業を目指している人は、その目的の点から <u>2つのグループに分類されると思う</u> 。 ②この薬には麻薬のような成分が含まれている <u>ため</u> 、服用すると眠くなる。 ③留学という貴重な経験を <u>その後の人生に役立てたい</u> と思う。
Lesson 4	①日本とタイとはどちらも米を食べる国だが、日本とタイとは <u>その食べ方や食べている種類が大変に異なっている</u> 。 ②日本とタイはどちらも米を食べる国だ。しかし、日本とタイは、その食べ方や食べている種類 <u>において対照的である</u> 。 ③東京の生活は便利だがストレスが多い。 <u>一方</u> 、地方の生活は東京ほど便利ではないが、ストレスは少ない。
Lesson 5	①日本人は、間違った平等主義の <u>方向に進もうとしている</u> 。 ②私は、日本の社会問題、たとえば「就労者の高齢化」や「若年労働力の不足」といった <u>経済的な問題</u> に取り組んでいる。 ③自分の能力や適性がいかなる <u>なら</u> 、転職してもいいと思う。
Lesson 6	①運動を <u>せずに</u> 、食べてばかりいると、太りますよ。 ②もしあなたが、自分さえよければいいと <u>考えているとするなら</u> 、それはとてもいけない <u>ことだ</u> 。 ③困っている人に手をさしのべ、弱者を苦しめている企業に立ち向かう <u>ことこそ</u> 、弁護士の役割である。
Lesson 7	①速さという点では、飛行機は船とは <u>比べものにならない</u> 。 ②100%とは言えないまでも、現在では多くの国でクレジットカードが使えるようになっている。 ③現代人の生活に <u>とって</u> 、クレジットカードは <u>必要不可欠なものである</u> 。
Lesson 8	①その会社は給料がいい。 <u>しかも</u> 、残業がほとんどない。 <u>そのため</u> 、その会社で働きたい若者は多い。 ②私は、親が子どもをしつけるのは <u>当然だ</u> と思う。

	③両親や先生とよく相談した上で、日本への留学を決めた。
Lesson 9	「つまり」「すなわち」「いわば」「いわゆる」
Lesson 10	①私は、安定した給料よりも、むしろ自由な時間が多いほうがいい。 ②いつもは節約のために自炊しているが、時には外でおいしいものを食べることもある。 ③一度約束した以上、守らなければならない。
Lesson 11	①そのニュースは、韓国をはじめ、アメリカやヨーロッパ諸国など、世界中に伝えられた。 ②お金がなくても、あなたさえいれば、私は幸せだ。 ③日本のことわざ

結果と課題

<前期>

全員、課題を真面目にこなしていた。クイズも良くでき、新出文型も着実に自分のものにしていったように思う。ただ、非漢字圏の学生にとっては、時々テキスト内の語彙が難しく、短作文の時、知っている簡単な語彙ばかりを使う傾向が見られた。J4 レベルで使われている語彙を使った短作文練習を取り入れたが、今回はそれらの語彙をより定着させていく工夫もしたいと思う。また、助詞の間違いはその都度訂正していったが、今回はまとめて復習する時間も取り入れたい。

<後期>

ほとんどの学生は課題を真面目にこなしていた。クイズも良くでき、新出文型も着実に自分のものにしていった。助詞に注目させた練習を何度か行い、ほとんどの学生は学期前半より助詞の間違いが少なくなった。しかし、漢字圏の中には漢字の意味のみに注目してしまう癖が抜けず、助詞の間違いを直すことが難しい学生もいた。非漢字圏の学生にとっては、テキスト内の漢字語彙が難しい様子であったが、大変意欲的な姿勢で取り組んでいた。今回は、漢字圏、非漢字圏、それぞれに効果的な助詞や語彙の習得方法にも注目し、授業を行っていきたい。

2013 年度 「J5～J7 文法・文型」 授業記録

概要

J5～J7 の文法・文型科目は、中級前半から中級後半あるいは上級前半レベルの文法や文型を習得していけるように設計されている。それぞれのレベルとも週 1 回の授業であるため、学生が授業外にも学習できるように、宿題を課している。

J5 のレベルにおいては、日本語能力試験 N2 レベルの文型に焦点をあて、初級の文型を応用しながら、進出の文型も着実に身につけていくことができるような教材、教室内活動を実施している。J6 のレベルにおいては、日本語能力試験 N1 レベルの文型に焦点をあて、論文作成や読解等に必要とされる高度な

文型を習得していくための教材、教室内活動を実施している。そして、J7のレベルにおいては、引き続き日本語能力試験 N1 レベルの文型を導入しながら、さらに、日本語の文章を文法的に分析していく力を身につけられるような教材、教室活動を実施している。

授業は、教室における文法や文型の導入説明、簡単なドリル（短文作成）、導入した文型を使っての復習練習（宿題）から構成されており、学生の作った文章を担当教師がチェックしたり、学期の最後に Review の時間を置くことで、学生の文法・文型理解を促進させるようにしている。

各レベルの詳細は以下の通りである。

<J5 文法・文型>

担当者名： <前期>長島明子 <後期>a クラス=長島明子、b クラス=平山紫帆

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：前期 17 名、後期 a：14 名、b：12 名

使用教材：独自教材

目標

初中級で学習した文法事項、文型を復習しながら、エッセイや会話などで頻繁に用いられる中級文型を紹介する。学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活の様々な場面で活用できるレベルに高めることを目指す。

文型リスト

J5 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	助詞相当語	文型
1	～のかわりに、～について、～によって、 ～に比べて、～に基づいて	こ・そ・あ・ど Expressions
2	～に関して、～を問わず、～に応じて	と／ば／たら／なら Expressions
3	～に反して、～に対して、～において	こと Expression1
4	～に従って、～に沿って	こと Expression2
5	～に際して、～につれて	もの Expression1
6	～にとって、～に先立って	もの Expression2
7	～に渡って、～に代わって	Time Expressions

8	～にあたって、～に伴って	わけ Expressions
9	Adverbs used in daily conversations せめて、さすが (に)、やはり (やっぱり)、どうせ、つくづく	
10	「量が多い」ことをあらわす表現、 「よく」の使い方	

授業の方法

<前期>

授業は1回に1課のペースで進めた。まずプリントに沿って、文型の意味、接続の形、注意点、似ている文型・表現との違いなどを、例文を挙げながら説明した。例文はプリントに載っているもののほか、そのときに話題になっていることや学生の関心のあるものなどを使ったものも提示した。その後、学習した文型を使って、簡単な例文を作らせた。毎回、学習した課の文型を使った短作文を宿題にし、翌週フィードバックをした。13回目の復習の回では、条件、「わけ」「もの」などの形式名詞などを中心に説明した。

<後期>

a クラス：授業は1回に1課のペースで進めた。まずプリントに沿って、文型の意味、接続の形、注意点、似ている文型・表現との違いなどを、例文を挙げながら説明した。今学期はJ4までの文法項目の定着がやや弱い学生がいたので、復習も入れながら説明を行った。例文は易しいものやプリントに載っているもののほか、そのときに話題になっていることや学生の関心のあるものなどを使った文も提示した。その後、学習した文型を使って、簡単な例文を作らせた。毎回、学習した課の文型を使った短作文を宿題にし、翌週フィードバックをした。フィードバックはできるだけ個別にも対応した。13回目の復習の回では、条件、「こと」「わけ」「もの」などの形式名詞を再度説明した。

b クラス：毎週1課のペースで授業を進めた。授業では、パワーポイントを使用しながら、文法・文型の説明と練習を行った。その日に学習した文法・文型を使用した短文作成を、毎回、宿題として課した。

結果と課題

<前期>

今学期は1課の指示語と2課の条件が難しかったようで、宿題の出来が今までと比べてやや悪かった。しかし、課が進むにつれて、全体的によくなっていった。何人かの学生はよく考えて文を作っていることが窺え、力をつけていった。一方で、初級レベルの文法の間違が多い学生が何人かいた。また、文法の間違いは少ないのだが、プリントの例文と似たような短作文を作ってくる学生もいた。

今後は文法の正確さとともに内容のある文が作れるよう、授業を行っていきたいと考えている。

<後期>

a クラス：後期は全体的に宿題の短作文で基本的なところを間違える学生も多かった。しかし、よく理解

はしており、中間、期末テストはよくできていた。

何人かの学生はよく考えて文を作っていることが窺え、力をつけていった。一方で、文法の間違いは少なく、理解もできているのだが、プリントの例文と似たような短作文を作ってくる学生もいた。今後は文法の正確さとともに内容のある文が作れるよう、授業を行っていきたいと考えている。

b クラス： J5b クラスは、しっかり予習をしてくる学生ばかりで、宿題の提出状況も、クラスでの取り組みも素晴らしかった。期末テストで高得点者が続出したのも、そうした日ごろの努力が実を結んだものと思われる。

その一方で、**J5** では「こと」「もの」「わけ」を使用した表現を多数扱ったが、最後までそれらが区別できていない人もいた。類似表現をわかりやすく整理し、実際に使えるようにするための練習を多く行うことを今後の課題としたい。

<J6 文法・文型>

担当者名： <前期>長島明子、<後期>藤田恵

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：前期 13 名、後期 18 名

使用教材：独自教材

目標

日常会話や小説などで用いられるやや高度な文法、文型の理解を目的とする。

文型リスト

J6 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	文型
1	「理由の表現」 ために、ばかりに、からといって／だからといって、あまり 「目的の表現」 V さんがため (に)、V-Volitional と
2	「感情・心情・評価の文型」 ～てしようがない／～てしかたがない／～てならない、～てたまらない、～限りだ、 ～といたらない (～ったらない)、～ずにはいられない／～ないではいられない、～ず にはおかない／～ないではおかない、～てやまない、～極まる／～極まりない／～の極 みだ、～の至りだ 「評価の文型」 ～だけに、～だけあって、～にしては／それにしては、～のわりに (は) ／～わりに

	(は) / そのわりに (は)
3	<p>「不快を表す文型」 ~だらけ、~まみれ、~がましい、~たらしい (~ったらしい)、~にもほどがある、~にたえない</p> <p>「非難・軽蔑を表す文型」 ~ぶる、~じみた、~っぽい、~くせに (くせして)、~なんか / ~なんて、~ごとき、~ときたら、~にひきかえ / それにひきかえ、じゃあるまいし (ではあるまいし)、Noun + に (として) あるまじき + Noun</p>
4	<p>「判断を表す文型」 ~までもない / までのこともない、~には及ばない、~にはあたらない、~ほどのこと (もの) ではない、~かねる、~っこない、~にすぎない、~ないことはない、~までだ / までのことだ、~如何だ / ~如何で・によって V、~次第だ / ~次第で V、</p> <p>「理性的評価を表す文型」 ~に足る / 値する、~に恥じない</p>
5	<p>「推察・推量を表す文型」 ~にほかならない / ~にほかならぬ + Noun (人)、~にかたくない、~がたい、~かねない、~恐れがある、~ないとも限らない、~まい、~と見える、~げ</p>
6	<p>「人や物の状態・性質を表す文型」 ~のきらいがある、~がちだ、~気味だ、~つつある、~たてだ、~かけだ、~っぱなし、~まま、Aかたわら B、A がてら B、A かたがた B、A ついでに B</p>
7	<p>「人や物の状態・性質を表す文型 2」 ~向きな、~向けな、~ごろ、~盛り、~めく、~つく、~たつ、~放題、~なり、~さ、~み</p>
8	<p>「義務・当然を表す文型」 ~べきだ、~べきだった / ~べきではなかった、~べく~、~べくして~、~てしかるべきだ、~ (ない) わけにはいかない、~しかない、~ (より) ほか (は) ない / ~ (より) ほか~ない、~ざるをえない、~ないではすまない / ~ずにはすまない / ~なしにはすまない~を余儀なくされる / 余儀なくさせる</p>
9	<p>「その他の文型 1」 ~かいがある / ~がい、~きっての、~ぐるみ、~こそ、~からこそ / ~ばこそ ~んです、~てこそ、~こそすれ、~ずじまい、~たりとも~ない / ~な (禁止)、~ふりをする、~たことにする / ~たことになる</p>
10	<p>「その他の文型 2」 ~だに~ない、A くらいならむしろ B 方がいい / 方がました / ~なさい、A (という)</p>

よりむしろ B、せめて～だけでも (いいから) ～、～つ～つ、～つける、～こなす、～慣れる、～抜く、～通す、～切る、～尽くす、～終わる、～終わる、～やむ、～始める、～出す

授業の方法

<前期>

授業は1回に1課のペースで進めた。まずプリントに沿って、文型の意味、接続の形、注意点、似ている文型・表現との違いなどを、例文を挙げながら説明した。例文はプリントに載っているもののほかにもいくつか提示した。その後、学習した文型を使って、簡単な例文を作らせた。また、プリントの中に慣用句が多く出てくるので、それについても読み方と意味を確認した。毎回、学習した課の文型を使った短作文を宿題にし、翌週フィードバックをした。

<後期>

授業は、1週間に1課ずつ進め、毎回15程度の文型を扱った。テキストは、一つの課が終わってから次の課を配付した。授業では、文型の導入、例文の提示、選択式の確認問題を行った。また宿題として、翌週に扱う課の予習と、その週に扱った文型の文作成を課した。

結果と課題

<前期>

文法・文型の意味はよく理解していた。宿題の短作文は最初の回は全体的にあまり出来がよくなかったが、課が進むにつれて、よくなっていった。よく考えて文を作っていることが窺えた。しかし、その文型とどういう語彙をいっしょに使うか、似ている文型・表現との違いや使いわけなどは難しいようだった。この点の説明や練習が足りなかったと思う。

今後はこの点をしっかりおさえ指導し、また、フィードバックも十分に行うつもりである。

<後期>

後期クラスは、履修者18名のうち、学期末まで継続して出席した学生は17名であった。どの学生も出席率と宿題提出率がよく、非常に意欲の高いクラスであった。J6文法では、類義表現を多く扱う課があり、例年使い分けが上手くできない学生もいる。このことから、今期は例文を多く提示し、それぞれの表現に合う語や話題に注目させるように心がけた。その結果、多くの学生が類義表現の使い分けが出来るようになった。表現が示す意味に加えて、表現に合う語や話題に注目させたことは、学生の理解の助けになったと考えられる。一方で、例文を多く提示した結果、説明の時間が長く必要となり、一つの課が1コマでは終わらないこともあった。このことから、類義表現の提示方法の改善を今後の課題としたい。

<J7 文法・文型>

担当者名：長谷川孝子

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：前期 10 名、後期 12 名

使用教材：独自教材

目標

文学作品や専門的な雑誌記事、さらには公式なスピーチなどで用いられる高度な文型を理解し、自分の会話や作文で流暢に使えるようになることを目指す。

文型リスト

J7 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	文型
1	①いつも <u>ながら</u> 鮮やかなお手並みですね。 ②みんなに「へたくそ」と馬鹿にされ <u>ながら</u> も彼は頑張り続けた。 ③この肉は生の <u>まま</u> で食べられます。 ④彼女はいくつになっても美しい <u>ままだ</u> 。 ⑤命令される <u>まま</u> に動く。 ⑥悪いと知り <u>つつ</u> 、つい落とし物の財布を自分のポケットにしまい込んだ。 ⑦地球人口は年々増え <u>つつ</u> ある。
2	意向形 ①彼に相談 <u>しよう</u> かすまいか、さてどうしたものだろう。 ②何がある <u>うと</u> 、決して驚いてはいけないよ。 ③行こうが行く <u>まいが</u> 、参加費はもらうよ。 語彙とニュアンスの似ている表現 迂闊な、機嫌、体裁
3	「ところ」 ①喉が痛くて、食事 <u>どころ</u> か水を飲むのも辛いんだ。 ②あっ、危ない！危うく車にひかれる <u>ところ</u> だった。 ③私から連絡を取ろうと思っている <u>ところに</u> 、ちょうど当人から電話がかかってきた。 ④今朝のニュースで聞いた <u>ところ</u> によると、内閣は総辞職するとのことだ。 ⑤敬語が使える <u>ところ</u> まで来れば、もう日本語も上級だ。 語彙とニュアンスの似ている表現

	苦情／不平不満／文句／クレーム／愚痴
4	<p>「まで」</p> <p>①喉元まで出かかった言葉だったが、思いとどまった。</p> <p>②家に帰って<u>まで</u>、会社の仕事はしないでほしいわ。</p> <p>③あなたがやれと言ったから、<u>やったまでのこと</u>です。</p> <p>④これは簡単な漢字だから、辞書を引く<u>までもない</u>。</p> <p>とりたての助詞 こそ、も、とか</p>
5	<p>「時」を表す文型 1</p> <p>①歳を取ると物覚えが悪くなり、聞く<u>そばから</u>忘れてしまう。</p> <p>②ベルが鳴るが<u>早い</u>か、彼は教室を飛び出した。</p> <p>③彼女は私の顔を見るや<u>否や</u>、涙を浮かべて駆け寄った。</p> <p>似ている意味の使い分け 空き／空（から）、あたかも／いかにも</p> <p>色々な意味を持つ動詞</p>
6	<p>「時」を表す文型 2</p> <p>①ホームに着く<u>か着かないかのうちに</u>、発車のベルが鳴り出した。</p> <p>②その手紙を読む<u>なり</u>彼は顔面蒼白になった。</p> <p>③彼女は私の顔を見た<u>とたん</u>に泣き出した。</p> <p>④転んだ<u>弾みに</u>頭を壁にぶつけて、たんこぶができた。</p> <p>まとまりで覚えたほうが良い表現</p> <p>①給料が安くても、この会社で働く<u>よりほかに</u>、家族を養う<u>方法はない</u>。</p> <p>②ずっとたばこを吸い続けている<u>と</u>、周りの人に迷惑をかける<u>ばかりでなく</u>、<u>ひいては死につながりますよ</u>。</p> <p>③心を込めて謝った<u>ので</u>、それほど叱られないで済んだ。</p> <p>④こんなに天気が悪かったら、<u>誰だって外に出たくなくなる</u>。</p> <p>⑤こんなに古い傘だが、<u>どんなぼろぼろの傘でもないよりはずっとましだ</u>。</p> <p>⑥授業中にあくびをするのは、やる気のなさの<u>現れだと解釈できる</u>。</p>
7	<p>「時」を表す文型 3</p> <p>①調査結果がわかり<u>次第</u>、そちらにご報告いたします。</p> <p>②この写真を眺める<u>度に</u>、昔のことが思い出される。</p> <p>③不景気のニュースを聞くにつけ、バブルの頃が懐かしく思い出される。</p> <p>④良きにつけ悪きにつけ、親は巣立っていく子どもを見守ることしかできない。</p> <p>⑤上京の<u>折</u>にはご一報ください。</p>

	<p>⑥非常の際には、このドアから避難してください。</p> <p>覚えたほうがいい表現</p> <p>①彼は教科書を読み<u>もしないで</u>、授業が難しいと文句ばかり言っている。</p> <p>②彼はその車をととても大切に<u>して</u>いて、誰かが<u>少しでも触ろうものなら</u>、すぐ怒る。</p> <p>③今度の失敗も、<u>考えようによっては</u>彼にとっていい薬になったはずだ。</p> <p>④このカバンが偽物<u>であることは</u>、誰の目にも<u>明らかだ</u>。</p> <p>⑤休みがあるのはうれしいが、何もすることがなくて、<u>暇をもてあまして</u>いる。</p>
8	<p>「時」を表す文型 4</p> <p>①やりか<u>けた</u>ことは最後までやり通せ。～かけだ／～かける／～かけの</p> <p>②近くを通り<u>しな</u>に、ちょっとなじみの飲み屋に寄った。</p> <p>③そのマラソン選手は、ゴール<u>間際</u>で倒れた。</p> <p>覚えたほうがいい表現</p> <p>①経済的に許されるなら、仕事なんか<u>しないで</u>家で遊んでいるに<u>越したことはない</u>。</p> <p>②先生がやさしいのをいいことに、全然宿題を出さない学生がいる。</p> <p>③彼女のがさがさの手は、これまでの彼女の苦勞を<u>物語</u>っている。</p>
9	<p>複合動詞</p> <p>①寝坊して、いつもの電車に乗り<u>損</u>なってしまった。</p> <p>②私はあなたの発言の意味を取り<u>違</u>えていました。</p> <p>③うーん、食べ<u>過</u>ぎた。お腹がパンクしそうだ。</p> <p>④彼女はカラオケで日本の歌を歌い<u>まく</u>った。</p> <p>覚えたほうがいい表現</p> <p>①静かなので勉強しているの<u>かと思</u>いきや、ぐうぐう寝ていた。</p> <p>②必要と<u>あ</u>れば、いかなる援助も<u>いた</u>しましょう。</p> <p>③東京公演を皮切りに、そのグループは全国各地でコンサートを開くらしい。</p> <p>④警察の取り調べは厳しく、現在の給料から過去の借金の額に<u>至</u>るまで調べられた。</p> <p>⑤今年を<u>限</u>りに社長職を退き、後進に道を譲ろうと思う。</p> <p>⑥後日、書面を<u>も</u>って連絡いたします。</p>
10	<p>副詞の呼応</p> <p>①たとえ冗談でも、言っていることと悪いことがある。</p> <p>②もし失敗したら<u>失</u>敗した<u>で</u>、その時また考えればいいさ。</p> <p>③誰<u>で</u>あれ、欠点の一つや二つは持っています。</p> <p>④専門家なら<u>い</u>ざ知ら<u>ず</u>、素人ではこの機会を修理することはできないよ。</p> <p>⑤注意されて謝る<u>ら</u>ま<u>だ</u>しも、逆に開き直っている。</p> <p>覚えたほうがいい文型</p>

- | |
|--|
| <p>①こんな成績では進学はおろか、卒業だって危ないよ。</p> <p>②商いの成否は料金もさることながら、サービス如何で決まる。</p> <p>③山の多い地形と島国という環境が相まって、日本人の性格を形成している。</p> <p>④集めたデータを踏まえて、レポートの内容を考える。</p> <p>⑤借金に借金を重ねたあげく、ついには夜逃げまでしでかす始末だ。</p> |
|--|

授業の方法

授業はテキストに沿って行った。テキストは基本1コマ1課のペースで進めた。予習としてテキストを読んでくることを課題とし、授業では、各文型や表現のポイントを取り上げ、短作文をペアで作らせ発表させた。言葉の基本義にも触れ、各文型や表現の持っている意味を正確にとらえられるよう、また機械的な暗記にならないように工夫をした。宿題として、毎回各課の短作文を書かせた。間違いが多いところは全体でフィードバックを行った。

結果と課題

<前期>

全員活発にタスクに取り組んでいた。宿題もほとんど全員毎回提出していたため、大部分の学生が良い結果を出せたのだと思う。ただ、時々宿題の提出をしていない学生もいたので、次回は学期の初めに宿題提出の大切さについて強調しようと思う。また、今学期は学生レベルがほとんど同じで大きな問題はなかったが、今後は学生のレベルが大きく違った場合の対処も考えていきたい。

<後期>

学生は活発に課題に取り組み、各表現の持つニュアンスまで正確に自分のものにしようとする意欲が見られた。宿題もほとんど全員毎回提出していたため、大部分の学生が良い結果を出せたのだと思う。授業外でもドラマやアニメ、研究などで日本語に触れる機会が多い学生たちであったため、モチベーション維持につながったようだ。もし可能なら、生教材からテキストの表現を紹介できる時間があれば、より効果的な定着につながると思う。

2013年度「J5～J7 読解」授業記録

コースの概要

J5～J7の読解は、様々な分野の読解教材や生教材を読み、内容を正確に理解し、用語や表現を増やすとともに読むスキルを意識化する活動を取り入れて授業を展開している。

具体的に、J5では読解教材、J6では時事的な記事・小説などを取り上げ、様々なスタイルの文章を読むと同時に読むスキルを獲得する。また、用語や表現を増やし、ディスカッションを行なう。J7では、新聞記事、社説、論説、小説などを取り上げ、内容理解をした上で要約することを目指す。各科目の詳細は次に示す通りである。

<J5 読解>

担当者名：小島佳子

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：前期 12 名、後期 10 名

使用教材：独自教材

目標

様々な分野の読解教材を数多く読み、内容理解することができるようになることを目標とする。また、徐々に長い文章にも対応できるようにしていく。読解を通して使用語彙、理解語彙を増やすとともに様々な読むスキルを学ぶ。

授業の方法

<前期>

授業は、1 週間に 1 課のペースでテキストを進め、時間があれば、生教材などを扱った。授業では、できるだけ辞書を使用せず文章を読み、内容理解の問題を解かせ、答え合わせを行った。読解の方法として、速読、精読、スキミング、スキニングを導入し、テキストの内容や問題のタイプによって読み方を指導した。また、毎回テキストの中から覚えたい語彙を取り上げ調べる宿題を課し、次回の授業冒頭でその語彙を使った短文作成を 3 つ書くクイズを実施した。

<後期>

授業は、読解テキストを中心に、生教材なども扱った。テキストは 1 週間に 1 課のペースで進めた。授業では、まずは辞書を使用せず文章を読み、内容理解の問題を解かせ、答え合わせを行った。読解の方法として、速読、精読、スキミング、スキニングを導入し、テキストの内容や問題のタイプによって読み方を指導した。また、毎回、テキストに出てきた新出語彙の意味調べを宿題とした。

結果と課題

<前期>

学生間で語彙力・漢字力に差があり、テキストの読解や内容理解の問題を解く速度に多少差があったが、未知の語は前後の文脈で推測するように指導し、時間がかかる学生も次第に辞書を引く回数が少なくなり、早く問題が解けるようになっていった。ただ、辞書を使わず問題に取り組むための指導が足りず、最後まで辞書を手放せない学生が多かった。そのため、辞書に頼らなくてもすむ読解力がつくよう、今後より一層、工夫していきたい。

<後期>

初めは、学生間で語彙力・漢字力に差があり、テキストの問題を解く速度に差があったが、なるべく

辞書に頼らず課題に取り組むよう指導したため、授業中盤ごろから辞書を引かずに意味を推察しながら問題に取り組めるようになり、学生間の問題を解く速度差は小さくなっていった。

しかし、読解が苦手な学生への個別対応が十分にできなかったため、今後の課題としたい。

<J6 読解>

担当者名：小島佳子

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：前期 9 名、後期 10 名

使用教材：独自教材

目標

新聞記事や小説など様々な分野の読み物を読み、内容理解する事ができるようになることを目標とする。読解を通して使用語彙、理解語彙を増やすと共に、様々な読むスキルを学ぶ。また、文章のポイントを押さえた要約ができるようになることも目標とする。

授業の方法

<前期>

授業は、1週間に1課のペースでテキストを進め、時間があれば、生教材などを扱った。授業では、できるだけ辞書を使用せず文章を読み、内容理解の問題を解かせ、答え合わせを行った。読解の方法として、速読、精読、スキミング、スキニングを導入し、テキストの内容や問題のタイプによって読み方を指導した。また、毎回テキストの中から覚えたい語彙を取り上げ調べる宿題を課し、次回の授業冒頭でその語彙を使った短文作成を3つ書くクイズを実施した。また後半は、毎回要約の宿題も課し、授業でフィードバックを行った。

<後期>

授業は、読解テキストを中心に、新聞や小説なども扱った。テキストは1週間に1課のペースで進めた。授業では、まずは辞書を使用せず文章を読み、内容理解の問題を解かせ、答え合わせを行った。読解の方法として、速読、精読、スキミング、スキニングを導入し、テキストの内容や問題のタイプによって読み方を指導した。また、毎回、テキストに出てきた新出語彙の意味調べを宿題とし、後半は要約も宿題にした。

結果と課題

<前期>

黙々と課題をこなす大人しいクラスだったが、通常よくみられる学生間の読解時間の差も、気になるほどではなかった。ただ、要約力の伸びは個人差が大きく、回を追うごとに要約ポイントを掴み、要約

力が伸びていった学生が多かった反面、宿題をこなすのも難しく、主題をつかめずずれた内容を書いてしまう学生もいた。今後の課題としては、要約が苦手な学生への対応をさらに工夫していきたい。

<後期>

今期は力のある学生が多かったため、授業当初からなるべく辞書に頼らず課題に取り組むよう指導した。そのため、ほとんどの学生が授業中盤ごろから辞書を引かなくても意味を推察しながら問題に取り組めるようになっていった。宿題であるテキストの要約では、初めはポイントを抑えた要約ができる学生が少なかったが、毎回、採点ポイントを示して自己採点をさせてから全体でフィードバックを行ったため、徐々にコツをつかむ学生が増えていった。ただ、読解や要約が著しく苦手な学生への個別対応が十分にできなかった。今後は、個々に応じた対応を課題としたい。

<J7 読解>

担当者名：<前期>小森由里、<後期>金庭久美子

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：前期 11 名、後期 18 名

使用教材：独自教材

目標

新聞記事や小説などの長文を読み、内容理解する事ができるようになることを目標とする。長文の読解を行い、語彙を増やすと共に、様々なスタイルの文章に触れて、読みのスキルを伸ばす。また、新聞記事の要約ができるようにする。

授業の方法

<前期>

コースを3つに区分し、前半は新聞記事や社説を、中盤は論説文を、後半は星新一の小説『夜のかくれんぼ』を教材として用いた。新聞記事は、まず見出し、写真、資料などを使ってプレリーディング活動をし、次に設問に答えることで記事の大意を理解させ、最後にピア・ワークによって段落ごとに精読を行い、記事の構成を把握するため段落の組み合わせを図式化する練習をした。論説文の読解では、日本の社会構造の変容、グローバル化時代、日本企業の社会的役割など多様なテーマを取り扱い、背景知識などの説明を加えながら内容把握の練習問題をした。『夜のかくれんぼ』は、毎回1作品を取り上げ、タスクシートを通して内容を理解したうえで、作者の主張、作品の意図を読み取る練習を行った。また語彙を増やすために、語彙シートを配布し、学ぶべき語彙を取り上げて意味・用法を説明した。さらに毎回、新聞記事を200字程度に要約することを宿題とし、授業冒頭に宿題の要約についてフィードバックを行った。

<後期>

授業は、前半は新聞記事を中心とした読解テキスト、後半は新聞や小説など生教材を扱った。テキストは1週間に1課のペースで進めた。授業では、まずは辞書を使用せず文章を読み、内容理解の問題を解かせ、各グループで答え合わせを行い、そのテーマについてグループディスカッションを行った。読解の方法として、精読、速読（スキミング、スキミング）、推測タスクを導入し、テキストの内容によって読み方を指導した。また、宿題として毎回テキストの要約を行わせた。

結果と課題

<前期>

真面目なクラスで、出席率も宿題の提出率も大変良かった。新聞記事は、練習を重ねる度に読み取るコツを習得していく様子が伺えた。論説文もテーマが日本社会や日本経済に関わるため、内容に興味を持って読解していた。宿題とした新聞の要約は、これまで要約文を書いたことがないという学生が大半だったため、コース前半では、的確にまとめることができないことも多かったが、徐々に慣れ、コース後半には、全員が要点を捉え簡潔に要約文が書けるようになった。コースを通して、記事の主要箇所を把握し要約する力は飛躍的に向上したと見られる。

課題は小説の読解である。ほとんどの学生が小説に関心がなく、どのように小説を解釈すればよいのか戸惑っているようだった。タスクシートの練習問題に取り組むことで、小説の読み方が身についたが、小説のテーマについてクラスで活発にディスカッションを行うところまでには至らなかった。一方で、小説には、新聞記事や論説文にはない独特の語彙や言い回しが使われており、語彙を増やすという目的は達成できたのではないかと考えられる。

<後期>

ほぼ毎回ピア・リーディングを取り入れたがおおむね好評であった。理解できない人は理解できた人の助けを借りて読み進めたが、後半は自分で事前に予習をするようになり、クラス内の差が縮まったように思われた。理解の早い人はディスカッションで教材の内容を用いていかに意見を述べるかということに力を注いでいたように思われる。宿題であるテキストの要約は、上手にポイントを抑えて簡潔に要約できる学生と、主題からずれた内容を書いてしまう学生がいた。要約が苦手な学生の対応を今後の課題としたい。

2013年度 「J5～J7 作文」 授業記録

コースの概要

作文は、J5は中級、J6は中上級、J7は上級レベルの日本語能力を身につけているものを対象としたクラスである。J5、J6では毎週、J7では隔週に作文課題を完成させ、構成、資料の引用など、アカデミックレベルで必要とされる作文スキルを身に付ける。

<J5 作文>

担当者名： <前期>a クラス=長谷川孝子、b クラス=高村めぐみ、

<後期>a クラス=長谷川孝子、b クラス=高橋雅子

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：前期 a クラス 12 名、b クラス 11 名、後期 a クラス 12 名、b クラス 11 名

使用教材：独自教材

目標

初中級で学習した語彙の定着、およびさらに語彙数を増やすこと、初中級で学習した文型や語彙を使ってレポートや作文を書く力をつけることを目標とする。

授業の方法

授業は 10 課からなるテキストに沿って行った。テキストは 1 コマ 1 課のペースで進めた。予習としてテキストを読んでくることを課題とし、授業では、要約、構成、よく使われる表現など、各課のポイントとなることを考えさせ、意見を言わせるようにした。宿題として、毎回各課の課題の作文（800～1000 字程度）を書かせた。何度か作文を書いた後、授業の初めに、全体フィードバックを行い、構成など間違いが多い部分の確認を繰り返し行った。そのほか、学期中 2 コマでは、間違いが多かった部分にポイントを絞り、自力で間違いを訂正させる時間も取った。

結果と課題

<前期>

(a クラス)

学生間で得意、不得意な点と同じであったり違っていたりしたので、全体でのフィードバック、個人フィードバックを組み合わせながら、授業を進めた。学生は自分の弱点を克服しようと練習を重ね、それが良い結果につながったように思う。個人作業が多い授業であるが、ペアやグループで構成を考えるタスクも時々与えた。ペアやグループ活動を通し、考えを整理しながら構成を組み立てていく過程が明確になったように思う。今後も学生の様子を見ながら、ペアやグループでのタスクも取り入れていきたい。

(b クラス)

クラス内で能力の差はあったが、協働学習のできる学習者がそろっており、学生同士のピアレスポンスにより教室活動を進めることが出来た。また、まじめに取り組む学生ばかりで、宿題の提出期限もほぼ全部の課で守ることが出来た。遅刻、欠席も少なく、また欠席の際は事前に連絡をくれたので、前週に宿題を渡すこともでき、大変スムーズに授業が展開できた。

課題としては、こちらが指摘した直後は文法や語彙を正しく直すことが出来ても、次に作文を書くとき、また同じミスを繰り返してしまうことがあったということである。学習者が自立学習できるような指導と工夫が必要であると考えます。

<後期>

(a クラス)

特に難しいと思われたのは構成の組み立て方であったため、授業や全体フィードバックで考えさせる活動を何度も取り入れた。その結果、自分の考えを整理しながら、構成を組み立てていく過程が理解できたように思う。文法、語彙、構成力などの各学生が不得意とする点については、個別フィードバックで間違いを確認し、勉強方法を繰り返し伝えていった。授業での活動とフィードバックを繰り返し行った結果、学生は自分の弱点を克服しようと練習を重ね、作文の上達につながっていったのだと思う。しかし、限られた時間の中ではすべてを定着させることは難しく、特に、自分の考えを整理する練習を引き続き行う必要がある。今後は、学生のレベルや全体の時間配分も考えながら、より効果的な指導方法を考えていきたい。

(b クラス)

学生によってはこれまで受けてきた作文教育と異なるため、この授業で求められている構成や表現を作文に取り入れるのが難しそうな学生が数人いた。授業ではペアや小グループによる構成作成の話し合いや、上手に書いている作文をクラス全体に紹介したりなどの活動を多く取り入れた。その結果、文法や語彙の間違いが多少見られるものの、学期終了時には全員が分かりやすい構成で書き言葉を用いて作文が書けるようになった。一方で、文章の要約ではポイントがずれた要約文を作成している学生が最後までいた。要約指導については今後の課題にしたい。

<J6 作文>

担当者名：<前期>川端芳子、<後期>a クラス=川端芳子、b クラス=高橋雅子

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：前期 12 名、後期 a クラス 11 名、b クラス 10 名

使用教材：独自教材

目標

新聞記事や小説などの長文を読み、内容理解する事ができるようになることを目標とする。長文の読解を行い、語彙を増やすと共に、様々なスタイルの文章に触れて、読みのスキルを伸ばす。

授業の方法

授業は 1 コマで 1 課が終了するペースで進めた。授業では、まず復習として基本的な文法・語彙・句型などの練習問題を行い、正確な日本語表現の確認をした。次に各課の学習項目（図表の読み取り・文

章の要約・引用など)を導入し、それを用いて800字程度の意見述べの文章作成を行った。その際には、各課のトピックに関する新聞記事等を扱ったり、クラスで意見交換をしたりなど、課題内容を様々な視点から捉え、考えが深められるようにした。学期後半では、前半で扱った項目を使用した総まとめの学習として、文章全体の構成、論理性、語彙・表現の正確さに留意した作文練習を行った。

結果と課題

<前期>

各課の課題作文に取り組むことによって、800字程度の文章を書くポイント、特に資料の解説、文章の要約・引用については概ね習得することができ、まとまりのある文章が書けるようになった。しかし、漢語の語彙の選択や「～にとって、～から見ると、～に対して」などの複合助詞、複文における主節・従属節の関連性などの既習項目にも修正すべき点があり、復習・確認の必要な学生も見られた。今後は学生が苦手とする部分を適宜採り上げて、より正確な表現での文章作成を目指したい。

<後期>

(a クラス)

学期初めには原稿用紙の使い方や硬い表現など基本的な作文の知識・技術に差が見られたが、何度も文章作成の練習を重ねた結果、学期後半にはほとんどの学生が各課の課題に合ったまとまりのある文章が書けるようになった。しかし、中には評価を含めたデータの解説表現や論理的展開のための接続詞の使い方などがなかなか定着しない学生も見られた。今後は学生の習得状況に応じて部分的な表現練習や復習教材などを使い、文章作成のレベルアップをはかっていきたい。

(b クラス)

日本語力の差はないのだが、学び方に差があったクラスであった。授業で扱った構成や表現などを効果的に取り入れて毎回の課題作文を書いていた学生と、なかなか授業の内容を作文に反映できない学生とがいた。学期後半には、ほとんどの学生がしっかりとした構成で、客観的なデータを説明し、文献を引用しながら理論的な作文を書けるようになった。しかし、一方で最後まで授業で扱った内容を見捨て自己流でエッセイのような作文を書き続けた学生もいた。学生によっては、授業を履修する意味や授業でどのように学ぶかなど、基本的な学習方法についても丁寧に指導する必要があるのであろう。

<J7 作文>

担当者名：川端芳子

授業コマ数：週1コマ

受講者数：前期10名、後期8名

使用教材：独自教材

目標

これまでに学習した語彙や文型を使って、「作文」ではなく、大学レベルで必要とされるレポートや報告書等の長文作成を行うことを目的とする。

授業の方法

授業は 2 コマで 1 課が終了するペースで進めた。各課にはトピックに伴う 1200 字程度の文章作成の課題があり、学期を通して 5 本のレポート・小論文を書いた。各課の前半ではテキストの課題文を読み、新聞記事やクラスでの意見交換を通してテーマに関する考えを深めた。後半では前半のクラス活動を踏まえて各自が資料を集め、文章作成をする上での論点・問題提起・構成を考え、クラスで発表した。その後で更に構成と論の展開の推敲を重ね文章を作成した。なお、前期においてはテキストの短文作成練習は授業で扱ったが、後期は提出課題とし、その時間を小論文作成に当てた。

結果と課題

<前期>

今学期の履修学生は全員継続生で、長文の作成に概ね慣れており、課題の提出率も良好であった。しかし、自分で資料を集め、その資料を自分の論の展開に生かして引用するという点について、資料を探す時間的な制約もあり、充分検討することが出来なかった。使用資料の妥当性の判断を次学期の課題としたい。また、クラスでの意見交換や構成を個別に見ていくことは文章を作成する上で有意義であったと思うが、執筆作業がすべて宿題となってしまう、資料集めも含めて授業時間外の負担が大きかったのではないかと思う。そのため、学期の途中で履修を諦めてしまった学生が 3 名いたのは残念であった。本科目の目的を考えれば時間外の多くの作業も当然必要であるが、今後は授業時間の配分を見直していきたい。

<後期>

今学期の履修学生は継続生 3 名、新規の学生が 5 名で、長文の作成に概ね慣れており、課題の提出率も大変良好であった。また、課題執筆前のアウトライン発表においては、活発な意見交換ができ、課題の作成に生かされたのではないかと思う。しかし、自分で資料を集め、その資料を論の展開に効果的に使用するという点では取り組む姿勢に差が見られた。資料を探す時間的な制約もあるが、全体の構成、論の展開と資料の妥当性の判断を苦手とする学生や準備が不十分な学生に対しては、もっと時間を取って個別に指導・検討する必要があると思う。今後はクラス全体の活動、個別指導、授業以外での各自の準備の内容を見直し、教室での時間を効果的に使っていきたい。

2013 年度「J5～J7 聴解・会話」授業記録

コースの概要

聴解・会話は、J5 は中級、J6 は中上級、J7 は上級レベルの日本語能力を身につけているものを対象

としたクラスである。週1回のクラスで、グループディスカッションやプレゼンテーション、ロールプレイなどを学生が自ら進んで行うことが多い。そのため、履修者には積極的に授業に参加することが求められる。

<J5 聴解・会話>

担当者名：<前期> aクラス=保坂明香、bクラス=小松満帆

<後期> aクラス=山内薫、bクラス=高村めぐみ

授業コマ数：週1コマ

履修者数：<前期>aクラス8名、bクラス10名 <後期>aクラス11名、bクラス13名

使用教材：梶本総子・宮谷敦美『聞いて覚える話し方 日本語生中継 中～上級編』くろしお出版
宮城幸枝他『毎日の聞き取り plus40』凡人社

目標

J5は初中級修了レベルの学生を対象としたコースであり、日常生活における様々な場面での聴解会話能力の育成を目指す。相手の話すことを正確に把握し、それに対して自分の意見などをきちんと発表出来るようになることを目標とする。

授業の方法

授業は、1コマを聴解、会話、ショートスピーチに分けて行った。

・ショートスピーチ：グラフの説明と分析結果を述べるものであり、2～3分程度のものを1人2回ずつ行った。また、スピーチの後には、ディスカッションを10分程度行った。1回目は教師がグラフを用意し、2回目は自由なテーマでグラフを選ばせた。

・会話練習：『聞いて覚える話し方 日本語生中継 中～上級編』1～3課を使用し、内容を聞き取り、重要表現を学び、その表現を使って会話を作る、という流れでクラスを進めた。会話はペアで練習し、発表させた。

・聴解：『聞いて覚える話し方 日本語生中継 中～上級編』1～3課を扱った。

結果と課題

<前期>

(aクラス)

日本語能力の差が非常に大きく、クラスメートのスピーチを理解できない、話し合いに参加できないという学生が見られた。スピーチや話し合いに教師が介し、参加するように促したが、学生によっては意見を述べられないこともあった。授業の約3分の1の時間をスピーチと話し合いに当てるため、双方にとって学びの面で十分ではなかったように思い反省が残る。また、アクセントに母語の影響が強く残

る学生が多くいたため、アクセントの訂正にも力を入れた。一学期ではなかなか改善されなかったが、スピーチ後の振り返りで、今後の課題としてアクセント面での向上を挙げている学生がおり、意識化には繋がったように思われる。

聴解は目標とされている大意把握はほとんどできたが、未習の語彙が多い、発話のスピードが速すぎる等の理由で、詳細な内容の理解ができない学生も数名いた。文型の習得の際には、これまで日常的に耳にしていたが、文法的にはよく理解していなかった表現を改めて学ぶ機会となり、有意義な活動になったと思われる。また、表現を習得後に会話の作成を行なったが、この活動を通して、新出文型に対する理解を確かめられるとともに、化石化している誤用についても一度指導することができた。

(b クラス)

クラス内で能力差のあるクラスであったが、クラスメート同士で協力し合い、助け合うよい雰囲気のクラスであった。

ショートスピーチでは、分析や自分の意見を盛り込まず、グラフの説明に終始してしまう学習者が多かったが、教師からのフィードバックやクラスメートからのコメントにより、2回目には改善された学習者が多かった。また、コース開始直後は、ディスカッションの際に、相手の意見を受け入れずに強く否定し、自分の意見ばかりを主張するような発言も目立ったが、指導を重ねていくうちに、徐々に改善されていった。

会話練習では、当初、一部の学習者に、協働の姿勢が見られず、パートナーが苦勞するような場面も見られたが、指導により、最後にはペアパートナーと協力して、場面に合った適切な会話ができるようになった。

全体的に、なかなか横のつながりが構築されず、教師とのみ会話するような姿勢の学習者が多かったが、学期後半には、徐々にクラスメートとの距離が近づき、最終的にはきちんと協力し合うクラスとなった。また、発音に興味のある学習者が多く、その指導も適宜行った。しかし、その結果、聴解練習に使う時間がなかなか取れなかったため、今後は時間の使い方を工夫する必要がある。

<後期>

(a クラス)

聴解の音声を二、三度聞き内容が理解できる学生から、初中級レベルの語彙や表現に躓く学生まで、学生の日本語レベルが様々であった。後者の学生には語彙や表現の予習を課したり、聴解の学習方法の相談を受けたりして対応した。

新学期開始時は、全体的に日本語運用に自信が持てない学生が目立ち、ショートスピーチや発言に対して否定的に自己評価することが多々あった。クラスの雰囲気は協力的かつ和やかで、そのような自己評価を示す学生に対して、積極的に肯定的評価を返す姿勢が窺えた。後期後半に近づくと、スピーチや発言をすることに少しずつ自信を持てるようになったようで、2回目のショートスピーチでは、各学生の関心に応じたグラフを用いたスピーチを、自信を持って行なっていた。また、発表の後のディスカッションも、鋭い質問が投げかけられ、内容の濃い話し合いが展開されていた。

今後は、活動の種類（ペア・グループ・全体）を工夫し、いかにして人数や日本語レベルに対応すればよいか考えていきたい。

(b クラス)

非常に熱心に取り組むクラスであった。どのような課題を与えても、ピア活動が上手にできた。ショートスピーチでは、例年以上に深く分析をすることが出来る学生が多く、それが他の人にもプラス方向にいい影響を与えていた。ただ、自発的に質問をすることが出来る人が少なく、いつも決まった学生が質問をしていたのは残念である。教師からのフィードバックやクラスメートからのコメントには真摯に向き合っていた。

会話練習では、ある場面でどのような言い方が出来るかということ深く考えることが出来た。とくに「このような表現は可能か」「A と B ではどのようなニュアンスの違いがあるのか」などについて活発に質問が出た。その質問に対して、分かる学生は積極的に発言をしていた。

クラス内での差が少し感じられることがあった。そのため、上位レベルの学生も満足できるように、スピーチや会話練習では身近な問題のみならず、社会問題や政治的な問題も話題に取り入れるように心がけた。学生がそれに対して満足できたかどうかを調査する必要があると思う。今後、授業アンケート等で細かく満足度を追う必要があるかもしれない。

<J6 聴解会話>

担当者名：<前期> a クラス＝山内薫、b クラス＝高橋雅子

<後期> a クラス＝保坂明香、b クラス＝平山紫帆

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：<前期> a クラス 4 名、b クラス 7 名 <後期> a クラス 8 名、b クラス 9 名

使用教材：三井豊子・堀歌子・森松映子『ニュースで学ぶ日本語パート 2』凡人社

荻原稚佳子・斉藤真理子・増田真佐子・伊藤とく美『日本語上級話者への道

ーきちんと伝える技術と表現』スリーエーネットワーク

目標

日本語学習者向けに編集されていない教材を適宜用いながら、生の日本語に触れることによって実践的な力を身につけていく。授業では、テープやビデオなどの教材を用い、それらの内容把握、そしてそれについてのディスカッション等を行う。

授業の方法

<前期>

聴解は 2 クラスで 1 課のペースで進めた。授業では、どのような内容の CD を聞くのかを見出しから推測させ、関連語彙の導入を行った上で、聞き取りの練習問題を行った。練習問題の後にはスクリプト

を配布し、それを見ながら CD を聞き、全体の内容をもう一度確認した。最後の 3 クラスでは生のニュースを聞かせた。

会話は 3 クラスで 1 課のペースで進め、1 課が終わるごとに語彙や表現のクイズを行った。授業では、新しい言葉や表現を辞書も用いて学習し、それからペアやグループでそれらの言葉や表現を使った会話の練習を行い、クラス全体で発表という流れで進めた。

<後期>

毎回の授業は、スピーチ、会話、聴解という 3 部構成で進めていった。まず、2 分間のショートスピーチを学期中 1 人 2 回行ない、スピーチの後には質疑応答とディスカッションの活動をした。スピーチのフィードバックは個別に与えた。

次に、教科書『日本語上級話者への道 きちんと伝える技術と表現』を使用しながら、まとまった内容をわかりやすく伝えるための会話練習を行った。1 課、2 課、7 課を扱い、1 課に対し 4 回のコマを設定した。

最後の聴解では、学期の前半は『ニュースで学ぶ日本語パートⅡ』を用い、2 コマで 1 課を扱った。後半は動画ニュースなどの生教材を使用し、スキミングやスキヤニング、ディクテーション等の練習を行った。

結果と課題

<前期>

(a クラス)

会話練習は、これまで学習してきた語彙を、聞き手への「与える印象」や「わかりやすさ」を意識し、どのように伝えることが適切なのかを、クラス全体で考えながら進めた。自発的に発言し、また他のクラスメートの意見に対して、真剣に耳を傾けるクラスで、会話練習への参加意欲も高かった。

聴解教材は、当初は速度やカセット教材の話し方に慣れず、内容の理解に困難を要していたが、徐々に慣れてきて、概ね理解できるようになった。また、既習の語彙を、視覚からは理解できても、聴覚からの理解は難しいという気づきを得た様子が見られた。

ショートスピーチは、一人 2 回ずつという回数がちょうど良かった。1 回目も 2 回目も、概ねテーマに沿い、自国と日本との違いが、実体験を基に適切な分量でまとめられており、時間の調整も上手に行われていた。また、他のクラスメートのスピーチの方法を観察し、応用する様子も見られた。しかし、スピーチ後のディスカッションでは、自国と日本との違いというテーマを受け、「私の国では」という各自の国の紹介に終わってしまうことが多く、議論としてのやり取りが起こりにくかった。今後、議論を活性化させるためにはどうすればよいか、考えたい。

(b クラス)

継続生が 4 名、新規生が 3 名のクラスであったが、新規生のうち大学院生の 1 名が就職活動のため学

期途中でクラスをキャンセルした。

会話練習は、学生が出来ると思込んでいる項目を「わかりやすさ」、「与える印象」を意識しながら学ぶという点で有効だったと思う。

聴解教材は、学習者にとって適度にチャレンジングな内容であった。はじめは慣れないニュースの聞き取りに戸惑っていた学生であったが、回を重ねるごとに聞き方や聞くポイントや慣れ、最後の生教材もおおむね理解できていた。

ショートスピーチは1人2回ずつという回数がちょうど良かった。1回目は、時間を過度にオーバーしたり、テーマから外れていたりした学生もいたが、振り返りの時間に問題点と対策を学生同士で話し合わせたところ、2回目のスピーチではどの学生も構成が練られ、主張の明確なスピーチができていた。しかし、ディスカッションでは、相手の発言を受けて意見を述べるということが最後までできず、各自が自分の意見を述べ合うだけで、議論の発展にはつながらなかった。ディスカッションを録音し、聴きながらフィードバックをしたが、なかなか改善は見られなかった。フィードバックの仕方について今後検討したい。

<後期>

(a クラス)

授業、活動、課題に対して、非常に熱心な学生が多く、意欲的に取り組む様子が見られた。1回目のスピーチの後に個別にフィードバックを与えたが、個々の問題を見つめ直し、次回のスピーチに繋げるべく努力をしていた。クラス内で行なう討議においても、積極的に意見を交わし、同時に、異なる文化的背景を持つ他者を尊重し、発言を心がけていたようである。音声上の問題点は、多くの学生にとって今後も課題になるかと思われるが、これからも自身の日本語をよく観察し、向上に努めてもらいたいと考える。

使用した教材は、学生の日本語力に対し適当で、学生の大半が一度目の聴解練習で大意を把握し、最終的には細部まで理解することができた。期末試験でも全員がまずまずの成績を修めることができ、今学期の学習の成果を感じられる結果となった。

(b クラス)

スピーチは、学期中に2回行ったが、1回目のフィードバックで指摘されたことを、2回目に反映させている学生が多く、スピーチ自体には大いに改善が見られた。しかし、ディスカッションについては、一人一人が自分の意見をただ述べ合うだけで、表面的なやりとりで終わってしまうことが多かった。今後は、お互いの考えを深める議論ができるように、ディスカッションの進め方を工夫していきたい。

会話は、与えられた課題にどの学生も積極的に取り組んでいた。敬語場面でのやり取りを苦手とする人が多かったが、あまり時間が割けなかった。今後はもう少し時間を取って練習したい。

聴解は、当初、スキミングが得意な学生と、スキヤニングが得意な学生とに二分されたが、練習を重ねることで、得意でない方のスキルについても改善が見られた。

<J7 聴解会話>

担当者名：<前期>a クラス=山内薫、b クラス=高村めぐみ <後期>保坂明香

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：<前期>a クラス 5 名、b クラス 6 名 <後期>8 名

使用教材：荻原稚佳子・伊藤とく美・齊藤眞理子『日本語超級話者へのかけはし
—きちんと伝える技術と表現—上級から超級へ』スリーエーネットワーク

目標

日本語学習者向けに作られた教材ではなく、生の教材を用いて、日常生活のみならず、講義や講演など、専門的な内容も聞き取れることを目指す。また、改まった場面での会話のスキルも向上させる。

授業の方法

授業は、おおむね隔週で聴解の日と会話の日に分けて展開した。聴解では、たくさんの生教材に触れることによって、日本語の実践力を高めることを主眼において練習を行った。例えば、社会問題、経済問題等、まずはその日のトピックについて、自分が持っている情報をクラスメートと共有した。次に、DVD を視聴しながら、新出語彙、表現の導入を行った。最後に、再度テーマについてのディスカッションを行い、グループで出た意見をまとめ、代表者が発表するという形式で進化した。また、毎回 DVD の要約、自国との比較等についてのレポートを宿題にした。

会話では、友達同士の会話ではなく、「きちんとした日本語」で自分の意見を伝える練習を行った。例えば、その日に取り上げる会話の内容、場面、相手を提示し、それに相応しい表現、語彙をグループで話し合った。その後、会話例を提示し、それを自分達で応用し、会話練習を行った。

<後期>

会話教材として『日本語超級話者へのかけはし きちんと伝える技術と表現』を使用した。2 課、3 課、5 課を扱い、1 課に対し 4 回のコマを設定した。

聴解教材は、前半は指定の生教材(以下、参照)を用い、2 コマで 1 つの教材を扱った。後半は担当教員が都度、学生の興味に合う教材を選び使用した。番組名は以下のとおりである。

[指定教材]

- ・クローズアップ現代-“無縁老人”をどう支えるか
- ・ガイアの夜明け-攻防！教育マネー “格差時代”を生き抜く
- ・カンブリア宮殿-不可能を可能にする高齢化時代の旅行のプロ

[今学期使用した教材]

- ・クローズアップ現代-家族とは？親子とは？揺れる法制度
- ・クローズアップ現代-可視化はどうあるべきか 取り調べの改革の課題

授業でビデオを視聴した後に、ディスカッションを行ない、授業後に、話し合いの内容を含む要約レ

ポートを宿題として課した。

期末試験は、会話の筆記試験と要約レポートの論述試験を実施した。要約レポートは宿題と同様の形式で、ビデオを視聴し、要約、自文化との比較、意見を書き述べるものである。

結果と課題

<前期>

(a クラス)

少人数のクラス（継続生及び大学院生 5 名）で、当初より発言しやすい雰囲気があり、また、学習意欲も高かった。プレゼンテーション及びディスカッションにおいては、自国と日本との違いだけではなく、日本での個々の様々な経験を通した、深い観点からの意見のやり取りが行なわれた。終始、穏やかで友好的な学習環境で、皆、授業活動に協働的かつ積極的に参加しており、ペア活動・グループ活動においても熱心に取り組んでいた。出欠席や宿題提出においても、時々滞りがある学生も見られたが、全体的に問題がなく、最後まで全員の学習意欲が維持されていた。

今後の課題として、少人数のクラスにおいてはグループ活動・ペア活動を行うと、代わり映えがなく、意味がなくなってしまう可能性もあるため、今後はさらに課題・練習により、全体・グループ・ペアなど、どの活動がいいのか考えたい。

(b クラス)

継続生のみクラスであったが、中だるみをするのは一切なく、学期終了時まで授業に集中することができた。会話練習は、特に定形表現について様々なバリエーションを学ぶことができた。学生の方から「こういう場面でこういう言い方は適切か」という質問が多く出たため、他の学生にとってもいい刺激になった。学生の国籍が様々だったため、DVD の視聴後のディスカッションは、自国の事情を説明しながら、いろいろな国と比較することができた。聴解と要点をまとめて口頭発表をすることが目的ではあったが、各国の社会、文化についても知る非常にいい機会になったと思われる。

プレゼンテーションは、準備は主にピアで進めた。自律学習ができる学生がそろっていたため、お互いに学び合う姿勢が良かった。

今後の課題としては、今回のように学習スタイルが既に確立している学生の場合は、教師が指示した活動をさらに発展して、学びの楽しさを知るような機会を与えたいと思う。

<後期>

既に自律した学生が多く、自身の学習に対し、責任を持って学んでいた。使用した教材は学生にとって適当で、会話教材を通して、社会文化的な知識や表現を補うことができたように思われる。また、2 課では口語表現を学んだが、曖昧に理解していた内容について、改めて学ぶ機会が得られ、学ぶ意義のある内容だったと考える。

ビデオ内容は、大意が把握できるものも大意の把握が困難なものもあったが、全体的には、学生の能力に見合った内容であったと考えている。理解が困難なものは専門性の高い内容であり、聴解能力によ

るものではなく、語彙不足によるものだったと推察される。今後の課題としては、学生個々が様々な形でより多くの日本語に触れ、より多くの語彙、知識を吸収することが挙げられる。また、聴解能力は十分にあるものの、算出された発話、レポートを見ると、問題点が見られるため、既習事項に対してもより細かく自身の日本語をモニターする必要があると考える。

多くの学生は日本語学習に対し真摯で、意欲を持って学んでいたが、1名の学生に遅刻、欠席、レポートの遅延が見られた。学期中盤に、少し改善されたようにも思われたが、継続できず、今学期は最終的な改善には至らなかった。

2013 年度 J8 授業記録

コース概要

J8 は、既に高度の文法・漢字・語彙を習得しており、大学における学習・研究が十分日本語で行える学生を対象としたコースであり、様々な目的に沿った科目を展開している。展開している科目は、大学や大学院での学習、研究生生活のための日本語能力を伸ばす科目と、実社会の中で求められる日本語能力を伸ばす科目、日本語そのものについての知識を身につける科目など、多岐にわたっている。また、J8 で展開する科目は、短期留学生のみならず、学部や大学院の正規学生（日本語を母語としない学生）の履修も可能であり、様々な背景を持つ学生が、一緒に学ぶ機会も提供している。

各科目の詳細は次に示す通りである。

<日本の文化・社会：前期 A、C、後期 B>

担当者名：<前期 A>金庭久美子、<後期 B>丸山千歌、<前期 C>高橋雅子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：(池袋) 前期 A 5 名、後期 B 7 名、(新座) 前期 C 0 名

使用教材：独自教材

目標

高度な日本語能力を運用して、日本の社会や文化について考え、理解を深めることを目的とする。

授業の方法

<前期 A>

日本の文化や社会に関わるテーマを選び、それに関する文献を読んだり、ビデオを見たりする。講義も行うが、主としてテーマについてのディスカッションやプレゼンテーションを中心とした授業を行い、最後のまとめとしてレポートを提出する。

トピックとして、「日本の流通システム」「戦後の日本と技術革新」「食品業界のしくみ」を取り上げた。最終プレゼンテーションとレポートは日本社会に関するトピックを各自選び、課題に取り組んだ。

<後期 B>

授業で取り上げた各トピックについて、DVD と読解資料の複数教材を使用した授業展開を計画していたが、履修者のほとんどが口頭運用力の向上に課題があると判断し、履修者との合意の上、第4週あたりから DVD と発表を中心とする授業に切り替えた。またゲストスピーカーを招いたセッションも設けることができ、効果が上がったように思う。

結果と課題

<前期 A>

授業で取り上げた各トピックについて、DVD や読解資料などの複数の教材を使用して、各自が毎回欠かさず課題を行い、戦後から現在にいたるまでの日本事情について理解を深めることができた。読解資料として与えた資料をレジюмеにする際、最初はうまくいかなかったが、最後には要点を押さえ、まとめることができた。また、そのレジюмеを使つての発表も回を追う毎に改善された。課題としては、レポートのための参考文献の引用の仕方である。内容がよいにもかかわらず、適所で適切な引用できなかった。次年度は最初の段階から参考文献の引用について留意して指導をしていきたい。

<後期 B>

履修者が学習意欲が高く日本語力もあるものの、自らの発信を好まない傾向にあったため、このような学習者群との授業の組み立てについて検討する機会となった。

<日本の文化・社会 C>

履修者がいなかったため開講されなかった。

<日本語の諸相>

担当者名：長島明子

授業コマ数：週1コマ

受講者数：前期6名、後期5名

使用教材：独自教材

目標

一つの言語としての日本語を取り上げ、他の言語と比較した場合に特徴的な日本語の側面を理解する。擬音語・擬態語、様々な感情表現、微妙なニュアンスを表す副詞、位相や役割語など、日本語の特徴的な側面を取り上げ、それについての論文を読んだり、調査したりする。

授業の方法

<前期>

初めの5回は敬語や配慮表現を取り上げ、相手に配慮した依頼、お礼、謝罪、断りなどのメールの書き方を指導した。次の9回は日本語の擬音語・擬態語を取り上げ、小説、エッセイ、広告、料理などいろいろな分野で、実際にどんな擬音語・擬態語がどのように使われているか分析させ、学習した擬音語・擬態語を使って、文章を書かせた。また、擬音語・擬態語の特徴などについて書かれた本の内容について、発表及びディスカッションを、最後に日本語の擬音語・擬態語に関して調べたことについて発表をさせた。

<後期>

今学期は若者言葉、メール文体、人の呼称、役割語を取り上げた。このうち、役割語に一番多くの時間を割き、小説、アニメ、漫画、ドラマ、映画に見られる役割語を取り上げた。授業ではそれぞれのテーマについて講義したのち、文献を読んで内容をまとめさせたり、いくつかのテーマについて調査・発表をさせたりした。発表後は質問や意見交換をした。最後は各自が興味・関心を持ったテーマについて調べ、分析し、発表させた。

結果と課題

<前期>

敬語・配慮表現については、尊敬語や謙譲語や敬意表現を語彙・表現としてはよく知っているのだが、メールを書くとなると、言葉が足りず、相手に伝えたい内容が十分伝わらないことがあった。また、メールの形式にもまだ慣れていない。擬音語・擬態語については知らない語彙も多くあり、授業を受けて、擬音語・擬態語に対して興味や理解が増したようである。擬音語・擬態語の本を図書館から借りてきて読んだり、友人にいろいろ質問したりした学生もいた。しかし、自由に使えるようになるにはもっと練習が必要だと思われる。今後は映画やドラマなども利用し、運用力の向上に結びつくよう授業を行っていくつもりである。

<後期>

若者言葉とメール文体はその知識量が学生によってかなり差があった。日本滞在が長い学生はよく知っていたが、来日してまもない学生は知らない言葉が多かった。人の呼称は各自の友人・知人に聞いて調査したが、日本語の呼称が自分の母語に比べて複雑だと実感したようであった。役割語はドラマや映画の中の言葉を理解はしていても、役割語としては特に意識していなかったもので、初めて知ることが多かったようである。今期は読ませた文献・資料があまり多くなかったため、今後はもう少し多くのものを読ませて、内容の理解や各自の調査がより深くできるようにしたいと思っている。

<日本語論文読解>

担当者名：丸山千歌（池袋）、谷啓子（新座）

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：（池袋）前期 7 名 （新座）前期 2 名

使用教材：独自教材

目標

日本語で書かれた学術論文の内容が読めることを目指し、日本語論文の構成語彙などについて学ぶ。

授業の方法

大きな流れとしては、以下の通りである。

前半：教師から提示された共通論文や、個々の専門分野で探した論文を素材に「論文の構成」を把握する。

後半：担当する自分の専門分野の論文をフローチャート化して発表する。

最終課題：担当論文についての詳細なレジユメの作成とゼミ形式での発表とディスカッション

各回において、「論文とは何か」「論文の探し方」→担当論文の紹介（第1～2週）→「三部構成」「序論・本論・結論の役割」図表の説明→共通論文や担当論文で確認（第3～7週）、「参考文献や引用のルール」「研究方法」（第8～9週）を扱い、論文特有の表現についても実際の論文の中で随時確認をした。

結果と課題

<池袋>

学部生 5 名（3 年生 2 名、1 年生 3 名）、特外生 2 名というクラス構成であった。全体的に控えめで落ち着いた雰囲気クラスであったが、それぞれの学生は出席率がよく、与えられた課題を確実にクリアしていった。共通論文を軸にして段階的に論文の読み方を指南し、各学生が担当論文で実践を行ってみるという方法は、どの学生にとっても有益な内容だったように思う。最終的にレジユメを作成し担当論文について報告をするという課題では、授業で学んだ技術を十分生かすことができていた。

今後の課題としては、共通論文を通して論文を読み解く作業が挙げられる。今回は学生の主体的な参加を期待して、タスク形式で行ったが、特に学部 1 年次の履修生にとっては論文の内容そのものが難解に感じられたようでタスク達成が難しかったように思われた。多少難解な内容であっても構造をつかむことで要旨の把握が可能になることの導入を目指した活動であるので、次回担当した際にはこの活動の導入はさらに工夫したいと思う。各自に論文を選ばせる際、興味のある分野ではあったようだが、内容的にかなり難易度の高いものを選んだ結果、自分が理解できない部分は聞き手も理解できないであろうという想定をして発表の際には難解な部分を割愛しようとする学生がいた。この点についても、論文の読解やブックレポートの意義についてさらに丁寧な導入を行い、より成果があげられるよう努めたい。

<新座>

履修者は学部生1名（コミ福3年）、J8 特外1名の男性2名であった。担当論文は、学部生は専門に関するものを、特外生（母国では日本語学科）は帰国してからの卒業論文に役立ちそうなテーマを選んだ。2名とも毎回の小さな課題から最終発表にいたるまで非常に熱心に取り組み、学んだことを生かしながら次のステップに進むことができた。少数であったが、その分、OHC を使った発表やコメントにじっくり時間をかけることができた。

論文読解に関連して、引用方法や参考文献の書き方、レジユメの作成や口頭発表上の注意を扱ったが、履修者によるとここで学んだスキルが他の授業の発表等でもいかされたとのことであった。

担当論文が1本のため、途中飽きるのではと懸念したが、「一人でざっと読むことはできるが、授業でないとこのように分析しながら読まないから1本で十分」「最終発表を通して聞くことで、それまで断片的に聞いていたクラスメイトの論文の全体像がつながって理解できた」との感想があったので、本数変更の必要はないと思われる。

課題としては担当論文の選択であろう。学会誌や紀要などから、査読を通ったものを選ぶようにしているが、読み始めてから誤字脱字を見つけたりして1名が変更を考えたことがあった。複数選んで、序論までは全て分析し、その後1本に絞る方法も検討したい。

<日本語論文作成法>

担当者名：金庭久美子（池袋）、谷啓子（新座）

授業コマ数：週1コマ

履修者数：（池袋）後期3名 （新座）後期0名

使用教材：独自教材

目標

卒業論文や学術的な論文作成に必要とされる語彙・文型・スキルについて学び、高度な日本語論文作成能力を身につけることを目指す。日本語の論文の構成、スタイル、使用される語彙や接続表現、文型の特徴について学び、自らそれらを用いて構成の組み立てや短文作成などを行う。その後実際の論文作成を行い、実践力をつける。

授業の方法

まずは「論文とは何か」「論文の構成」「表現や用語」を扱い、同時に文献検索の方法を確認した。その上で各自の研究目的、研究課題、研究背景の検討に入り、並行して先行研究の収集と整理を行った。それぞれの研究テーマや先行研究に関しては、まとめたものを OHC を使用して発表し、フィードバックを行った。後半は、ふさわしい調査方法や必要となる根拠について検討した。その後、論文のアウト

ラインを作成・検討した。その後、最終課題としては、論文の一部あるいは分析結果の発表を行い、作成した論文などを提出させた。

結果と課題

<池袋>

最後まで受講を継続した者はいなかった。3名のうち、1名が学部3年生（11月までは全出席であったが、その後長期病欠のため受講辞退）、1名が学部2年生（長期欠席のため受講辞退）、もう1名が、後期に修士論文提出予定の大学院生（2回目受講辞退）であった。学部生は卒業論文はまだ先のことで動機が不十分であったようである。一方、大学院生は、今まさに修士論文の執筆しており、こちらが想定している論文作成の練習では間に合わない状況であったようである。大学院生の場合、ニーズがこちらの設定と異なったため、授業開始後の授業内容では配慮したつもりではあるが、学部生、大学院生のいずれのニーズも十分満たせたとはいえなく、中途半端になってしまった感は否めない。受講目的が異なる学生への対応は、今後の課題としたい。

<新座>

履修者がいなかったため開講されなかった。

<キャリアジャパニーズA>

担当者名：<前期>山辺真理子（池袋）、栗田奈美（新座）、<後期>高村めぐみ

授業コマ数：週1コマ

履修者数：（池袋）前期6名、後期5名、（新座）前期2名

使用教材：独自教材

（参考資料『外国人留学生のための就職活動ガイドブック』『立教就職ガイド』）

目標

日本での就職活動に必要な日本語やビジネスマナー、様々なスキルを学び、それを使えるようになることである。そのために、就職活動の際に必要とされる日本語に関連する事柄を、大きく「作文スキル」「発話スキル」「ビジネスマナー」に分類し、それぞれについて実践的に学んでいく。

授業の方法

<池袋>

「作文スキル」「発話スキル」については、実際に自分で何度も書いたり話したりする活動を行い、それに対するフィードバックをクラスの仲間、および教員から受けることでスキルアップを目指した。具体的には、就職活動に必要な日本語に関連する様々な事柄—「エントリーシートの書き方」「自己PRの

仕方」「集団面接の受け方」「個人面接の受け方」などを実践的に授業で行った。また、服装や態度などのビジネス関連マナーについても学び、それを実際の就職活動に生かすことが出来るように授業を展開した。さらに、前期・後期各1回ずつキャリアセンターの方を招き、就職活動の概要に関する説明を聞き、就職活動全体の流れを学んだ。

<新座>

ビジネスマナー、敬語等の基本的な事柄を扱うと同時に、エントリーシートの書き方や面接の受け方等、実際の就職活動を想定した練習を行った。具体的には、就職活動の流れに従って必要な情報を提示した後、作文、発表といったアウトプット中心の活動を行った。また、就職活動の参考となる視聴覚教材も使用した。さらに、ゲストスピーカーとしてランスタッド株式会社野澤和世氏をお招きし、就職活動に対する心構えや実際の事例を伺うことで、活動への動機づけを高めた。

結果と課題

<前期、池袋>

履修者6名のうち1名は院の2年生で就活進行中、残りの5名も、日本か母国での就活を間近に控えており、全員が真剣かつ熱心に授業に参加した。自己分析、自己アピールや面接についても互いにアドバイスをし合い、互いの姿を見ることで、自分なりの気付きが生まれていた。教員は、刺激を与えつつ見守りながら、適宜アドバイスをした。時折書かせたリアクションペーパーには、「就活の前にこの講座を受けておきたかった」「過去を振り返り将来の仕事について真剣に考え、それを日本語でアウトプットする経験ができてよかった」などのコメントがあった。

今期は、程よい人数と多様性のある受講者でクラスが構成され、学生同士の学び合いが効果的に進んだが、年度やキャンパスによっては1名のみの履修ということもある。その場合、教師が丁寧に指導できるというメリットもあるが、学び合うメリットが活かせない。社会人になっていく学生にとって、大切な科目だということを学生たちに伝える努力が必要だろう。

<前期、新座>

履修者は特外学生2名であったが、いずれも日本での就職活動を予定しておらず、知識としてキャリアアジャパニーズを学びたいという学習者であった。そのため、課題には熱心に取り組むものの、やや現実味に欠ける傾向があった。そこで、コース後半は、企業研究や志望動機作成に予定していた時間をそれぞれが望む進路（専門職）の選択理由を簡潔に説明する練習等に充てたが、もう少し早い時点から一般的なビジネスマナー等に割く時間を増やしてもよかったように思われる。

今後の課題は、就職活動を予定していない履修者にとっても有益であると感じられる学習内容になるよう、シラバスの範囲内で臨機応変に対応していくことである。

<後期、池袋>

学部生 3 名、特外生 2 名のクラスだった。特外生ではあるが、2 人とも日本での就職も視野に入れていたため、非常に熱心に授業に取り組んでいた。出席率もよく、提出物も丁寧に作成されたものが多かった。また、ゲストスピーカーの講師に対しては、例年以上に熱心に質問をしていた。学部生は 3 年生で、学期の途中から本格的な就職活動に入ったため、毎回、授業中に何らかの情報を吸収しようという姿勢が見られた。特外生の 2 名もその姿に触発されて、日本での就職の厳しさを知ることになったと思う。教師としては、今後も就職活動の最新の情報を常にキャッチする姿勢が求められると思う。

<キャリアジャパニーズ B>

担当者名：<前期>小松満帆（池袋）、栗田奈美（新座）、<後期>小松満帆（池袋）

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：（池袋）前期 3 名、後期 3 名、（新座）0 名

使用教材：独自教材

目標

日本企業への就職を希望する者を対象に、日本独特の就職試験（主として国語分野）を突破するために必要な知識とスキルを身につけることを目標とする。就職試験に出題される国語分野、常識分野の問題を数多く解き、それらについての知識を身につけると同時に、試験対策を行う。

授業の方法

日本国内で実施されている就職試験の国語分野や常識分野において出題される試験問題について、カテゴリーごとにまとめ、その傾向と対策を学び、実際に多くの問題を解いていくことで、必要とされる知識を身につけさせた。それと同時に、日本国内で就職活動を行う際に知っておくべき情報（日本での就職活動の流れ等）を提示することで、動機付けを図った。

結果と課題

<前期、池袋>

前期は 3 名という小さいクラスであり、その中でも基礎知識量に差があったが、互いによく助け合い、伸ばし合ったクラスだった。日本語母語話者を対象とした就職試験の国語分野を扱っているだけに、覚えるべき情報量が膨大で、毎回多くの課題を課したが、きちんと予習復習、宿題をこなし、苦しみながらも、多くの知識を身につけることができた学生がほとんどであった。また、知識を身につけ、日本語力を伸ばすことに熱心な学生が多く、授業中の発言や質問も活発に行われた。3 名のうち、実際に日本での就職を考えているのは 1 名だけであったが、それぞれに授業のゴールを見つけ、意欲を持ってクラスに臨んでいたため、クラスメイト同士が高め合うクラスとなった。

<後期、池袋>

後期も3名という小さいクラスではあったが、そのうち1名が就職活動経験者、また全員が就職活動をしている最中であったため、非常に意欲が高いクラスであった。お互いに助け合う姿や、就職活動について相談し合う姿がよく見られ、励まし合いながら就職活動、就職試験への勉強を行っていた。予習復習も積極的に行っており、授業で学んだことがきちんと積み上がっていた。

<前期、新座>

履修者がいなかったため開講されなかった。

<ビジネス日本語口頭1>

担当者名：<前期>藤田恵（池袋）、栗田奈美（新座）、<後期>栗田奈美（池袋）

授業コマ数：週1コマ

履修者数：（池袋）前期13名、後期8名（新座）前期7名

使用教材：独自教材

目標

ビジネスで必要とされる構文レベルの日本語力（聴解・発話）を身につける。

授業の方法

<前期>

「依頼」「説明」「電話応対」「プレゼンテーション」等、ビジネスシーンに必要な会話力をつけるため、徹底した口頭練習を行った。まず、待遇表現を確認しながら基本的な談話練習をした上で、それを応用したロールプレイを行った。最終的には、学生自らが場面を設定し、会話を作成して発表し、教師がフィードバックする形式を取った。「電話応対」についてはオーラルテストを実施し、最終課題としては新商品のプレゼンテーションを課した。また、口頭練習と並行し、ビジネス日本語能力テスト形式の聴解練習及びビジネス語彙の導入を行った。

<後期>

「依頼」「説明」「電話応対」「プレゼンテーション」等、ビジネスシーンに必要な会話力をつけるため、徹底した口頭練習を行った。まず、待遇表現を確認しながら基本的な談話練習をした上で、それを応用したロールプレイを行った。最終的には、学生自らが場面を設定し、会話を作成して発表し、教師がフィードバックする形式を取った。「電話応対」についてはオーラルテストを実施し、最終課題としては新商品のプレゼンテーションを課した。また、口頭練習と並行し、ビジネス日本語能力テスト形式の聴解練習及びビジネス語彙の導入を行った。

さらに、ゲストスピーカーとして Mitsubishi UFJ Morgan Stanley Securities Co., Ltd., Head of Sales, Glen S. Wood 氏をお招きし、日系企業と外資系企業との違いや、外国人社員として日本で仕事を

するための心構えを伺った。

結果と課題

<前期、池袋>

池袋開講クラスは、履修者 13 名（学部 8 名、特外 4 名）のうち、最後まで授業に出席したのは 12 名であった。学生の中には、就職活動やインターンシップに参加し、既にビジネス日本語の必要性を感じる場面に遭遇している者もいたため、全体的に学習意欲が高かった。そのため、各課の課題には真剣に取り組み、表現の定着も早かった。

授業では各課の最後に会話発表を行ったが、尊敬語と謙譲語の使い分けがスムーズに行えない学生が多かった。一般的な敬語の知識はあるものの、学生生活の中では使用機会があまりないため、運用能力の面ではまだ十分ではなかった。そこで今後は、敬語の運用能力をより向上させられるような授業方法を検討していきたい。

<前期、新座>

新座開講クラスは人数が少ない学期もあるが、今期は学部 2 年生 3 名、3 年生 1 名、特外学生 3 名、計 7 名というクラス構成だったため、グループワークも含め、しっかりしたクラス活動が可能となった。全般的に日本語運用能力の高い学習者が多く、導入、練習もスムーズで定着も早かった。最終発表も完成度の高いものであった。

一方で、ビジネスに関する知識が少ないこともあり、教えられたことをそのまま受け入れるという、やや受身の学習態度になる傾向もあった。今後の課題としては、学習者に問題を提起し、自発的な発話や気づきを促せるような内容を検討したい。

<後期、池袋>

学部 1, 2, 3 年生各 2 名、特外学生 2 名というクラス構成であったが、正規留学生には欠席の目立つ学生もおり、最後まで授業に出席したのは 5 名であった。就職活動に役立たせたい、ビジネス日本語の基礎を学びたい等、受講動機はさまざまであったが、いずれの学生もしっかりと口頭練習に取り組んでいた。口頭クラスという性格上、ペアワークやグループワークが大半を占めたが、自分のペースを守りすぎる嫌いのある学生がおり、グループ分けには配慮を要した。特にサイズの小さいクラスの場合には、練習方法を柔軟に変えていく必要があると感じた。

<ビジネス日本語口頭 2 >

担当者名：<前期>藤田恵（池袋）、<後期>栗田奈美（池袋、新座）

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：（池袋）前期 0 名、後期 5 名 （新座）後期 1 名

使用教材：独自教材

目標

ビジネスで必要とされる談話レベルの日本語力（聴解・発話）を身につける。

授業の方法

「アポイントメント」「交渉」「苦情処理」「プレゼンテーション」等、主に社外の相手と円滑なやり取りができるレベルを目指し、口頭練習を行った。ビジネス日本語口頭1クラス同様、談話練習とロールプレイが中心であったが、待遇表現のバリエーションも大幅に増え、かなりの長さを持つものを練習した。それぞれの単元が終わるごとに、学生自らが設定した場面におけるロールプレイテストを実施し、翌週録音したものをもとにフィードバックを行った。最終課題としては、経営コンサルタントとしてクライアント向けの提案をするというプレゼンテーションを課した。また、口頭練習と並行し、ビジネス日本語能力テスト形式の聴読解練習及びビジネス語彙の導入を行った。

結果と課題

<前期、池袋>

履修者がいなかったため開講されなかった。

<後期、池袋>

学部2年生3名、4年生1名、大学院生1名というクラス構成で、うち1名は既に日本企業への就職が決まっており、他の学生も日本での就職を強く希望していたため、高い動機づけを持って授業に臨んでいた。最終プレゼンテーションではそれぞれ工夫を凝らし、パワーポイントを使用して、わかりやすい提案ができた。日本語運用能力の高い学生が揃っていたため、コース終盤では、ビジネス上のタスク達成にとどまらず、場に即した話し方やポーズの置き方、発音指導等も導入した。学生からはこういう練習がしたかったとの声があがったため、クラスのレベルに余裕がある場合には、コース当初からこのような練習を採り入れていくことも検討したい。

<後期、新座>

受講生は学部2年生1名であった。授業で学んだフォーマルな待遇表現をアルバイト先で使用することで、自分に対する周囲の評価が変わってきたとのことで、高い動機づけを保ち、積極的に練習に取り組んでいた。一方で、会話練習がすべて対教師となってしまう等、他の学生との学び合いの機会がなかった点は、やや残念であった。関連する視聴覚教材を採り入れ、他の視点からの気づきを促す等の工夫をしたが、今後もこのようなクラス形式の場合には、臨機応変な授業展開を心がけたい。

<ビジネス日本語 文書>

担当者名：<前期>山辺真理子（池袋）、<後期>丸山千歌（池袋）、高橋雅子（新座）

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：（池袋）前期 13 名，後期 4 名 （新座）後期 0 名

使用教材：独自教材

目標

日本でのビジネスに必要な日本語能力（読解、作文）について学び、使えるようになる。

授業の方法

<前期、池袋>

ストーリー性のある教材を使い、仕事の経験のない学生が仕事の流れを理解しつつ、場面に合わせたメールや文書を作成する能力の養成を目指した。具体的には、授業内で短時間に課題をこなし、それらを書画カメラで写しながら、その場でフィードバックを行った。その後、解答例を示し、重要な点、配慮すべき点について解説した。各課題の正解は一つではないので、学生が作成した文書にその場でコメントすることで、考え方の基本が学べたように思う。提出された文書類は、学生のレベルに合わせて添削をし、翌週返却した。

扱ったメールや文書は以下のようなものである。お知らせメール、照会メール、送り状、依頼メール、承諾メール、断りメール、会議報告書、稟議書、始末書などである。メール文は社内と社外に分け、また基本メールを学んだあとで、ねじれた状況を作り、より配慮が必要なメールを書くなど、螺旋状に繰り返しながらレベルを上げていった。

<後期、池袋>

ストーリー性のある教材を使い、仕事の経験のない学生が仕事の流れを理解しつつ、場面に合わせたメールや文書を作成する能力の養成を目指した。具体的には、授業内で短時間に課題をこなし、それらを書画カメラで写しながら、その場でフィードバックを行った。その後、解答例を示し、重要な点、配慮すべき点について解説した。取り組む課題の状況設定が具体的であったことで、文書を書く際に検討すべきことをより検討的に話し合い、日本語力の向上につながれたと思う。

結果と課題

<前期、池袋>

今期の履修登録者は 13 名であったが、最終的には 12 名の履修者が最後まで熱心に受講した。内訳は、院生 4 名、協定校からの学部生 2 名、正規の学部留学生 6 名である。正規の学部留学生 3 名は 1 年生で、他の学生に比べ日本語レベルが低く、最初は心配したが、前期の終わりには多少不自然さはあるものの、ビジネスレベルのメールや文書のある程度書けるようになった。残りの 9 名は、就活最終段階の 2 名を

含め、日本語レベルが高く、与えられた状況で、場面と相手との関係に配慮したメールや文書が書けるようになっていった。90分間手と頭を動かし、宿題も出るハードな授業に、どの学生も力を抜くことなく取り組んだ。課題を書画カメラで見せながら、学生たちに良い点や改善点に気づいてもらう授業では、各自の積極的な参加が学びの質を左右するが、このクラスは、全員が協力的だったことに感謝したい。

ただ、この形式で授業を行うには、12名の履修者では、少し駆け足にならざるを得なかった。各自の課題について、授業内でももう少し丁寧なフィードバックをするためには、できれば10名以内の履修者の方が良い気がする。

<前期、新座>

履修者がいなかったため開講されなかった。

<後期、池袋>

少数であったが履修者全員が積極的に取り組んだ。次回はPPTを作成するなどして、さらに効果的な授業を作っていきたい。

2013年度 日本語演習 授業記録

コースの概要

演習科目は、初級、初中級レベルの日本語を用いて、内容を学ぶ科目であり、演習1はJ2レベル、演習2はJ3レベル、演習3はJ4及びJ5レベルの学生を対象とするものである。演習科目は、いわゆる語学の科目ではなく、学生が身につけているレベルの日本語を「道具」として用いながら、演習1では「アニメ／日本の歌」、演習2では「映画／まんが」、演習3では「小説／雑誌」について内容理解を目指す科目である。

演習1～3の詳細は以下の通りである。

<演習1>

担当者名：小松満帆

授業コマ数：週1コマ

受講者数：前期6名、後期8名

使用教材：独自教材

目標

プレイスメントテストでJ2およびJ2Sにプレイスされた学生を対象とし、これまでに学習した日本語の語彙や文型を用いて行われる講義を理解し、日本のアニメ文化についての理解を深めることを目標とする。

授業の方法

<前期>

J2 および J2S までに学習した語彙や文型を用いて、出来る限り日本語で講義を行った。その際、必要に応じて英語も使用した。日本アニメの歴史と日本社会の変遷、アニメヒーローの変遷と若者像、アニメヒロインの変遷と女性像、アニメにおける役割語、アニメに見る日本文化、クールジャパンとアニメの世界進出を扱った。毎回アニメ作品を取り上げ、それらの作品を通して、日本社会の変遷、現代日本の社会や文化、若者像、日本人の考え方について触れた。学生は、講義を聞いて、ディスカッションやプレゼンテーションという形式で、考えたことや自国との比較などを発表した。その際、出来る限り日本語を用い、必要に応じて英語を使うことも許可した。また、中間プレゼンテーションでは自国のヒーロー像の紹介と日本との比較、学期末には、授業で学んだ内容とショートエッセイを書かせる期末テストを実施した。

結果と課題

<前期>

アニメに詳しい学生もそうでない学生も履修していたため、双方の視点からの意見や発言を得ることができた。しかし、アニメについてアカデミックに考え、深く考察することのできる学生がいる一方で、アニメをただ観て楽しむ、という視点から抜け出せない学生もおり、ディスカッションなどをさせた際に、学生間に温度差が生まれてしまった。また、発言が多い一方で、クラスメイトの意見や考えを積極的に聞こうとしない学習者もおり、結果として、クラスメイトと意見を交換する、というよりも、対教師のコミュニケーションしか図らないなど、ディスカッション等の活動において、協力して進めることが困難な場面もあった。

アニメを題材として日本社会や日本人の思想について考える、という目的においては、こちらが提示したテーマからさらに広げ、マーケティングや政治、経済との関連など、深く考察することができた学習者も多く、最終的には、日本社会や日本文化、日本人への理解を深めるいい契機となったといえるだろう。より理解を深め、協力して活動を進めていくためにも、授業目的をより明確に学習者に伝え、テーマごとに目標を設定していくなど、学習者自身が達成感を持てるように導く工夫が必要である。

<後期>

後期は、学生の日本語力、英語力にばらつきがあり、各説明に時間がかかった。しかし、出席している学生は、どのテーマにおいても深く考察し、自国との比較や社会的な要因等も踏まえて考えることができていた。ディスカッションなどでは、自ら積極的に発言する学生は少なかったが、それでもこちらから指名をすると、自分の意見をきちんと述べることのできる学生が多く、クラスメイトの意見を聞くことで、お互いに刺激し合えたクラスであった。また、アニメそのものだけでなく、日本アニメの位置づけや社会との関わり、経済効果等、広い視野で捉えている学生が多かった。

一方で、欠席が多い学生、途中で何も言わずに来なくなってしまった学生もおり、クラス全体の雰囲気はあまりよくなかった。欠席や遅刻が多い学生が複数名いたことで、全体的に落ち着かない雰囲気となり、自由に発言できる場が構築しきれなかった。

今後は、出席している学生が遠慮することなく自由に意見を述べられる雰囲気作りを課題としたい。

<演習 2>

担当者名：高村めぐみ

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：前期 2 名、後期 3 名

使用教材：独自教材

目標

日本の映画、マンガ、ドラマをテーマとして授業を行う。毎学期、いくつかの映画やマンガを取り上げ、それらの作品を通して、現代日本の社会や文化、そして日本人の考え方などについての理解を深める。また、このクラスは「日本語」の授業ではなく、これまで参加者が勉強してきた日本語を「道具」として使って日本文化や日本社会を学ぶことを目標としている。

授業の方法

「家族」をテーマに授業を展開した。近代から現代にかけての日本の家族の様子が表れている映画やドラマのワンシーンを見たり、家族をテーマに描かれたマンガを読んだりしながら、感想や意見を述べ合った。その後、そのシーンから分かること、想像できることなどをディスカッションした。その際、自分の国との共通点や相違点を意識しながら議論が展開できるように授業を組み立てた。そして、自国および他国の「家族」に対する意識、形態の共通点や相違点に対する理解を深めた後、各自が家族をテーマにしたプレゼンテーションを行った。

結果と課題

<前期>

2名の国籍が同じだったため、自国についての情報を共有する活動は飽きてしまうのではないかと危惧したが、2人ともそれぞれの立場から積極的に話しをしてくれた。プレゼンテーションの発表時には、日本人学生のボランティアビジターを3名クラスに呼んだが、いつもとは違う新鮮な雰囲気が味わえて楽しかった、日本人の若者の生の声が聞けて良かったという意見があり、概ね好評だったと言える。

今後の課題としては、自国の文化・社会がよく分からないため、質問をされても答えられないという場面が何度かあった。事前に宿題として自国のことを調べておくように指示をするなどの工夫が有効だと思う。

<後期>

3名中2名がドイツで、かつ、もう一人もオーストラリアと欧米系のみクラスだったため、情報交換で新たな知識を得ることが少ないのではないかと心配したが、みなそれぞれの立場から積極的に話すことができた。このクラスは日本語のクラスではないため、自由に話せる雰囲気になるよう運営をした。また、日本語を細かく直すようなことはしなかったのだが、日本語を使って活動をしなければならない機会が多く、結果的に彼らの日本語上達の助けにもなったと思われる。

プレゼンテーションの発表時には、2回とも日本人学生のボランティアビジターをクラスに呼んだが、非常に好意的な意見が多かった。今後の課題としては、似たような文化の学生のみで構成されたクラスの時に、いかにして様々な情報を取り入れ、学生が共有するかということが挙げられる。

<演習3>

担当者名：高橋雅子

授業コマ数：週1コマ

受講者数：前期8名、後期11名

使用教材：独自教材

目標

プレイスメントテストでJ4、J5レベルにプレイスされた学生を対象とする。これまでに習った日本語の語彙や文型を用いて、できる限り日本語で授業を進める。参加者が「道具」として日本語を用いることによって、授業を理解し、日本の小説や詩についての理解を深めることを目指す。

授業の方法

<前期>

小説『蜘蛛の糸』、『注文の多いレストラン』、『キッチン』、詩、短歌、俳句・川柳を扱った。小説は場面ごとに担当者を決め、毎回一名がレビューを行った。該当場面の心理描写・情景描写を取り上げ、ディスカッションを行った。また、映画化された『キッチン』のDVDを鑑賞し、小説との違いについて発表を行った。詩は宮沢賢治、高村光太郎、金子みすず、相田みつをなどを取り上げ、各自の解釈を発表し、音読を行った。短歌は「小倉百人一首」、与謝野晶子、俵万智などを取り上げた。俳句は「サラリーマン川柳」のサイトから各自が気に入ったものを一つ選び、毎回一人の発表を行った。また、学生に俳句・川柳を作成する課題を出し、発表した。

<後期>

小説、詩、短歌、俳句・川柳を扱った。また、日本の小説家・詩人を毎回簡単に紹介した。小説は場面ごとに担当者を決め、毎回一名がレビューを行い、その後、意見交換を行った。また、映画化された小説のDVDを鑑賞し、小説との違いについて話し合いを行った。詩や短歌は各自の解釈を発表し、音

読を行った。俳句は「お〜い、お茶」のサイトから各自が気に入ったものを一つ選び、毎回一人の発表を行った。また、学生に俳句・川柳を作成する課題を出し、発表した。

結果と課題

<前期>

日本の小説に興味がある、翻訳された日本の小説を読むのが趣味という学生が集まった。このレベルの学生にとってやや難しい語彙や表現の入っている小説を扱ったが、学生は毎回きちんと内容を読み込んで授業に参加していた。課題の小説のレビューや短歌・俳句の作成、最終発表などは各自が工夫を凝らし、オリジナルあふれる発表を行った。クラス全体でのディスカッションでは積極的な発言は見られなかったが、ペアでの話し合いや教師からの指名による発言では、興味深い意見が多く出てきた。クラス全体のディスカッションで発言しやすい雰囲気を作ることを今後の課題にしたい。

<後期>

日本の文学作品が好きだという学生と、日本文学について全く知らないので学んでみたいという学生とがいた。授業では2・3人での意見交換や話し合いの活動を多めに取り入れ、その後、全体でのディスカッションを行った。その結果、考えたり意見を述べたりする機会が多く設けられたと思う。また、発表の際には各自が工夫を凝らした資料などを用意し、個性的でユニークな発表ができていた。授業ではリライトされていない生教材を扱うこともあり、課題として読んでくることを課したが、ほとんど内容が理解できなかったという学生も見られた。授業で扱う小説の難易度については今後も検討が必要であろう。

2013年度 日本語中級 授業記録

<日本語中級 A>

担当者名：高橋雅子

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：前期 12 名

使用教材：独自教材

目標

J4 から J6 の学生を対象とし、学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活のみならず、大学での学習や研究活動の様々な場面で活用できるレベルに高めることを目指す。

授業の方法

授業は読解素材を軸として展開した。読解教材は、内容に応じて学生の各レベルに合わせたものを用意し、授業の前に各自で読んでくることを課題とした。授業内では課題である読解教材についてグルー

プディスカッションによる内容確認や、全体ディスカッションによる意見発表を行った。また、読解で扱ったテーマに関する作文の課題を2回出し、各課題は提出後のコメントを生かしてリライトして完成させるようにした。毎回の授業にTAが参加し、課題のフィードバックや、ディスカッションメンバーの参加など、積極的に授業活動に関わった。

結果と課題

全体的にまじめでおとなしい学生が多く見られた。全体ディスカッションでは、あまり積極的に発言が出てこなかったため、ペアや小グループでの話し合いに変更し、意見の発表も個人での発表ではなくグループによる発表とした。この形式は学生には好評のようで、意見交換が活発に見られた。

また、先学期もこのクラスを履修した学生が3名いた。テーマは同じであっても使用教材や教室活動を変えて対応した。

読解教材を読んでくること、発表の準備、作文など、毎回、かなりの量の授業外の課題を出した。学生たちもまじめに課題に取り組んでいたが、学期後半には疲れが見えていた。今後は学生の様子を見ながら課題の内容を調節するなどして対応したい。

<日本語中級 B>

担当者名：谷 啓子

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：前期 9 名

使用教材：独自教材

授業の方法

VTR「クローズアップ現代」(NHK 総合)を素材に、「①若者の消費」「②未婚化」「③育メン」の3テーマから現代日本社会を考えた。各テーマの流れは、0週目：VTRに出てくる語彙シートを配布、意味調べは次回までの宿題→1週目：前半語彙シート確認とフォロー→テーマに関わるウォームアップワーク→VTR 視聴と内容確認→2週目：後半語彙シート確認とフォロー→VTR/内容確認→ディスカッションである。

2週目最後に各テーマのまとめの課題を指示した。①と③については作文(「図表の表現」や「対比の表現」等のターゲット表現や文体を指示。字数レベル別)、②については国別のミニ発表とした。最終課題として、扱った3テーマのうち最も興味を持ったものを選び、日本と比較しながら母国の現状について紹介する口頭プレゼンテーションを行った。

結果と課題

今期はアジア系の学生が多く、全体に穏やかな雰囲気であった。20代30代という履修者の年齢と素

材の話題が合って、日本の現状について興味を持って学べたと思う。

テーマ毎のディスカッションは 4 名・5 名の小グループに分かれ、教師とティーチングアシスタント (T.A.) が入る形をとった。素材の VTR に刺激を受けて皆積極的に発言し、他国の事情にもよく耳を傾け、質問をしていた。国籍も宗教も異なる小グループならではの学びになったと思う。ディスカッション中、より適切な表現があった場合は教師や T.A. がボードに書いてフォローした。

課題としては、レベルの異なる学生が同じ素材で学ぶ際の工夫であろう。VTR の確認シートは昨年引き続き、統一のものを使用した (OHC で全体に提示するため)、J6 が多かった昨年に比べ、J4~5 が多い今期メンバーには難しく感じられるものがあった。今後はもう 1 段階やさしいシートを用意して履修者構成によって使い分けるか、内容確認だけは完全にレベル別にし、答えあわせも各自で行う方法をとるか要検討である。

なお、開講初年度に課題とした「最終プレゼンテーションの準備時間の少なさ」については、今期扱うテーマを 4→3 に減らしてスケジュールを修正したことで、発表準備やフォローに余裕ができ、全体的に完成度の高い発表になった。

<日本語中級 C>

担当者名：高橋 雅子

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：後期 16 名

使用教材：独自教材

授業の方法

日本の現代社会について、「若者」、「女性」というテーマを中心に学んだ。各テーマ関連する読解教材を読むこととタスクシートに記入することを課題とし、授業はペアでの意見交換やクラス全体でのディスカッションを中心とした。課題の読解教材は、J4-6 の各レベルに応じたものを準備した。また、「若者」、「女性」のテーマで作文を書くことも課題とした。それぞれのテーマに対し、第 1 作文、フィードバック後のリライトの作文と 2 回同じテーマで書いた。最終課題は後期扱ったテーマをもとにクラス内インタビューを行った。インタビュー結果をまとめ自分の意見を入れた内容で 5 分程度の発表を行った。

結果と課題

履修者数が多かったため、一人一人の発言回数を増やすために、ペアワークや小グループでの活動を多く取り入れた。その際は、教師と大学院生の TA が教室を回り、それぞれのペア・グループの話し合いを聞くようにしていたが、時間や人数の関係上、細やかなフィードバックができなかったことがあった。それをカバーするため、タスクシートや作文等で個人へのフィードバックを丁寧に行った。履修生は国籍も専門も多様であり、発表や質疑応答ではさまざまな角度からの意見の交換ができ、みんな積極的に

発言をしていた。しかし、時間の関係上、学生の質疑応答を途中で切ってしまうなければならないこともあった。履修者数が多い場合の、活動と時間の調整が今後の課題であろう。

<日本語中級 D>

担当者名：谷 啓子

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：後期 13 名

使用教材：独自教材

授業の方法

日本の四季について、年中行事を中心に学んだ。各季節について、キーワードとなることばを調べて発表し、関連する VTR 視聴とディスカッション、まとめの作文作業をすることで、4 技能をバランスよく使うように計画した。メインとなる映像素材として NHK の VTR『しばわんこの和の心』を使用し、他にもレアリアを適宜用意した。

初回オリエンテーションでは、今後の学習において必要な知識のインプット（例：旧暦の説明、日本の大まかな時代区分と地理）を行い、日本の四季と比較して履修者の出身地の季節についてまとめてもらった。

後期スタートのため、季節は「冬」「春」「夏」「秋」の順に進めた。各テーマは 2～4 回から成り、「ことば調べ」の宿題と発表→VTR 視聴→グループディスカッション→小課題の流れである。

- ・ことば調べ：季節や年中行事に関する語彙（例：鳥居）を 1～2 語担当し、ワークシートを OHC で見せながらクラスメイトに説明した。説明の際には画像などの視覚資料を用意して聞いている人のイメージがふくらむよう準備してもらった。
- ・グループディスカッション：数人に 1 人、教師または TA がつく小さな単位で行った。各テーマのディスカッションポイントについて話してもらい、それを録音したものをグループ内で聞き直した。その際、発話者には発話の意図を説明してもらい、教師や TA がより適切な表現をアドバイスしたり、皆で考えたりしたグループに 1 枚、ミニホワイトボードを用意し、必要に応じて使用した。
- ・小課題：各テーマに添った内容で、発表 2 回（冬と夏）、作文 2 本（春と秋）を課した。小課題には回ごとにターゲットとなる表現（例：図表の説明や引用表現など）があり、それを使うよう指示した。

最終課題は後期扱った内容から個々にテーマを見つけ、レジュメを用意し、7-8 分程度のプレゼンテーションを行った。

なお、この授業は評価の 25%は授業外で学生が自主的に行う Web ラーニングでつけられる。それぞれの学生は授業外の時間に、自分のレベルに合った文法・語彙学習を Web で行い、授業の 13 回目にまとめのテストを受けた。

結果と課題

全体として発言も多く、明るい雰囲気クラスであった。日本の四季や年中行事というテーマは、短期留学の学生たちには興味深かったようで課題への取り組みも熱心であった。活発な質疑から異なる出身地、宗教故の学生間の学びが見られたのは、テーマから日本人の自然観や宗教観について、関連することばと一定の知識が共有できたからであろう。

日本の年中行事という内容故に、各回の前半は教師やTA側からのインプットに偏りがちであるが、ことばや行事の特徴を理解した上での後半のディスカッションやミニ発表では積極的な発言が多く、クラスメイトへの質疑も盛んで充実した時間となった。後半のアウトプットの時間を増やす方向で改善していけたらと思う。

運営面では、昨年の倍近い履修者数であったため、進度、課題、授業方法でその都度修正が必要になった。今期は、昨年の反省点として、最終プレゼンテーションの準備時間を多めにとる進度を立てていたが、その分の時間を増えた履修者分のプレゼンテーション時間に当てることとなった。また、録音とフィードバックを伴うグループディスカッションは中級Dの特徴であるが、1グループ4人前後が適正数であるため、ディスカッション時間を前半と後半に分け、3グループ回すことになった。1人あたりの発話量や満足感、という意味では十分ではなかった回もあり、履修者が多い場合の方法については再考が必要であろう。

なお、昨年の反省として、頻出の語彙（例：先祖、供える、祀る等）についてはリストを作成し、オリエンテーション時に配布、必要に応じて個別に調べてもらうようにした。レベル差がある中でお互いの発表を聞くための共通の土台を作れたように思う。

2013年度 Business Japanese I/Business Japanese A 授業記録

コースの概要

Business Japanese I/A は、経営学部間協定の特別外国人留学生対象のクラスである。文法を適宜導入しながら、ビジネス場面での日本語を実践的に学習し、運用力をつける。Business Japanese I は J4, J5 の学生を、Business Japanese A は J6, J7 の学生を対象とするが、2013年度前期は Business Japanese A の対象者がいなかったため、この科目を Business Japanese I の延長として活用する形で開講した。

<Business Japanese I>

担当者名：栗田奈美，金庭久美子，丸山千歌

授業コマ数：週 5 コマ

履修者数：前期 6 名，

使用教材：独自教材

目標

限られたビジネス場面で日本語で適切にコミュニケーションを行うことができるようになること。

授業の方法

日常のビジネス会話、会議、商談、電話の内容をおおむね理解し、適切に対応できるよう導入と練習を行う。また、対人関係に応じた基本的な言語表現の使い分けや、日常的な社内文書やビジネス文書の基本を学び、実践的な練習を行う。

結果と課題

この科目は経営学研究科国際経営学専攻の留学生を主な対象とする将来幹部候補となるビジネスパーソンの育成という特化した目的を持つ科目である。具体的には、仕事にまつわる様々な場面で使用される洗練された表現の運用を目指す練習と、談話レベルでの運用力をつけるためのプロジェクト活動、そしてプロジェクトの発表場面にもなる、立教セカンドステージ大学からの協力を得てのゲストセッションの3本柱で展開した。

履修学生はこの科目の目的と意義を十分に理解し、積極的に授業活動に取り組んだ。ビジネス背景を持つゲストとの模擬実践も効果が高く、日本語力の伸びにつながったように思われる。課題としては、履修学生が時折、授業の本来の目的である「仕事にまつわる様々な場面で使用される洗練された表現の運用を目指す」ことよりもプロジェクト遂行に向け内容に気持ちが向かってしまうことへの対応である。次年度は、ゲストセッションの目的が、ある程度想定された実践的な場面の中で「洗練されたビジネス表現の運用を目指す」ことにあることを繰り返し伝えていきたい。

2013年度 日本語基礎<Academic Japanese >/日本語 授業記録

コースの概要

日本語基礎<Academic Japanese >/日本語は、学部の正規留学生を対象としたコースであり、第二外国語として日本語を選択した留学生のみが受講する科目である。主に大学で必要とされるレポート作成、プレゼンテーションのスキル獲得を目指し、全体でゼロからレポートを作り上げ、最終回にはレポートを基にしたプレゼンテーションを実施する。レポート・プレゼンテーション作成のプロセスの中で必要な項目に触れ、練習・活動を展開することでスキルを獲得していく。

前期の日本語基礎1では、文章表現、構成に関する基礎的な項目を学び、後期の日本語基礎2では、前期の内容を踏まえてさらに高度なスキルを学ぶ。詳細な内容は以下に示す通りである。

日本語基礎 1 <Academic Japanese 基礎>/日本語 1

目標

大学における学習、生活に必要な日本語の基本的スキルの獲得を目指す。具体的には、大学での授業参加に必要なスキル、わかりやすく話すためのスキル、レポート形式、機能別文型などについて学ぶ

授業の方法

前半は大学でのレポート作成をめざし、レポートとは何か、テーマの絞り込み、マッピング、構成の作り方、文献検索の方法、引用のしかた、図表提示の仕方、文章の要約、文章表現やねじれ文、読点の使い方などを扱った。同時にミニスピーチを取り入れ、わかりやすく話すスキルを学んだ。

後半は、出来上がったレポートの添削を学生同士と教師で繰り返し、完成度の高いレポートを作成した。またレポートの内容を基にパワーポイントを使用してプレゼンテーションができるように進めた。授業最終回では、プレゼンテーション、レポート作成に関する活動をふり返り、互いに半期の学びを確認した。

[文学・法学・経営]

担当者名：長谷川孝子／長島明子

授業コマ数：週 2 コマ

受講者数：4 名

使用教材：独自教材

結果と課題

レポートをまったく経験したことのない学生であったため、少しずつ課題を与えて書く手順を確認しながら授業を進めていった。課題に取り組む過程で、重要な点すべてに着目することはまだ難しかったので、いくつかポイントを絞って授業を行った。最終的にはレポート完成までの流れをつかむことができたと思う。レポートでは構成、各段落の中心文、他の段落とのつながりなどが特に難しく、今後も重点的に指導していきたい点である。

プレゼンテーションも経験のない学生がほとんどだったが、毎回の授業の課題をこなすことでプレゼンテーションがどんなものか、少しずつわかっていったようである。PPT を初めて使う学生もいたが、クラスメートのを参考したりしながら工夫をしていた。後期は各自のスキルがさらに向上するよう指導していきたい。

学生間はとても仲がよく、和やかないい雰囲気の中で授業を進めることができた。また、他の学生の課題に対していろいろな点に気づき、意見を出し合うことで、自分のレポートとプレゼンテーションを改善していった。

[社会・経営]

担当者名：清水澤子／小島佳子

授業コマ数：週 2 コマ

受講者数：6 名

使用教材：独自教材

結果と課題

本授業は、同一テーマでレポートとプレゼンテーションを行う授業である。今年度は、学生ごとに担当を決めていた昨年度までと変え、レポート担当は清水、プレゼンテーションは小島が担当した。

今回は、学生間で社会経験や学習経験の差が大きく、授業内容がすでに既知の内容であった学生もいたが、多くの学生が毎回の授業で自分の考えをより分かりやすく表現できる方法を具体的に学んでいったようである。学生は 1 名が中国人、5 名が韓国人ということで、中国人学生が心理的に孤立するような時期もあったが、レポートに関しては、結果的にはコツコツと作業を重ねたこの学生が最も充実したレポートを書き上げた。逆に社交的で、積極的に日本人とも交流し、大学になじんでいたように思えた学生が、論理的に構成を考えることが苦手で、授業に出るごとに論点が変わってしまうということを繰り返した。プレゼンテーションでも、通常授業で口頭表現力が高い学生ほど、過信した不十分な発表となっており、口頭表現に自信がない学生ほど、準備を十二分にした素晴らしい発表となっていた。

今期は、学生ごとの差が大きく、課題の仕上げ方をすぐに呑み込み、こなしていく学生がいる一方で、欠席が多く、順を追って説明を聞くことも練習を積むこともできない学生がいたことは課題となった。そのため、後期は、そのような学生が授業にしっかりついてこられるよう工夫したい。

[観光・映像]

担当者名：山辺真理子 / 川端芳子

授業コマ数：週 2 コマ

受講者数：5 名

使用教材：独自教材

結果と課題

レポート、プレゼンテーションを全く経験したことのない学生もある学生も、毎回の授業の課題をこなしていった結果、どのように課題を仕上げるかを詳しく学んでいった。また、授業に参加していた学生たちはどのようにすれば自分の考えをより分かりやすく説得力を持って表現できるかを理解し、具体的に学んでいったと思う。同じテーマであってもレポートとプレゼンテーションでは伝え方が変わってくることに気づき、工夫と努力が見られた。

今期は 5 名全員が韓国出身で仕事の経験など多様な背景を持つ女子学生 4 名と、高校を飛び級で来た

という若い男子学生1名のクラス構成だった。理系のレポートを母語で書いていた男子学生はアカデミックライティングの基礎はできており、日本語での文章表現や引用、図表の扱い方を中心に学んだ。一方、会話は得意だがレポートは初めてという女子学生たちは、テーマ設定、構成、文献調査にも苦労していた。また、口頭発表の授業においては、スピーチ・プレゼンテーションを通して限られた時間の中で主張を効果的にまとめる方法を学んだ。

学期の半ばごろから、大学生活に馴染めないようで不眠症で起きられないと欠席が目立つ学生が出てきた。国際センターと連絡を取りサポートしたが、その内の1名が最終レポートを提出せず、最終プレゼンテーションを欠席したことは、非常に残念である。

一方、授業に参加していた学生たちの学期末の振り返りでは、この授業で学んだことが別の授業に生かされ役立っていることが語られ、日本語基礎が学生にとって有効に機能していることが確認できた。後期は前期に習得したことを活かし、更なるレベルアップを図っていきたい。

[心理・福祉]

担当者名：山辺真理子 / 川端芳子

授業コマ数：週2コマ

受講者数：5名

使用教材：独自教材

結果と課題

レポート、プレゼンテーションを全く経験したことのない学生もある学生も、毎回の授業の課題をこなしていった結果、どのように課題を仕上げるかを詳しく学んでいった。また、どのようにすれば自分の考えをより分かりやすく説得力を持って表現できるかを理解し、具体的に学んでいったと思う。同じテーマであってもレポートとプレゼンテーションでは伝え方が変わってくることに気づき、工夫と努力が見られた。

コミュニティ福祉学部4名、心理学科1名、韓国人女子学生4名、中国人男子学生1名と互いの異質性を意識した感じでスタートしたクラスだったが、プレゼンテーションやレポートの輪読を通じて学び合い認め合う仲間意識が育っていった。数冊の文献を黙々と読み、基礎知識を蓄えたのち、テーマを絞っていく学生と初めてのレポート作成に戸惑っている学生がいたが、多様なテーマ設定にお互いを楽しんでいたようだ。他の学生が選んだテーマの発表を聞き、意見交換をすることによって、各学生の視野も広がったのではないかと思う。後期は前期に学んだことを活かし、更なるレベルアップを図っていきたい。

日本語基礎 2 <Academic Japanese 基礎>/日本語 2

目標

日本語 1 で学んだ基本的スキルを定着させるとともにその応用を目指す。具体的には、日本語 1 よりさらに実践的なスキルを身に付けるため、プレゼンテーションスキル、資料検索の方法、テーマからレポートのまとめ方について学ぶ。

授業の方法

前半は日本語基礎 1 で扱ったレポート作成の内容をもとに、要約、引用、図表解説などの復習をすると共に、対比と比較、列挙、同意と反対、変化の形容、課題・帰結の提示などを取り上げ、より論理的で正確な表現ができるようにした。また、分かり易く話すためのスキルとして、時事問題に関するミニスピーチ、パワーポイントを使った図表の説明を実施した。

後半は、レポートのアウトライン、序論、本論の一部をその都度発表し合い、構成や論旨の見直しを繰り返すことで、完成度の高いレポートが作成できるようにした。口頭発表の授業においては、レポートの内容を基にパワーポイントを使用してプレゼンテーションを行った。前期より分かり易いプレゼンテーションを目指すために、図解の仕方、発表の構成、口頭能力スキルを学んだ。なお、後期のレポートテーマは自由とした。

[文学・法学・経営]

担当者名：長谷川孝子／沢野美由紀

授業コマ数：週 2 コマ

受講者数：4 名

使用教材：独自教材

結果と課題

プレゼンテーションにおいては、前期で難しいと思われた構成を中心に、各自の力を向上させることを目標とした。全体の主張と各章のつながりを考えながら、聞き手にわかりやすいように説明していくことの大切さに気付いたと思う。各自、全てとは言えないが、学んだことを発表に反映させることができていた。しかし、理解を実践につなげるためのサポートや時間が十分でない学生、日本語表現の指導をより多く必要とする学生もいた。また、自ら練習する姿勢も各学生異なっていた。今後は、限られた時間内での効果的な指導方法や内容をより深く考えていきたい。

レポート作成については、前期の学習内容を理解し、積極的にレポート作成に取り組んだ学生と、論理的な文章とは何か、自分の主張を立証するために何が必要か理解できていない（専門書から自分の考えに近い部分を抜き書きしたものがレポートだと考える）学生がいたため、個別に指導を行う時間を多く取った。後者は、書き終えたものを振り返ってようやくレポートに何が要求されるのか理解できたよ

うである。両者の差は日本語力だけでなく、思考の柔軟性にも関わると思われるが、次回このクラスを担当することがあれば、レポート作成と並行して、短いレポートを読み、構成や考え方が理解できるような課題を複数行っていきたい。

[社会・経営]

担当者名：清水澤子／小島佳子

授業コマ数：週 2 コマ

受講者数：9 名

使用教材：独自教材

結果と課題

本授業は、同一テーマでレポートとプレゼンテーションを学ぶ授業であり、後期は前期と担当者を変え、レポートは小島、プレゼンテーションは清水が担当した。

今年度の学生は、社会経験や学習経験の差が大きく論理的思考力や日本語力に差があったため、後期は個に応じた対応を心がけたが、課題未提出や欠席などが多く、指導が十分に出来なかった。また、クラス内の課題未提出や欠席が増えるにつれ、これまで真面目だった学生にも課題遅れが目立つようになり、レポート完成が1月にずれ込む学生がほとんどだった。

プレゼンテーションは本来レポートがほぼ出来上がった時点で、その内容をどのような方向から取り上げれば自分の研究成果をアピールできるかを考えて準備する必要がある。しかし、今学期はレポート自体が学期末まで出来上がらない学生が多く、レポートとプレゼンテーションの違いを自覚して準備することは難しかった。この点からもレポートを書き始める時期については今年度より早めにする必要があるのではないかと感じた。

今期は、前期の課題を踏まえ個に応じた対応を心がけ、4月よりは確実に力をつけた学生もいた。しかし、全員に対し成果が上げられなかったことは反省すべき点である。今後は学生の特質を早めに見極め、早い段階からレポートに取りかかることも視野に入れ、学生を指導していきたい。

[観光・映像]

担当者名：山辺真理子 / 川端芳子

授業コマ数：週 2 コマ

受講者数：8 名

使用教材：独自教材

結果と課題

前期に学んだレポート作成とプレゼンテーションの方法をふまえ、各自が興味のあるテーマを自由に

選び、再度、課題に取り組んだ。前期で不十分だった点の反省を活かし、全体的には余裕を持って作業を進められたと思う。

レポート作成においては、前期や後期前半で学んだ表現をしっかりとレポートに取り入れ、まとまりのある正確な文章を書けるようになった学生がいる一方で、引用やデータの解説表現など、細かい語彙の使い分けが要求される文型の場合に、自己流の書き方をなかなか改められない学生もいた。また、どの資料をどこで示せば自分の論の展開に効果的かという点について苦勞する学生が多かった。

今後は正確な文型の定着をはかると共に論理的展開のための資料活用の習得に留意していきたい。

口頭表現においても学んだことを一つずつ身に着けながら最終プレゼンテーションにつないでいった学生がいる一方で、理解はしたものの実践に至っていない学生も散見された。年度末のふりかえりでは、他学生のプレゼンテーションから多くの学びを得たことや自分なりの進歩を実感できていること、今後への抱負が語られ、学びの基礎固めができたことが確認された。

例年に比べ寒い日が続く中、体調を崩す学生が見られたが、互いにメールや電話で励まし合って出席していたようで、クラスづくりの重要性を再認識した。

[心理・福祉]

担当者名：山辺真理子 / 川端芳子

授業コマ数：週 2 コマ

受講者数：7 名

使用教材：独自教材

結果と課題

前期で学んだレポート作成とプレゼンテーションの方法をふまえ、各自が興味のあるテーマを自由に選び、再度、課題に取り組んだ。前期で不十分だった点の反省を活かし、全体的には余裕を持って作業を進められたと思う。

レポート作成においては、みな早い段階からテーマを検討し、資料収集やアウトラインの修正に熱心に取り組んでいた。学期の振り返りでは、テーマが自由であると自分なりに焦点を絞っていくのが難しいという意見もあったが、その過程も含め、レポート作成について多くのことを学んだようである。今学期身に付けたことを他の科目に生かしてほしい。

口頭表現においては 2 回のミニスピーチでは聞き手を意識しての小さな話題の選択、レポートと並行して進める最終プレゼンテーションの準備では論理構成の構築に、前期とははるかに違うレベルで取り組んでいた。口頭表現力の伸びもさることながら、要点を整理して示す PPT スライドが工夫されていた。

再履修の学生 2 名が、今期も途中で履修を放棄してしまったことは非常に残念である。

2. 2013 年度 Placement Test 実施報告

【前 期】

前期 プレイACEMENTテスト実施日

- | | |
|---------------|-------------------|
| 1. 新規(筆記テスト): | 2013 年 4 月 3 日(水) |
| 2. 新規(面接): | 2013 年 4 月 4 日(木) |
| 3. 継続(筆記テスト): | 2013 年 4 月 2 日(火) |
| 4. 特別措置: | 2013 年 4 月 9 日(火) |

2013年度前期		新規		継続	
		特外	正規 院生	特外	正規 院生
プレイACEMENTテスト受験辞退		0		2	
プレイACEMENTテスト①		8	1	2	0
プレイACEMENTテスト②	受 験	39	15	46	1
	受験不要*			1	6
受験者合計		63		49	
日本語科目履修者		39	10	45	4

- * 受験不要:
- ・すでに全カテゴリーでJ8レベルに達しているため
 - ・前学期に日本語科目を履修したJ4以上の正規大学院生は受験を免除

前期プレイACEMENTテスト結果 * 網掛 2 クラス体制

J0	6
J1	8
J1S	3
J2	5
J2S	6
J3	2
J3S	5

	文法・文型	読解	作文	聴解・会話
J4	11	8	9	8
J5	20	15	31	21
J6	20	17	16	17
J7	12	17	16	19
J8	15(うち条件付き 8 名)			

<前期総評>

ここ数年、定員オーバーによる臨時増コマでの対応が続いたことから、2013 年度からは前期 4 コマ、後期 5 コマの増コマが認められ、時間割編成が組みやすくなった。前期は、特に中級（J 5 作文、J 5 聴解・会話、J 6 聴解・会話、J 7 聴解・会話）で大幅に定員を超過したため、2 セクション体制で授業を展開した。前年度に計画された時間割で定員オーバーが予想される科目を 2 セクション体制とし、担当者の一人に教育講師を配置しておいたことで、プレイスメントテストの結果、時間割の組み直しが生じた場合でも、柔軟に対応できた。

【後 期】

後期 プレイスメントテスト実施日

- | | |
|---------------|--------------------|
| 1. 新規(筆記テスト): | 2013 年 9 月 10 日(火) |
| 2. 新規(面接): | 2013 年 9 月 11 日(水) |
| 3. 継続(筆記テスト): | 2013 年 9 月 12 日(木) |
| 4. 特別措置: | 2013 年 9 月 20 日(火) |

2013 年度後期		新規		継続	
		特外	正規院生	特外	正規院生
プレイスメントテスト受験辞退		7		3	
プレイスメントテスト①		25	0	0	1
プレイスメントテスト②	受 験	81	2	28	4
	受験不要*			0	16
受験者合計		108		33	
日本語科目履修者		104	2	24	10

- * 受験不要:
- ・すでに全カテゴリーでJ8レベルに達しているため
 - ・前学期に日本語科目を履修したJ4以上の正規大学院生は受験を免除

後期プレイスメントテスト結果 * 網掛 2 クラス体制

J0	15			
J1	13			
J1S	8			
J2	8			
J2S	7			
J3	8			
J3S	4			
	文法・文型	読解	作文	聴解・会話
J4	15	15	13	9
J5	33	17	37	28
J6	23	21	29	32
J7	17	25	12	14
J8	9(うち条件付き 6名)			

<後期総評>

プレイスメントテストの結果、J5 文法・文型、J5 作文、J6 作文、J5 聴解・会話、J6 聴解・聴解会話の5科目で定員オーバーとなったが、後期についても前年度に計画された時間割で定員オーバーが予想される科目を2セクション体制とし、担当者の一人に教育講師を配置しておいたことで、プレイスメントテストの結果、時間割の組み直しが生じた場合でも、柔軟に対応できた。

プレイスメントテストの結果を受けての、実際の日本語科目履修者の内訳は以下の通りである。

2013 年度前期

	国籍	人数
特別外国人学生	アメリカ	11
	イギリス	4
	インドネシア	1
	オーストラリア	7
	オランダ	3
	カナダ	3
	韓国	6
	シンガポール	3
	スウェーデン	3

2013 年度後期

	国籍	人数
特別外国人学生	アメリカ	13
	イギリス	5
	インドネシア	3
	オーストラリア	5
	オランダ	2
	韓国	5
	シンガポール	1
	スウェーデン	1
	タイ	3

	タイ	5
	中国	20
	中国(台湾)	7
	中国(香港)	2
	ドイツ	7
	ノルウェー	2
	フィリピン	3
	フィンランド	3
	フランス	8
	ベルギー	3
	ポーランド	1
特別外国人学生 合計		102
正規留学生 (大学院)	中国	9
	中国(台湾)	1
	韓国	4
	タイ	2
	オーストラリア	1
	スウェーデン	1
	バングラデシュ	1
正規留学生(大学院) 合計		19

2013 年度前期 日本語履修者合計	121
--------------------	-----

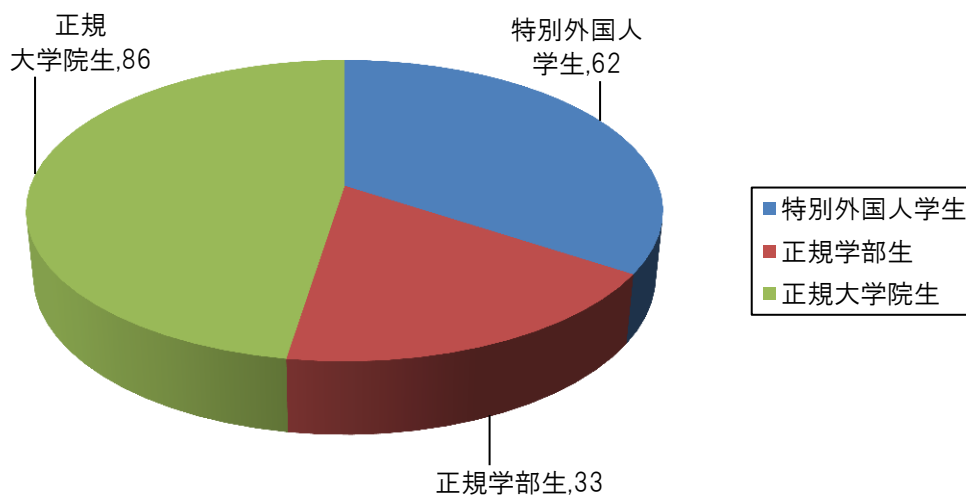
	中国	19
	中国(台湾)	7
	中国(香港)	2
	デンマーク	5
	ドイツ	7
	日本	2
	ネパール	1
	ノルウェー	1
	フィリピン	2
	フィンランド	1
	フランス	11
	ベルギー	3
	ポーランド	1
	モンゴル	1
特別外国人学生 合計		101
正規留学生 (大学院)	中国	5
	台湾	1
	韓国	2
	オーストラリア	1
	スウェーデン	1
	バングラデシュ	1
正規留学生(大学院) 合計		11

2013 年度後期 日本語履修者合計	112
--------------------	-----

3. 2013 年度 日本語相談室実施報告

2013 年度 日本語相談室利用状況(2013 年 4 月 11 日～2 月 4 日)

【相談者所属別利用件数】



日本語相談室の利用状況は、相談者の所属別でみると、昨年度と同様に正規大学院留学生の利用がもっとも多い。正規大学院生は、通常日本語科目を履修しないが、ゼミ発表、修士論文など日本語による発信活動が、研究活動の重要な部分を占めており、このニーズの高さが相談件数につながっていると考えられる。

また、前期は、日本語教育センターで留学生のための日本語スピーチコンテストが開催されたこともあり、特外生の相談件数が多かった。スピーチコンテストなどのセンター企画をきっかけとして、授業外の日本語学習サポートを周知し、また利用を広げていくことにつながっていることが確認できた。

正規学部留学生の相談件数は、3つの所属の中でもっとも少ない。今年度は、ホームページでの周知に加え、ニュースレターによる広報を展開した。

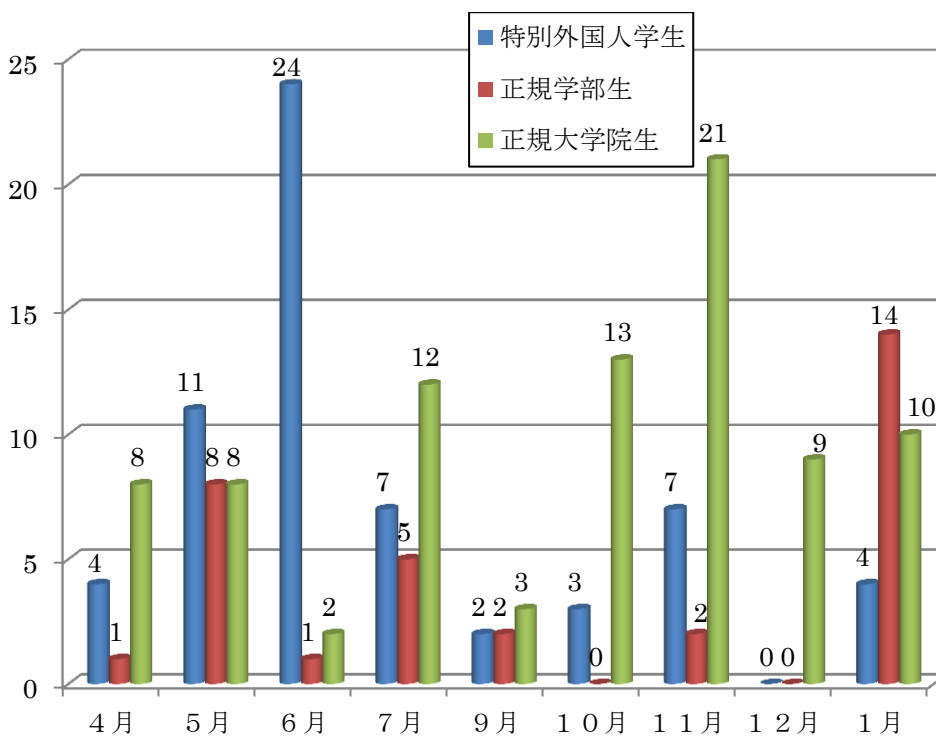
相談件数の合計で見ると、昨年度は年間の相談件数の総数 153 件であったが、これを 100 とみなすと、今年度は 181 件で、117.6%となり、相談件数が着実に伸びたことが確認できた。

【月別推移】

	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	合計
特別外国人学生	4	11	24	7	2	3	7	0	4	62
正規学部生	1	8	1	5	2	0	2	0	14	33
正規大学院生	8	8	2	12	3	13	21	9	10	86
月別合計	13	27	27	24	7	16	30	9	28	181

また、月別で相談件数の推移をみると、大学院生の利用が多い月が昨年度は12月と1月に多かったのが、今年度は10月11月が多い。利用学生が日本語相談室を駆け込み寺的な活用するのではなく、論文完成に向けて計画的に利用するようになってきたことがうかがえる。

特別外国人学生の利用は、昨年度と同様に前期のスピーチコンテスト前に集中している。



【学部・研究科別 相談キャンパス別／利用者実数・利用件数】

学部・研究科別の利用状況を見ると、学部生は文学部、社会学部は昨年同様の傾向に多く、今年度はこれに加え、法学部の利用が増えた。大学院生は文学研究科、社会学研究科、異文化コミュニケーション研究科の利用が多い。実質利用人数と合計利用回数を併せてみるとリピーターがどの程度いるかが把握できる。

【所属別利用件数】

		実質 利用 人数	合計 利用 回数	相談キャンパス	
				池袋	新座
特別外国人学生		28	62	62	
正規 学部生	文学部	2	9	9	
	社会学部	2	8	8	
	法学部	4	10	10	
	経営学部	2	4	4	
	現代心理学部	1	1	0	1
	コミュニティ福祉学部	1	1	0	1
正規 大学院生	キリスト教学研究科	1	34	34	
	文学研究科	3	31	31	
	法学研究科	1	1	1	
	経営学研究科	1	1	1	
	ビジネスデザイン研究科	1	1	1	
	21世紀社会デザイン研究科	2	4	4	
	異文化コミュニケーション研究科	5	10	10	
	観光学研究科	2	4	4	
特別外国人学生	計	28	62	62	
正規学部生	計	12	33	31	2
正規大学院生	計	16	86	86	
合 計		56	181	179	2

* 新座キャンパスでの利用2件のうち、1件はテレプレゼンス、1件は対面で利用。

* 論文やレポートの添削で予約が混み合う時期があり(11~1月)、池袋キャンパスで予約ができない状況が生じたため、本来新座キャンパスの学生のために空けてあるテレプレゼンスの時間帯を池袋キャンパスで使用

池袋、新座の各キャンパスに所属する学生の利用状況を見ると、新座キャンパスの利用が昨年以上に減少した。開室時間帯が少ないことが原因となっているのか、今後調べていく必要がある

【曜日・時限別 利用件数および相談内容の内訳】

日本語相談室の曜日、時間別利用件数を見ると、前後期ともに新座キャンパスでの利用件数が少ない。

相談内容としては、卒業論文、修士論文、博士論文と、レポート、授業内での発表に関する相談が最も多く、その次が奨学金申請書類の添削やスピーチコンテスト添削指導となっている。本学の学生生活の中でもアカデミックな活動に対する支援が大きな割合を占めており、日本語相談室の設置目的にかなった形で利用されていることが確認できた。

【曜日・時限別 利用件数】

2013 年度前期 (池袋キャンパス)

	月	火	水	金
2 限	5	* 6	12	19
3 限	7		10	10
4 限	9		13	

(新座キャンパス)

月	火	水
0	0	0
	0	

* 新座キャンパスの「日本の文化・社会C」(火曜日2限)が履修者0だったため、5月～日本語相談室に転換。テレプレゼンス(新座側：講師，池袋側：学生)

2013 年度後期 (池袋キャンパス)

	月	火	木	金
2 限	6	* 6		10
3 限	1		12	** 12
4 限	8		18	10

(新座キャンパス)

月	火	水
***2	0	*** 4
	1	

* 新座キャンパスの「J8 ビジネス日本語文書」(火曜日2限)が履修者0だったため、日本語相談室に転換。テレプレゼンス(新座側：講師，池袋側：学生)

** 新座キャンパスの学生1名が、スケジュール上他の曜日に来られず(火曜日が祝日の週だった)、特別に金曜3時限目にテレプレゼンスを利用した

*** 6名全員池袋キャンパス所属の学生で、テレプレゼンスではなく、池袋キャンパスでの対面で利用

【相談内容別内訳】

相談内容	件 数		
	前 期	後 期	計
卒業・修士・博士論文	12	30	42
レポート添削(授業、ゼミ等)	21	16	37
スピーチコンテスト添削指導	24	0	24
奨学金・研究費申請書類添削	6	17	23
発表指導(授業、ゼミ等)	20	18	38
就職活動のエントリーシート添削	4	2	6
学習方法指導	0	1	1
メール添削	0	3	3
日本語能力試験対策指導	1	0	1
その他	3	3	6
(キャンセル)	3	3	6
合計(除くキャンセル)	91	90	181

日本語相談室担当者コメント

<池 袋>

今年の相談室は、特外生の利用も多かったが、学部生や大学院生のリピーターが目立ち、中には、年間に34回利用した学生もいた。

主な相談内容は、前期はスピーチコンテストの原稿やレポートの添削、発表指導が多く、後期はレポート添削や発表指導のほか、修士論文や奨学金申請書の添削が多かった。今年度は、原稿が長い場合に事前に提出してもらえるケースが増え、予め添削をしておくことができた。今後も、相談時間を有効に使えるように、事前提出のルールを徹底していくことが大切だと思われる。

<新 座>

今年度の新座の対面相談は、年間を通してわずか1回であった。利用者数をいかに増やしていくかが大きな課題である。

<テレプレゼンス>

今年度は、池袋の学生がテレプレゼンスを利用して新座の教師に相談を行うというケースが12回あった。一方、新座の学生のテレプレゼンス利用は、わずか1回であり、予約が入っていない時間に、池袋で対面式の相談を行うことが4回あった。テレプレゼンスの利用を宣伝することも必要だと思われるが、相談室のニーズの高い池袋キャンパスの学生が、テレプレゼンスの予約のない時間をもっと利用しやすくすることも必要だと思われる。

【2011年度—2013年度 利用件数推移】

	2011年度	2012年度	2013年度
特別外国人学生	26	45	62
正規学部生	29	18	33
正規大学院生	89	90	86
合計	144	153	181
増減	100	106.3	125.7

日本語教育センターが設置された2011年度からの利用件数の推移を見る。2011年度の相談件数を100とした場合、2012年度は106.3、2013年度は125.7と、着実に利用件数を伸ばしていることがわかる。現在日本語相談室はマキムホール9階にあり、予約は事務局での直接の事前受付に限定されているため、決して学生を利用しやすい条件にない。今年度はニュースレターによる広報を展開したが、今後はウェブ予約システムを導入し、学生が手軽に予約できる環境を整えるとともに、長期的には、学生の誘導効果を狙って日本語相談室を低層階に再配置することを目指したい。授業外の日本語教育支援が成果を上げることは、大学の国際化戦略にかなうことであるという点も念頭に置いておきたい。

4. 2013 年度 立教漢字検定実施報告

2013 年度	試験日	申込 締切日	申 込		受 験		合 格	
第1回	5月15日 (水)	4月17日 (水)	特別外国人学生	9名	特別外国人学生	7名	特別外国人学生	5名
			上級	6	上級	4	上級	4
			中級	2	中級	2	中級	0
			初級	1	初級	1	初級	1
			正規学部留学生	2名	正規学部留学生	1名	正規学部留学生	1名
			上級	2	上級	1	上級	1
			正規大学院留学生	0名	正規大学院留学生	0名	正規大学院留学生	0名
			その他	0名	その他	0名	その他	0名
第1回申込合計	11名	第1回受験合計	8名	第1回合格合計	6名			
第2回	7月3日 (水)	6月5日 (水)	特別外国人学生	28名	特別外国人学生	22名	特別外国人学生	11名
			上級	10	上級	6	上級	5
			中級	15	中級	13	中級	5
			初級	3	初級	3	初級	1
			正規学部留学生	1名	正規学部留学生	1名	正規学部留学生	1名
			上級	1	上級	1	上級	1
			正規大学院留学生	1名	正規大学院留学生	1名	正規大学院留学生	0名
			中級	1	中級	1	中級	0
その他	0名	その他	0名	その他	0名			
第2回申込合計	30名	第2回受験合計	24名	第2回合格合計	12名			
第3回	11月6日 (水)	10月9日 (水)	特別外国人学生	22名	特別外国人学生	12名	特別外国人学生	5名
			上級	5	上級	2	上級	0
			中級	11	中級	6	中級	2
			初級	6	初級	4	初級	3
			正規学部留学生	2名	正規学部留学生	0名	正規学部留学生	0名
			上級	2	上級	0	上級	0
中級		中級		中級				
初級		初級		初級				

			正規大学院留学生	0名	正規大学院留学生	0名	正規大学院留学生	0名
			その他	0名	その他	0名	その他	0名
			第3回申込合計	24名	第3回受験合計	12名	第3回合格合計	5名
第4回	1月8日 (水)	12月4日 (水)	特別外国人学生	25名	特別外国人学生	12名	特別外国人学生	8名
			上級	8	上級	5	上級	3
			中級	10	中級	4	中級	2
			初級	7	初級	3	初級	3
			正規学部留学生	0名	正規学部留学生	0名	正規学部留学生	0名
			上級		上級		上級	
			中級		中級		中級	
			初級		初級		初級	
			正規大学院留学生	0名	正規大学院留学生	0名	正規大学院留学生	0名
その他	0名	その他	0名	その他	0名			
			第4回申込合計	25名	第4回受験合計	12名	第4回合格合計	8名

2013年度も、計画通り4回実施した。申込者数は合計100名で昨年度より9名ほど増えた。漢字検定試験に申し込んで、希望すれば、本学独自の自主学習教材が受け取れるということが一つの魅力となっていることが考えられる。申込者数の内訳は、ほとんどが特外学生であるという傾向は変わらない。

申込者数が増える一方で、後半になるにつれて、当日の欠席者数が増え、実際の受験者数が少ない傾向は昨年度と同じであった。

そこで来年度以降は、第3回、第4回の実施時期を早めに組んでみたい。本学の漢字学習支援の一つとして、ひきつづきホームページやニュースレターを通して漢字検定を広く周知することにつとめるとともに、申込者をいかに受験までつなげていくかについても工夫していきたい。

5. 2013 年度 日本語自主学習用図書貸し出し実施報告

日本語教育センターでは、1回2冊、2週間までの図書の貸し出しを行っている。以下は、今年度の貸し出し記録である。

教材貸し出しの利用者数は、昨年度と比べ大きく減った。日本語教育センターの自主学習図書貸し出しサービスについての定期的な広報を展開する必要を感じた。

貸し出し教材の内容は、例年通り、特別外国人学生は日本語能力試験対策が多いが、漢字や文型学習のための教材の貸し出しもあった。正規留学生についても、日本語能力試験対策教材の貸し出しがあった。また、日本語ライティングのための教材や、日本語の使い分け辞典などの利用がある。

今後も日本語能力試験対策教材を充実させつつ、漢字、文型、日本語表現の使い分けなどの自主学習教材を充実させていきたい。

利用者数が増えている点を肯定的に評価したいが、その一方で、本学の留学生数全体で見ると貸出件数がそれほど多くないとも言える。来年度以降も、ホームページやニュースレター、また教員からの紹介など機会をとらえて、本サービスについての広報を積極的に行い、利用を促す努力をしたい。

【所属別記録】

	利用者数	貸出冊数
特別外国人学生	10	30
正規留学生	2	8
(新座)正規留学生	1	2

【貸し出し図書一覧】

	貸出書名	貸出回数
特別外国人学生	日本語能力試験対策 N1 日本語総まとめ 文法	5
	日本語能力試験対策 N1 日本語総まとめ 語彙	3
	日本語能力試験対策 N1 日本語総まとめ 漢字	3
	新試験対応 合格できる日本語能力試験 N1 CD2 枚付き	1
	新試験対応 日本語能力試験<N1>予想問題集 CD 付き	1
	日本語能力試験文法問題対策 完全マスター 1級	1
	日本語能力試験対策 N2 日本語総まとめ 文法	2
	日本語能力試験対策 N2 日本語総まとめ 語彙	2
	日本語能力試験対策 N2 日本語総まとめ 漢字	1

	カタカナ語彙完全マスター 日本語能力試験 1・2 級レベル	1
	日本語能力試験1・2級レベル 語彙 完全マスター	1
	日本語能力試験対策 N3 日本語総まとめ 文法	1
	みんなの日本語 初級 翻訳・文法解説英語版 English[1]	2
	みんなの日本語 初級 翻訳・文法解説英語版 English[1]	2
	大学で学ぶための日本語ライティング 単文からレポート作成まで	1
	4コママンガでおぼえる日本語ひとつ	1
	4コママンガでおぼえる日本語いろいろ	1
	絵でわかるぎおんごぎたいご	1
正規留学生	日本語能力試験対策 N1 日本語総まとめ 語彙	3
	日本語能力試験対策 N1 日本語総まとめ 漢字	2
	日本語能力試験1・2級レベル 語彙 完全マスター	2
	日本語能力試験対策 N2 日本語総まとめ 文法	1
(新座貸出分)	新完全マスター聴解 日本語能力試験 N1	1
	新完全マスター読解 日本語能力試験 N1	1

6. 留学生による日本語スピーチコンテスト実施報告

2013年6月29日に『立教大学留学生による日本語スピーチコンテストー東京セントポールライオンズクラブ杯ー』を開催し、当日は19名の留学生が登壇した。今年度は新たに「レディスクラブ賞」が設置されての開催となった。

実施の詳細は、日本語教育センターホームページ

<https://cjle.rikkyo.ac.jp/speech/>

を参照されたい。

スピーチコンテストの成果物として、『第2回 立教大学留学生による日本語スピーチコンテストー東京セントポールライオンズクラブ杯ースピーチ文集』を刊行したほか、大学の広報媒体でも広く成果を報告した。

7. 日本語教育センターシンポジウム実施報告

2013年12月21日に、日本語教育センター主催で「日本語教育センターシンポジウム2013」を開催した。センターでは初めての国際シンポジウムでテーマを「海外の大学が日本の日本語教育機関に期待すること」とし、講師に日暮 嘉子氏(サンディエゴ州立大学教授、日本国際交流プログラムディレクター、アメリカ州立大学連合『日本研究セミナー』ディレクター)、大島 弘子氏(パリ・ディドロ(パリ第七)大学准教授)、徐 敏民氏(華東師範大学教授、日本語教育研究センター主任)、レベッカ スーター氏(シドニー大学助教授)、小澤 伊久美氏(国際基督教大学講師)、池田 伸子(前日本語教育センター長、異文化コミュニケーション学部長)を迎えた。

実施の詳細は日本語教育センターホームページ

<https://cjle.rikkyo.ac.jp/symposium/>

で報告した通りで、当日は約70名の参加があった、

当日の成果は冊子体『シリーズ 新しい日本語教育を考える2』として刊行した。

8. 日本語教育センターニュースレター発行報告

今年度より「日本語教育センターニュースレター」の発行を開始した。本学の留学生を主な対象とし、本学の日本語教育支援について広く周知することと、様々なアプローチで日本語学習支援を行うことを目的としている。詳細は日本語教育センターホームページ

<https://cjle.rikkyo.ac.jp/newsletter/>

を参照されたい。

9. センター員活動報告

池田伸子

研究論文

1. 「効果的な「海外留学研修」プログラムの開発に関する一考察」『ことば・文化・コミュニケーション』第6号、立教大学異文化コミュニケーション学部、2014年、17-30頁
2. 「日本の高等教育機関における日本語教育センターの役割と可能性」『日本総合学術学会誌』13号、2014年、印刷中
3. 「日本語教師はディスレクシアをどう認識しているのか—これからの日本語教員養成プログラム開発のための基礎研究」『日本語教育実践研究』創刊号、立教日本語教育実践学会、2014年（掲載予定）

報告

「MBA課程におけるビジネス日本語教育の可能性—立教モデルの試行—」『日本語教育実践研究創刊号』、立教大学日本語教育実践学会、2014年（金庭久美子・栗田奈美・丸山千歌との共同執筆）（掲載予定）

研究発表

1. 「日本語教育におけるディスレクシアへの対応—日本語教師養成課程用手引書作成に向けて—」（西澤芳織・石田敏子との共同ポスター発表）『BATJ 2013』、於ノッティンガム大学、2013年8月30日
2. 「MBA取得コースにおけるビジネス日本語教育の可能性—立教モデルの試案—」（栗田奈美・金庭久美子・池田伸子との共同によるポスター発表）『2013年度日本語教育学会秋季大会 予稿集』、於関西外国語大学、2013年10月13日、391-392頁.

研究助成

1. 2013.4～現在 科学研究費助成金（挑戦的萌芽）「ディスレクシア学習者に対する教授法開発—教員養成における指針の策定と手引書の試作」（研究代表者）（課題番号：24652105）
2. 2013.4～現在 科学研究費助成金（基盤研究（C））「大学国際化に対する日本語教育プログラムの貢献の評価—参加型評価によるモデル立案—」（研究分担者）（課題番号：25390599）

丸山千歌

著書

『中級日本語教科書 わたしの見つけた日本』東京大学出版会、2014年（近藤安月子、有吉英心子との共著）

『中級日本語教科書 わたしの見つけた日本 教師用指導書 (ウェブ版)』東京大学出版会、2014年 (近藤安月子、有吉英心子との共著)

『新界標日本語 1』復旦大学出版会、2014年 (徐敏民との共同編集)

報告

「MBA課程におけるビジネス日本語教育の可能性—立教モデルの試行—」『日本語教育実践研究創刊号』、立教大学日本語教育実践学会、2014年 (金庭久美子・栗田奈美・池田伸子との共同執筆)、2014年 (掲載予定)

研究発表

1. 「読解教材を刺激とした留学生の発想—日本人との接触や日本体験はどのような影響を与えているか—」(小澤伊久美との共同ポスター発表)『CAJLE Annual Conference 2013』、於トロント大学、2013年8月24日、49頁
2. 「MBA取得コースにおけるビジネス日本語教育の可能性—立教モデルの試案—」(栗田奈美・金庭久美子・池田伸子との共同によるポスター発表)『2013年度日本語教育学会秋季大会 予稿集』、於関西外国語大学、2013年10月13日、391-392頁.

講演

「Can-do statement を活用したカリキュラムに向けて—「話す」を中心に—」華東師範大学日本語カリキュラム改革研修会、於華東師範大学、2013年7月13日.

研究助成

1. 2011.4~2014.3 科学研究費助成金 (基盤研究 (C)) 「留学経験から発想する日本語授業の新たな意義—PAC分析を活用した縦断的研究—」(研究代表者) (課題番号: 23520617)
2. 2013.4~現在 科学研究費助成金 (基盤研究 (C)) 「大学国際化に対する日本語教育プログラムの貢献の評価—参加型評価によるモデル立案—」(研究分担者) (課題番号: 25390599)

小松満帆

研究論文

1. 「役割語の日本語教育への導入の試み—アニメ『風の谷のナウシカ』を用いて—」『立教大学ランゲージセンター紀要第31号』、2014年
2. 「役割語と「属性表現」の検証—アニメ『魔法少女まどか☆マギカ』を用いて—」『日本語教育実践研究創刊号』、立教大学日本語教育実践学会、2014年 (掲載予定)

研究発表

1. 「日本語母語話者の異性語使用に関する意識調査—異性語使用・若者言葉の日本語教育への導入を考

える一」、第 22 回小出記念日本語教育研究会、2013 年（ポスター発表）

高橋雅子

研究論文

1. 「中級日本語学習者が覚えたいと思った語彙の傾向—難易度、親密度、頻度の観点から—」『立教大学ランゲージセンター紀要』第 30 号、立教大学ランゲージセンター、2013 年、117-126 頁
2. 「留学生の日本語学習動機の研究に関する現状と課題—日本語教育における文献調査より—」（平山紫帆との共同執筆）『立教大学ランゲージセンター紀要』第31号、立教大学ランゲージセンター、2014 年、95-102頁
3. 「『生活日本語』の教科書分析—学習メカニズムの観点から—」（平山紫帆との共同執筆）『日本語教育実践研究』立教日本語教育実践学会（掲載予定）

研究発表

1. 「教師間協働研究に関する現状と課題—日本語教育における文献調査より—」（門脇薫・中山英治との共同発表）第 22 回小出記念日本語教育研究会、於国際基督教大学、2013 年 6 月 8 日
2. 「学習者にとって覚えたい語彙とは—中級読解クラスの学習者の作成した語彙リストと短文、およびインタビューから—」2013 年度日本語教育学会研究集会 第 4 回北海道地区、於北海道大学、2013 年 7 月 6 日

研究助成

1. 2012.4～現在 科学研究費助成金（基盤研究（C））「海外における日本語非母語話者教師と母語話者教師の協働に関する基礎研究」（研究分担者）（課題番号：24520593）

高村めぐみ

研究論文

1. 「日本語のスピーチにおけるポーズの規範 試案」『比較文化研究』第 107 号、日本比較文化学会、2013 年、63-73 頁
2. 「「ところに、ところで、ところを」に関する一考察」『立教大学ランゲージセンター紀要』第 30 号、立教大学ランゲージセンター、2013 年、127-134 頁
3. 「韓国人学習者の特殊拍の特徴についての一考察—促音・長音の時間長と音圧を視点に一」『立教大学ランゲージセンター紀要』第31号、立教大学ランゲージセンター、2014年、73-81頁
4. 「母語話者規範からの逸脱に対する留意、評価と調整行動—日本語学習者の音声的特徴を視点に一」『立教日本語教育実践学会』創刊号、立教大学日本語教育実践学会、2014年（掲載予定）

研究発表

1. 「プレゼンテーションにおけるポーズ指導の効果について」第22回小出記念日本語教育研究会、於国際基督教大学、2013年6月8日
2. 「日本語の独話におけるポーズの出現位置と構文構造の関係ーポーズの規範(試案)作成の試みー」2013年度日本語教育学会研究集会、於愛媛大学、2013年11月30日

平山紫帆

報告

1. 「留学生の日本語学習動機の研究に関する現状と課題:ー日本語教育における文献調査よりー」(高橋雅子との共同執筆)『立教大学ランゲージセンター紀要』31、pp.95-102、立教大学ランゲージセンター、2014年
2. 「『生活日本語』の教科書分析ー学習メカニズムの観点からー」(高橋雅子との共同執筆)『日本語教育実践研究』立教日本語教育実践学会 (掲載予定)

10. 2013 年度 FD 記録

(1) 担当者連絡会など

① 2013 年度 FD 委員会 (2013 年 7 月 19 日、9 月 9 日、2014 年 3 月 5 日、計 3 回)

昨年度定めた、日本語教育センターの FD 委員会規定にのっとり、計画的に開催した。

詳細は以下の通りである。

- a. 2013 年 7 月 19 日 (金) 17:40- 18:30 [場所] 12 号館第 1 会議室 [参加者数] 8 名 [議題] 立教 GP に関わる活動、「中級日本語」学習者アンケート (2013 年度前期) 結果報告、「中級日本語」アンケート改訂
- b. 2013 年 9 月 9 日 9:00-16:00 [参加者数] 20 名 [議題] 日本語教育科目運営について、各科目の振り返りおよび引き継ぎ、日本語教育センターシンポジウムほか
- c. 2014 年 3 月 5 日 9:00-16:00 [参加者数] 27 名 [議題] 日本語教育科目運営、各科目の振り返りおよび引き継ぎ、日本語教育センターシンポジウムほか

② 実務委員会打合せ (4 月 8 日、5 月 6 日、6 月 17 日、7 月 15 日、9 月 23 日、10 月 28 日、12 月 2 日、1 月 27 日、2 月 17 日、計 9 回)

センター長、センター員と事務局を構成メンバーとして、1 か月に 1 回ペースで開催し、日本語教育プログラム運営上の実務的な議題について話し合った。

③ コーディネーター会議 (2014 年 2 月 24 日、2 月 28 日、3 月 6 日、計 3 回) [参加者数] 8 名 [議題] 日本語教育科目運営、コーディネーター業務と課題、プレイスメントテストの実施体制および手順と課題

(2) 日本語相談室アンケート (日本語相談室利用者対象)

日本語教育センターで展開している日本語相談室は、本学で学ぶ留学生の日本語学習支援を目的として、教育講師がそれぞれ 3 コマずつ担当している。開設以来、留学生にとって利用しやすい体制を模索するために日本語相談室初回利用者を対象にアンケート調査を行っており、2013 年度は 17 名から回答を得た。以下にアンケート項目ごとに結果を記す。

項目 1. 日本語相談室は留学生にとって必要だ。

必要 17 名、必要でない 0 名

項目 2. 相談時間 (45 分) は適切でしたか。

適切 16 名、適切ではない 1 名 ⇒どのぐらいが適切か 「1 時間ぐらい」1 名

項目 3. 日本語相談室で相談したことは役に立ちましたか。

役に立った 17 名

日本語のチェックがしてもらえた 16 名

日本語の知識が増えた 4 名

疑問が解決された 12 名

普段から持っていた問題らしくない疑問を解決できた 1 名

役に立たなかった 0 名

項目 4. 開室している曜日や時間帯は適切ですか。

適切 16名

適切ではない 1名

木曜日も開室してほしい 1名

項目 5. テレプレゼンスを知っていますか。

知っている 5名

⇒テレプレゼンスを使って相談したことがありますか。はい 0名

いいえ 5名「興味はある」「今までチャンスがなかった」「今回が日本語相談室利用の初回なので今度利用してみたい」各1名、理由について無回答2名

知らない 12名

⇒使ってみたいと思いますか。 はい 5名

いいえ 3名 「池袋の学生なので」1名、「対面がいい」2名

理由について無回答5名

項目 6. 日本語相談室に対しての要望、意見

- ・開室の時間や時間をのばしてほしい。
- ・とても快適な場所で指導していただけてありがたいです。
- ・非常に助かりました。今後ともよろしく願いいたします。
- ・オンラインで予約できたらもっと利用できるかなと思います。
- ・相談に行く前にどんな準備が必要かを教えていただければ大変助かると思います。たとえば見ていただきたい文章を直接パソコンで見るよりプリントアウトしたほうがいいです。このようなルールを知らずにいったら、先生に失礼なことになります。

回答数が17と多くないため、昨年度にひきつづき、データの蓄積が必要ではあるが、日本語相談室へのニーズ、および日本語相談室の有効性については全員が肯定的な回答をしている。一方で、相談時間や開室曜日・時間帯については、現行の45分体制よりも長く相談時間をとってほしい、もう少し予約の選択肢がほしい、オンライン予約システムがあったほうが利用しやすいという声もあることがわかる。テレプレゼンスについては、昨年度同様に認知度が大変低い。引き続き周知していきたい。

(3) 複合レベル型日本語科目の開講についてのアンケート（J8履修者対象）

2013年度前期に新座キャンパスで開講した「日本の文化・社会C」は観光学部のアジア人財プロジェクトの後継科目として位置づけられる。この科目特性を十分に生かした展開をめざし、2013年6月にJ8科目の履修者を対象として、複合レベル型日本語科目の開講についてのアンケートを実施した。

調査時期：2013年6月

対象：J6～J8の日本語科目履修者全員（回答者数：56名）

質問項目：各キャンパスの日本語科目の履修のしやすさについて、複合レベル型科目についてなど

結果：複合レベル型科目がJ6～8レベルであったらいいと思うかについて（表内の数字は%）

はい	44.64
いいえ	16.07
どちらともいえない	39.29

複合レベル型科目の設置について肯定的な評価が多いことが確認できた結果を受け、観光学部の了解と、センター運営委員会での承認を得て、2014年度から「日本の文化・社会C」をJ6～J8レベルの留学生を対象として開講することとした。

(4) 「中級日本語」アンケート、「中級日本語」2学期連続履修の学生に対するインタビュー、「中級日本語」履修者に対するOPIの実施

「中級日本語」は立教GPの一環として2012年度から展開している複合レベル型日本語科目である。

2013年度前期は、学期末に「中級日本語」履修者全12名に対し、アンケート調査を行った。結果からは、「レベルの異なる学生と学ぶこと」、「使用教材」についてほとんどの学生から肯定的な回答を得られた。「日本語の上達」に関しては、12人中10人が「上達した」、2名が「わからない」と回答した。「上達していない」と答えた者はいなかった。「TAの評価」については、TAの個人的な性格に言及する回答がほとんどで、質問項目の見直しが必要である。しかし、どの学生もTAに対して良い印象を持っていた。回答の全体的な傾向から、学習者は「中級日本語」に対して満足していると言えるであろう。また、来学期以降の授業運営に反映できるような具体的な意見も知ることができた。

また、「中級日本語」を2学期連続履修した学生に対するインタビューも実施し（前期3名、後期1名）、複合レベル型クラスの可能性やTAについての肯定的な評価を得た。

さらに、2013年度後期は、履修者の学習効果を測ることを目的として、学期開始時と学期終了時の2回にわたり、「中級日本語」履修者全員を対象としてOral Proficiency Interview Test(OPI)を実施した。

2014年度は、「中級日本語」履修者と非履修者を対象として、OPIを実施する予定である。

(5) 本学留学生へのインタビュー（2013年12月2日～12月16日）

日本語教育センターは、2013年度より、「大学国際化に対する日本語教育プログラムの貢献の評価—参加型評価によるモデル立案—」（基盤研究(C) 課題番号：25390599 研究代表者 小澤伊久美)に協力することにした。この活動の一環として、本学に在籍する様々な留学生のニーズを聞き取ることを目的として、2013年12月に大学院生や学部正規生、特別外国人学生、日本語科目を履修していない留学生など合計8名に対してインタビュー調査を行った。分析を進めるとともに、来年度以降のFD活動につなげていく予定である。

(6) 2013年度の学生による評価アンケート結果（特別外国人学生対象 J 0～J 7）

日本語教育センターでは、特別外国人学生用日本語科目について、J 0からJ 7レベルの日本語科目を履修したプログラム修了予定学生（帰国予定学生）を対象に日本語プログラムに関するアンケートを実施している。2013年度は前期 57名、後期 50名から回答を得た。

質問内容は以下の通りで、自由記述以外は、5：はい 4：まあそうである 3：どちらともいえない 2：あまりそうでない 1：いいえ の5段階の選択式で回答を得た。

1 以前より日本語を聞いて理解できるようになった。

I can listen and understand Japanese better than before.

2 以前より日本語を話すことができるようになった。

I can speak Japanese better than before.

3 以前より日本語を読んで理解できるようになった。

I can read and understand Japanese better than before.

4 以前より日本語で書く力が伸びた。

I can write Japanese compositions (or reports) better than before.

5 以前より多くの日本語の単語を使えるようになった。

I expanded my Japanese vocabulary, and use it in my spoken/ written Japanese.

6 以前より多くの文型を使えるようになった。

I can speak/write Japanese using different sentence patterns.

7 日本語で発表したりディスカッションをしたりする力が伸びた。

My ability to discuss and give a presentation in Japanese improved.

8 日本語で発表したりディスカッションをしたりする自信がついた。

My confidence to discuss and give a presentation in Japanese increased.

9 宿題は日本語の勉強の役に立った。

The homework helped me to learn Japanese.

10 日本語の授業を通して、日本の文化や社会について考えるようになった。

The Japanese class's activities help me think about Japanese social and cultural issues.

11 教師のクラスでの学生への説明や指示は明確だった。

My teachers gave clear instructions and explanations in class.

12 日本語で話す機会が十分にあった。

I had enough time to speak in Japanese during each class.

13 立教の日本語科目数に満足している。

I am happy with the variation of the Japanese classes of Rikkyo University.

14 1クラスの学生の人数は適当だった。

The number of students per Japanese class was appropriate.

15 立教の日本語プログラムに満足している。

Overall, I am happy with the Japanese course of Rikkyo University.

自由記述

立教の日本語プログラムでいいと思った点があれば書いてください。

Please write freely about the Japanese course of Rikkyo University, especially the ways in which it was good.

立教の日本語プログラムで改善すべきだと思った点があれば書いてください。

Please write freely about the Japanese course of Rikkyo University, especially the ways in which it was not good, and any suggestions for improvement.

アンケート結果は以下の通りとなった。

【各設問の平均値】

	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	Q14	Q15
前期	4.60	4.51	4.51	4.40	4.42	4.21	4.09	4.02	4.18	4.19	4.40	4.19	4.04	4.65	4.33
後期	4.30	4.24	4.18	4.26	4.20	3.94	3.84	3.60	3.84	3.68	4.46	4.04	3.92	4.46	4.12

各設問の平均値は数値が高いほど平均的に評価が高かったと解釈できる内容になっている。どの設問も3.5以上でおおむね評価が高かったと言える。学期別にみると、全体的に前期修了生の平均値のほうが、後期修了生のものよりも数値が高いが、各設問の平均の傾向はほぼ同じである。Q1, 2, 3, 4の4技能の向上、Q5の語彙力の向上、Q11の教師のインストラクションに対する評価、Q12の授業活動における学習者の主体的な参加に対する評価、Q14のクラス人数の適正さへの評価、Q15の日本語プログラムの全体に対する評価は数値が高い。しかし、Q6からQ10にかけてのより具体的な設問については、数値としては肯定的にとらえられ問題はないと思われるものの、他よりは値が低い。Q7, 8はディスカッションというやや高い日本語力に関わる設問で、回答学生の日本語レベルにより回答の傾向に差が出るのが原因だと思われる。Q9は、自由記述から機械的な内容である、分量が多いことへのコメントが数点見られたことから、その原因が推察される。学習者への十分な説明を行うことで課題の意義について理解を得る、または内容を工夫するなどの改善が可能かと思われる。Q10は、どのレベルでも日本の文化・社会への理解を深める活動を取り入れることが可能なので、工夫していきたい。

自由記述では、日本語プログラムに多くのレベルが設定されていること、教師の対応などについて肯定的評価があった一方で、プレイスメント・テストで本人の想定より低くレベル評価をされたこと、宿題が多いこと、初級クラスでの発話活動がもっとほしいということ、中級レベルの文法科目のクラス人数が多かったということ、中級レベルであってもJ8科目のような多様な科目があったらいいなどのコメントがあった。

<参考>

【2013年度前期プログラム修了予定学生アンケートの結果の内訳】 (数値は%)

	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	Q14	Q15
5	70.18	64.91	64.91	64.91	56.14	49.12	50.88	45.61	47.37	50.88	61.40	45.61	49.12	75.44	63.16
4	26.32	28.07	28.07	21.05	35.09	33.33	21.05	28.07	36.84	28.07	28.07	35.09	24.56	17.54	19.30
3	0.00	3.51	3.51	7.02	5.26	10.53	19.30	12.28	5.26	12.28	3.51	14.04	12.28	5.26	10.53
2	0.00	0.00	0.00	3.51	1.75	3.51	3.51	10.53	7.02	7.02	3.51	3.51	8.77	0.00	1.75
1	3.51	3.51	3.51	3.51	1.75	3.51	5.26	3.51	3.51	1.75	3.51	1.75	5.26	1.75	5.26

【2013年度後期プログラム修了予定学生アンケートの結果の内訳】 (数値は%)

	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	Q14	Q15
5	58.00	56.00	54.00	56.00	48.00	42.00	40.00	24.00	46.00	32.00	68.00	50.00	46.00	66.00	50.00
4	26.00	30.00	26.00	28.00	36.00	34.00	26.00	38.00	20.00	32.00	22.00	26.00	24.00	26.00	32.00
3	10.00	4.00	10.00	8.00	10.00	8.00	20.00	20.00	16.00	18.00	4.00	10.00	14.00	2.00	6.00
2	0.00	2.00	4.00	2.00	0.00	8.00	6.00	10.00	8.00	8.00	0.00	6.00	8.00	0.00	4.00
1	6.00	8.00	6.00	6.00	6.00	8.00	8.00	8.00	10.00	10.00	6.00	8.00	8.00	6.00	8.00

(7) 2013年度の学生による評価アンケート結果 (全カリ言語B、自由科目)

正規学部留学生が履修する全学共通カリキュラム言語B 日本語科目「日本語基礎Ⅰ／Ⅱ」および自由科目 (特別外国人学生用J 8科目と同時開講) については、各学期末に科目履修者全員を対象に授業評価アンケートを実施した。結果は全学共通カリキュラムの授業評価アンケート報告書に掲載する予定である。これが刊行された後に日本語教育センター部分を転載する。

(8) 2014年度の課題と計画

課題1 複数レベルの学生を対象とする科目の機能の確認

計画

(現状の問題) 新座キャンパスで展開している複数レベルの学生を対象とする「日本語中級」の意義を明確化させる必要がある。

(方策) 学期開始時および学期終了時に、日本語中級履修者と非履修者に対しOPIを実施するとともに、意識調査を行う。

(達成目標) 科目の機能を確認し、日本語教育プログラムにおける位置づけを明確化させる。

(達成状況を判断する方法) OPI (Oral Proficiency Interview Test)、アンケート

課題2 プログラム評価の活動

計画

(現状の問題) 本学における日本語教育センターの各活動の位置づけがセンター内で明確に共有されていない

(方策) プログラム評価についてのワークショップを行い、日本語教育センターの活動をプログラム評価の観点を用いてとらえる試みを行う。2013年度に実施した学生へのインタビューを分析するとともに、学内の教員へのインタビューを行う。

(達成目標) 本学における日本語教育のニーズを把握し、プログラム改善に向けた指針を検討する

(達成状況を判断する方法) ワークショップ、文字起こしデータの分析、インタビュー

2013年度 日本語教育センター運営体制

運営委員会

センター長	：丸山 千歌	(異文化コミュニケーション学部教授)
副センター長	：小林 純	(経済学部教授)
運営委員	：青木 康	(全学共通カリキュラム運営センターコア会議から、文学部教授)
運営委員	：松田 宏一郎	(国際センターから、法学部教授)
運営委員	：奥村 隆	(部長会メンバーから、社会学部教授)

実務委員会

センター長	：丸山 千歌	(異文化コミュニケーション学部教授)
副センター長	：小林 純	(経済学部教授)
センター員	：池田 伸子	(異文化コミュニケーション学部教授)
センター員	：高村 めぐみ	(教育講師)
センター員	：小松 満帆	(教育講師)
センター員	：平山 紫帆	(教育講師)
センター員	：高橋 雅子	(教育講師)
事務局	：森上 美子	
事務局	：関川 瑞枝	

兼任講師

金庭 久美子	長島 明子
川端 芳子	長谷川 孝子
栗田 奈美	林 里香
小島 佳子	藤田 恵
小森 由里	保坂 明香
沢野 美由紀	御子神佳奈
清水 澤子	山内 薫
谷 啓子	山辺真理子

2013 年度日本語教育センター会議開催記録

月	日	
4	8	第 1 回実務委員会打合せ
	12	第 1 回実務委員会
	17	第 1 回運営委員会
5	6	第 2 回実務委員会打合せ
	10	第 2 回実務委員会
	15	第 2 回運営委員会
6	17	第 3 回実務委員会打合せ
	21	第 3 回実務委員会
	26	第 3 回運営委員会
7	15	第 4 回実務委員会打合せ
	19	第 4 回実務委員会
	24	第 4 回運営委員会
9	23	第 5 回実務委員会打合せ
	27	第 5 回実務委員会
10	2	第 5 回運営委員会
	28	第 6 回実務委員会打合せ
11	8	第 6 回実務委員会
	20	第 6 回運営委員会
12	2	第 7 回実務委員会打合せ
	6	第 7 回実務委員会
	18	第 7 回運営委員会
1	7	臨時運営委員会
	27	第 8 回実務委員会打合せ
	31	第 8 回実務委員会
2	17	第 9 回実務委員会打合せ
	21	第 9 回実務委員会
	26	第 8 回運営委員会

【参加者】

実務委員会打ち合わせ：センター長、センター員（日本語担当専任教員、日本語担当教育講師）、事務局
 実務委員会：センター長、副センター長、センター員（日本語担当専任教員、日本語担当教育講師）、事務局
 運営委員会：センター長、副センター長、全学共通カリキュラム運営センターコア会議からの選出委員、国際センター長・副センター長からの選出委員、部長会メンバーからの選出委員、日本語担当専任教員（陪席）、事務局（陪席）

2013 年度活動報告

CJLE Program & Activity Reports (2013)

2014 年 3 月発行

編集兼発行者 日本語教育センター
発行責任者 丸山千歌
発行所 立教大学日本語教育センター
〒171-8501 東京都豊島区西池袋 3-34-1
Tel: 03-3985-4202